

人のたきてゆくにやかて
十四日の朝也。人のたき出たるにいひつけ
て下女をよこさする也

むらうだばかり
いせ物語に。むらうだのまほきましてま
り。圓座をさいへり。彼等のえんざほどに
てのこりしこと

なりひつ 辨儀也
桐葉巻にをりひつ物こもさあるを。なり
うづ物とよむ
もたせてやりつる物
彼をりひつなど引さげて。へりたるこ

るもおきあてなげけは。きく人も物くるほしとわらふ。人
のおきてゆくに。やがておきいでけすおこさするに。さら
におきねはにくみはらたれて。おきいでたるをやりて見
すれば。わらうたばかりになりて侍る。こもりいどかしこ
らうわらば。もよせでまもりて。あすあさまでまでもさふら
ひぬべし。ろく給はらんと申といへば。いみしくうれしく
いつしかあすにならば。いとどう哥よみて物に入てまゐ
らせんと思ふもいと心もとなうわびしう。まだくらきに。
おほきなるをりひつなどもたせて。是にしろからん所ひ
たものいれてもてこ。きたなげならんはかきすて、なご
いひくゝめてやりたれば。いとどく。もたせてやりつる物
ひきさけて。はやううせ侍りにけりといふに。いとあさま
し。をかしようよみ出て。人にも語りつたへとせんどうめさ
ずんじつる哥も。いとあさましくかひなく。いかにしつる

ひくんすれば
云風也。昨日までありし雪の。夜の程にき
えぬらん事。まことしからすといひつめた
る心也。理屈にいひつめし心なるべし

きのふの夕くれまで侍しをいさ。ししき
十四日まで侍しは賢く申あてたるを願ふと
まけす口に申問ふ

ほうしのやうにて
帽子にや。物のふたをいたまきて。わへりた
るさまなるべし

ならん。きのふさはかりありけん物を。よのほどにきえぬ
らん事といひくんすれば。こもりが申つるば。きのふいと
くらうなるまで侍ぎ。ろくを給はらんと思ひつる物を。た
まはらずなりぬる事と。手をうちて申侍つるといひさわら
に。内よりおほせ事ありて。さて雪はけふもでありつやと
のたまはせられたは。いとねたなく口をしけれど。年のうちつ
いたちまでだにあらじと人々けいし給ひし。きのふの夕
くれまで侍しを。いとかしことなんおもひ給ふる。けふ
まではあまりの事になん。夜のほどに。人のにくがりてと
りすて侍にやとなんおしはかり侍るとけいせさせ給へど
きの人のたへいひやる間。后宮へ清少のまゐるこ
きこえさせつ。さて二十日にまゐりたるにも。まづ此事を
御前にもいふ。皆きえつとてふたのかぎりひきさけて
もてきたりつる。ほうしのやうにて。すなはちまうできた
りつるが。あさましかりし事。ものふたにこ山うつくし

四十五段

めでたき物 見事なること
 「めでたき物」めでたき物。たきはいたき。世の字にあたり。めでたきものは。甚多愛せらる。モノといふに同ト
 からしき 唐錦、蜀錦などなり
 かざりたる 延喜式正云。凡唐錦太刀五位以上。桃華葉云。蜀錦三節會。内裏。御禮。行幸等王服用之云々
 用。近代細線錦を著と江次第に有
 六位藏人 官位不審回答。六位の時地下の者も藏人に補し候へは昇殿禁色をゆるされ候云々
 ざふしき 藏人所懸色。禁秘抄云。本員八人。代々皆轉藏人。仍公卿子孫又可然。然太夫多補之。職原抄云。其家子補之云々
 せんトもてまわり
 内侍宣とて藏人奉勅の宣旨を六位藏人の持參。宣旨は給ふむれとむ。天子の仰せを藏人頭承りて其旨を直に宣下するを内侍宣といふ。河海にあり
 大饗のあまくりのつかひ
 大臣の大饗に蘇甘栗の使とてあるに。六位藏人參る事。大臣大饗は大臣に任せられたる人。大納言以下。辨少納言。官外記。などまで饗應せらる。事。江次第二日。大臣大饗。正月四日。左大臣。藤原氏。大臣。用。衆。藤原。以三日。可。行。由。以。三。事。天。是。非。二。日。時。依。可。進。蘇。甘。栗。使。並。饗。衆。樂。部。等。事。藏。人。到。中。門。以。三。家。司。令。進。

○増訂枕草紙春曙抄卷之五

増訂枕草紙春曙抄中卷

めでたきもの

からしき。かざりだち。つくり佛のもく。いろあひよく花
 おさながくさきたる藤の松にかよりたる。六位の藏人こ
 そなほめでたけれ。いみしき君達なれどいえしも給は
 ぬあやかりものを心にまかせてきたる。何をいろすがた
 などのいどめでたきなり。所のしう。さふまき。たゞの人の子
 どもなどにて。殿原の四位五位六位もつかさあるが下に
 うちゐて。何と見えざりしも。藏人になりぬれば。えもいは
 ずぞあさしくめでたきや。せんじもてまあり。大饗のあ
 まくりのつかひなごにまありたるを。もてなしきやうよ
 うま給ふさま。いづこなりしあまくりたり人あらんとこそ
 かほゆれ。御むすめの女御后におはします。まだひめ君な
 ど聞ゆるも。御使にてまゐりたるに。御文とりいるより

蘇甘栗等一

蘇二折櫃二合 蘇大二 一合 甘栗大合

居士高坏二入 外居一箇 小舎人二人 衣冠

相具。住丁二人 著荒袋一持。藏人著

宵色袍二於三對座二可進飲

増。源云。江次第抄云。蘇牛乳也。甘栗平煎

也。西宮記云。蘇團(大一小)平栗子十

六籠(上八中八)此蘇甘栗の使の前後にも

蘇甘栗を給ふ事みえたれども。この蘇栗の

序に給はるれば使はなきなり。荷田在滿

江次第記に。蘇甘栗使は大變なひ大

臣家蘇甘栗を下使之と見ゆ

御使にて。藏人のまゐる。蘇抄抄云。御使

事。依入依事有。三差別。藏人頭。近衛將。五

位藏人。六位藏人等也。下尋

御文より。より

女御后まだ前君の方へ取いる。一。蘇抄抄

云。御書事。后女御以下於三女房。無三定子

細。勿論。料紙女房許多薄様。後々種紙也

上下尋

かうふりえておひり事近く

六位藏人巡番して五位に叙して。藏人をさ

りて。地下におひり事。前註

其御たまはりなご申て

御給之。巡番のいち受領なご申す事。

うちはじめ。まどねさし出る袖ららなど。あけくれ見しも

のどもおほえず。下がさねのまりひきちらして。あふなる

はいます。こしをかしよう見ゆ。みづから益さしなどま給ふ

を。我心にもおほゆるらん。いみしうかしてまり。べらにるし

る人々にも藏人に成ては同やうにつれありき

家の君たちをもけしきはかりこそかしてまりたれ。おな

じやうにうちつれありく。うへのちかくつかはせ給ふ

まなど見るは。ふたくさへこそおほゆれ。御文かよせ給へ

は。御すりのすみすり。御うちばなどまらり給へは。われ

つかふまつるに。みとせよとせはかりのほどを。なりあま

く。物のいろよろしうてまじろはんはいふかひなきもの

なり。かうふりえておひりことちかくならんだに。いのち

は御前へまゐる事もなくれば。古今に命にままりてなしくある物はまよめる詞

よりばまざりて。おしかるべき事を。其たまはりなど申て

まどひけるこそ口をしけれ。昔の藏人はことしの春より

こそなきたちけれ。今の世にいはしりくらへをなんする

はかせのさえある

御家にて御明進などあり。蘇抄云。明進

は十三程を以家業とす。紀傳道は三史史記

漢書後漢書文選等を家業とす

下らうなれども

官位ひきき事。文章博士は從五位下。大

學博士は正六位下の相當。官位令にあり

御ふみの師にて

帝の御師也。御侍讀とて候する。蘇抄

抄云。紀傳御侍讀能々可有。清濁一色之所

願文

御祈禱進等につく文也本朝文時。管家文

草などに願文數多可

いづら御さきやうあふらおせし

くらくて人はよみやみたるに才ある法師に

そらに覺えて一人讀誦する也

后のひるのきやうけい

靈行啓春宮后宮の御ありきを行啓といふ

みやばつめのさほうしく

立后の左法禁中のごとく狹大床子などし

つらふる事。こいは定子の皇后宮に立給

ひしはつめの左法しき事にや。正曆元年六

月一日なるべし。榮花物語。やく藤壺の

巻に。上東門院立后の所云。此たは藤壺

の御しつらひ大床子たて。御帳の前のこま

犬なども當の事ながらめごまりたり云々

内膳御へついわたし奉り

御使にまわれる六位藏人への會禮

のどもおほえず。下がさねのまりひきちらして。あふなる

はいます。こしをかしよう見ゆ。みづから益さしなどま給ふ

を。我心にもおほゆるらん。いみしうかしてまり。べらにるし

る人々にも藏人に成ては同やうにつれありき

家の君たちをもけしきはかりこそかしてまりたれ。おな

じやうにうちつれありく。うへのちかくつかはせ給ふ

まなど見るは。ふたくさへこそおほゆれ。御文かよせ給へ

は。御すりのすみすり。御うちばなどまらり給へは。われ

つかふまつるに。みとせよとせはかりのほどを。なりあま

く。物のいろよろしうてまじろはんはいふかひなきもの

なり。かうふりえておひりことちかくならんだに。いのち

は御前へまゐる事もなくれば。古今に命にままりてなしくある物はまよめる詞

よりばまざりて。おしかるべき事を。其たまはりなど申て

まどひけるこそ口をしけれ。昔の藏人はことしの春より

こそなきたちけれ。今の世にいはしりくらへをなんする

口士の才智ある。花鳥博士は博達之士といふ事

はかせのさえあるはいとめでたしといふも。かろかななり。

かほもいとにくけにけらうなれども世にやんごとなき物

におもはれ。かしこき御前にちかづきまらり。さるべき事

などとはせ給ふ御文の師にてさふらふはめでたくこそお

ほゆれ。願文も。さるべきもの。序つくり出してほめらる

いとめでたし。法師のさえあるすべといふべきにあら

ず。持經者のひとりしてよむよりも。あまたが中にて。時な

なごに經よむ事。才ある法師は猶と

ごさだまりたる御さきやうなごに。なほいとめでたき也。

くらうなりていづら御さきやうあふらおせしなどといひ

てよみやみたるほどまのびやかにつづけるたるよ。后のひ

るのぎやうけい。御うぶや。みやはじめのさほうま。こま

いぬ。大志やうじなどもてまらりて。御ちやうのまへにま

つらひする。内膳御へついわたしたてまつりなどまたる。

ひめぎみなど聞えした。人ごこそ露見えこそ給はね。一

百寮訓要云。内膳司天子の供御を奉行する所。たさへは膳部所など申所同事。昔は内膳の御飯ならは主上はきこしめさぬ事。おももろく御膳の具は。此所におもる云々。立后有ては寮中の儀式をつすまなるべし

今上一の宮 キョウジヤウイノ
一條院の第一の皇子親王の御事や。
御母后宮定子なれば御叔父に内大臣伊弉中納言隆家卿と上陸部あり

四十六段

なまめかしき物
優美なる心
きんぢち 公卿は攝家の子息清顯など
申 中
うへのはいし 衆物

攝政御白を申之 藤原の祖神なれば必一人參詣ある事
の人の御ありき。春日まうで。えびぞめのおりもの。すべて紫なるはなにもくくめでたくこそあれ。花もいともかみも。むらさきの花の中にはかきつはたぞすこしにくき。いも色はにくくわさ 六世藤原の御直家
るはめでたし。六位のどののわすかたのをかきしにもむらさきのゆゑなり。ひろき庭に雪のふりまきたる。今上一のみやまだわらはにてかはしす。御をち上達部などわかやかにきよげなるにいだかれさせ給ひて。殿上人などめしつかひ。御馬ひかせて御覽心あそはせ給へる。思ふ事おはせじと覺る

なまめかしきもの 直衣きたる姿
いそやかにきよげなるきんぢちのなほしすがた。をかしけなる童女のうへのはかまなどわざとにはあらで。ほころびおちなるかきみはかりきて。くすだまなどながくつけて。かうらんのもとにあふまごしかへしてゐたる。わか

夏のきちやう
几帳の帷夏は生を用。またうちかけては。几帳のかたびらのすそを帳簾にうちかけてる

ひげこのをかかしうめたる 髯龍の竹を給のくなどにてそめて五葉の露にゆひつけし
みへがされのあふき 河津抄云。格扇の兩方の上三重づゝ、欄柱にてつみみて。色々の糸にてさちて。あはひむすびにしておきたる。五重もちなす

くちまがたの 空の几帳の給。格扇抄清涼殿の所にははく。四面有。几帳。帷夏生具。二胡。琴。笙。冬柄木形云々
冬柄木形云々 (改訂)文華帖所載木形圖



「訂」此所は高橋抄異あり。心みに左にいふべし

き人のをかかしけなる。夏のきちやうのまたうちかけて。まかの女房の昔たる物 五重
ろきあや。ふたあひ引かさねて。手ならひきたる。うすやうのさうし。むらごの糸まてをかしくもちたる。柳のもえたるに。青きうすやうにかきたる文つけたる。ひげこのをかしようめたる。五えふの枝につけたる。みへがさねのあふき 三重
さいつへはあさりあつくなりて。もどなごにけ也。よくしたるひわりで。しろきくみのほそき。あたらしくもなくていたくふりてもなき 竹皮屋
ひはだ屋にさうぶうるはしくふきわたしたる。あさやかなるみすのしたより。くちまがたの イ几丁のくちまがたのトア可用
あさやかに。いとつやうかにてかよりたるひものふきなひかされたるもをかし。夏のもかうのあさやかなるすの 藤の外
じのかうらんのわたりに。いとをかしけなるねこの。あかきくひつな 首綱之猫の引つな
白きふたつきて。さかりのさくひつきてひきありくもなまめいたり。五月のせちのあやめの藏人。さ

木がたを登したる白き衣に縞かきたるを
をみのきんだち

【増】源云。小はは役名也。大忌といふもあり。それをつむむる人は多く青摺をきる故に。上文にも青摺きたる女房を見たり。をみの女房といへり。青摺のこを小忌衣といふは。後世まで誤れる名也。源氏にをみにて青摺すがたなるもありと見えたるにて思ふべし。

五せちのつばねをみなこぼちすかして
辰日の儀式事はてい事なるべし
其夜まではなほうるはしくこそあらめそのたまはせて。此儀式を繪あかすおぼす故に。扇などこぼちても。猶夜までは無故のさまやつさでうるはしくてあれさて。さもいたくしなさせ給はぬと。后宮の御はちちひなるべし。

小兵衛といふが
是后宮の女房也。前に常陸介が事を右近内侍にまればせし人。かしづき十人の内にや

さねかたの中將 勳物云。實方正暦二年九月右中將元右馬頭五年九月八日左中將あし引の山井の歌
足引は山の枕詞也。我思ひのむすはれたるを山井の水にそへたり。下句は彼赤紐のさけしを氷をひもさいふにやせてよめり。此歌後拾遺集五に實方の歌也。彼集にては體のうたなれど。此歌流にはたゞならずさあれば體にや

をみのきんだちはどに^外るて。ものいひなごす。五せちのつばねをみなこぼちすかして。いとあやしくてあらする。い

とことやうなり。其夜まではなほうるはしくこそあらめ

どのたまはせて。さもまどばさず。きちやうどのほころ

びゆひつ。こほれ出たり。小兵衛といふがあかひものと

けたるを。これをむすはゞやといへば。さねかたの中將よ

りてつくるふにたゞならず

【實方の歌】
あし引の山の水はこほれるを

いかなるひものどくるなるらん

といひかく。年わかき人のさるげそうのほどなれば。いひ

にくきにやあらん。返しもせず。そのかたはらなるおきな

人たちもうちすてつ。ともかくもいはぬを。みやつかさ

なごはみ。とゞめてき。けるに。久しくなりけるかた

はらいたさ。ことかたよりいりて。女はうのもどにより

て。【宮司の詞】いかに返す給はぬとぞ。なごかうははするなごぞ。くくなるに。四人はかりをへだて。るたればよく思ひえたらん。いひにくし。まして哥よむとしりたらん人の。おほるけあらざらん。はいかぞかどつ。ましきこそばわろけれ。よむ人はさやしいへる詞也。いどめでたからねど。ねたふとこそはいへど。つまはじきをしてありくも。いとをかしかければ。うすこほりあわにむすべるひもなれば。かきす日かけにゆるふはかりぞ。

四人はかりをへだて。いかなれば
清少は小兵衛といふは四人はご隨てたれば。たさひよき返歌を思ひえたりとて人をさしこえては返歌いひにくしと云

いよむさしりたらん人の
歌よみさきたる實方の。大かたならぬ此歌には。いかにでか幸輔に返歌すべきも清少もついでましく憶せしこそ折節わろけれと云

よむ人はさやしいへる詞也
よむ人はさやうに返歌せずやあらんといへますことば云

いどめでたからねど
たさひめでたからぬ歌にも返歌せぬは煩くあるとこそいふ習ひなれ。まして是程の歌に返し給はぬはいかにさしこめばけきす云

つまはじきをして
人を拒み給しむるさま云。帯木巻に。むくつけき事とつまはさまをしてさあり。空帯巻にもあり

うす氷あわに哥
彼實方の山井は氷に。いかにでさくる紐とささかめしなうけて。沫にむすべるはかなき氷なれば。日影にゆるびさくるぞも理りたる云。是も紐に氷なそへ。日影のかづらな日影にそへたり。此哥千載集にはうす氷さあり尤可憐也。さまりも半ぞあり尋常同心なるべし

【増】源云。萬葉四「玉のをあわをによりて
むすべればありての役もあはさらめやも」此あわをは今俗らわら結びといふもの云。それを水泡にいひかけたり

【増】源云。萬葉四「玉のをあわをによりて
むすべればありての役もあはさらめやも」此あわをは今俗らわら結びといふもの云。それを水泡にいひかけたり

座さいふ。皆まわり調りて、儀座に出御なる。殿上人ども、儀座に侍ふ。主上御直衣に指貫にて御香を召る。主上御指貫をめさる。事此時の外はなし。但御鞠の時、儀座に准下て召る。儀座におはします。大番小番あり。びんたいちなどうたふ。大番小番などいふ事あり。下略。江次第委。圖は雲圖抄にあり。行事の蔵人いさぎびしうもてなして、物見の人などの亂入を禁する。江次第委。蔵人頭行事蔵人立。舞殿東戸下。開闔。舞回禁。亂入。理髮童女陪從下仕之外不可入。頭若行事蔵人之外不可入。何二戸外。上。時。かいつくろひ二人。五節のかしづきのたぐひ。後追遠の同音に一條院御時。皇后宮五節奉り給ひけるに。かいつくろひつうまつりける人の。つけて侍けるあか紐のさけて云々。これ江次第に理髮一人とある物なるべし。猶これひりはなどの給ふ。殿上人の物見の人を具しきたりて。是一人はいれよと伝るさまなり。こそしくいひつゝ。蔵人。殿上人などにいさぎびしくいひ。蔵人の。后宮の御つたの人々には何ともえはざりしこと。むみやうさいふびはの。無名は。拾芥云。上東門院名物也。或説。丸。上東門院令。半時亭。二の時爲。回。燒。先。皇。案。せ。み。丸。の。といふ。説。も。あ。れ。む。つ。し。り。儀。座。に。有。し。ゆ。る。定。子。の。御。方。へ。も。も。て。わ。た。ら。せ。給。へ。る。な。る。べ。し。ま。て。の。ち。上。東。門。院。の。名。物。と。は。な。れる。に。や。

さへて。おもにくさまでいへは。殿上人など。猶これひとりばかりはなどのたまふ。うらやみあり。いかでかなどかた人もゆるさん。后宮。宮の御かたの女房二十人はかりおしこりて。こころいふに。ひたる蔵人などもせず。戸をかしてあけてごらめきいれは。あきれて。いとこはすなせ世かなとてたてるもをかし。それにつきてぞかしづきとももみない。けしきいとぬたけなり。うへもあはしませて。いとをかしと御覽じおはしますらんかし。わらはまひの夜はいとをかし。どうだいにむかひたるかほごもいとらうたけにをかしかりき。五節の蔵の。主上一條院。ひみやうといふびはの御ことを。うへのもてわたらせ給へる。見なごしてかきならしなどすと。いへは。引にはあらずをなごしてまごふりにして。これが名よ。いかにどかやなごきこえとするにたういとはかなくなむなしとのた

しけいしや。浪景舎女御之后宮の御いもうと。こそいえさせ給へり。故殿とはかくれ給へる父君の御事。中。白のしげいさへまからさせ給へ。假都のきみ。勳物云。隆圓、聖家、兄弟正曆四年。長。五。不。師。師。寛。弘。八。年。四。月。權。大。僧。部。長。和。四。年。二。月。卒。廿。七。日。な。か。へ。と。お。は。い。其。座。を。琴。に。は。か。へ。ま。と。き。し。げ。い。し。や。の。お。ぼ。した。る。物。を。さ。と。江。淡。云。才。不。替。是。座。名。也。唐。人。寶。之。于。石。三。買。ト。云。イ。ナ。カ。ヘ。ツ。ト。云。ケ。レ。バ。以。之。爲。座。名。云。々。拾。芥。名。物。部。にもあり。【訂】原本にはなほひとあり。一本にはおほいさあり。こはおほいの方よりし。いはし。音。便。に。て。敬。語。に。お。ほ。し。さ。い。ふ。べき。を。音。便。に。て。お。ほ。い。と。い。ふ。こ。此。例。源。氏。な。ど。に。多。し。此。御。ふ。え。の。名。を。隆。圓。知。給。は。れ。ば。此。后。宮。の。御。詞。の。秀。句。を。し。ら。で。只。御。あ。い。さ。つ。な。さ。と。恨。み。給。ふ。こ。

まはせたるは。猶いとめでたくこそ覺えしか。まはせたるは。猶いとめでたくこそ覺えしか。しけいしやなどわたり給ひて御物語のついでに。まろがもどいしとをかしけなるさうのふんこそあれ。ことのもえさせ給へりとの給ふを。僧都のきみの。それはりうえんにたうべ。かのれがもとにめでたきさん侍り。それにかへさせたるへと申給ふを。きよもいれたまはで。猶こと事をの給ふに。いらへさせ奉らんとあまたたび聞え給ふに。猶物のたまはねは。宮の御まへの。いなかへごとおほいたる物をどのたまはせけるが。いみしうをかしき事ぞかざりなき。此御ふえの名を僧都のきみもえまり給はざりければ。たうらめしとぞおほしたる。これはしきの御さうしにおはしませしとときのことなり。うへの御まへのいなかへごといふ御ふえの候なり。御まへの候ものどもは。琴も笛もみならづらしき名つきてこそあれ。びはうげんじ

げにあやまちてけりさはいはで
使のあやまちてこそ所へもてゆきて。我あ
やまりたるさはいはで。清少のそこへもて
ゆけさいひ付給ひし口かたくあらがふま
ま。

なむつもたる物
萩などほりうふんとてなるべし。爲仲朝臣。
陸奥の任果て上洛の時。宮城野の萩を長櫃
十二合にいでて大京の事。長明無名抄に有
り。

いみしくせいすれど
清少などやうの女ごち有ていみしくせいし
いへどもおちさるさま。

なめげに物いひ
愛領の身のいきほひにおこりて無禮なる心
さりとて我をばいひさき
さやうに無禮にいふさも我を何せんさ
こりたるけしき。清少は后宮の御方の人
にて。愛領をいやしむる事勿論。されど
も愛領はいきほひあれば。
おひてゆけし。文をさりかへさまほしく
て追て行けども。震の外まではえ出れば。
すもまに立さまりて。飛も出まほしくて
見ぬたるさま。
すゝなる事云々
[訂]弘云。是より以下段落に至る數行は。猥
褻がましければ。學校などには合くべし
しひて引ますれど。

きたるねたし。けにあやまちてけりさはいはで。口かたう
あらがひたる。人めをだにおもはずは。はしりもうちつべ
し。おもしうき裁す。きなどをうゑて見るほどに。ながび
つもたる物すきなどひきさけてたゞほりにはりていぬる
こそわひしうねたかりけれ。よろしき人などのあるをり
いなぬさ。
はさもせぬものを。いみしうせいすれど。たゞすこしなど
いひていぬるいふがひなくねたし。ずりやうなどのきて。
なめげに物いひ。さりとて我をばいかゞと思ひたるけは
ひにひ出たるいとねたけ也。見すまじき人の。文をひき
をひりて。
どりて。庭にかりて見たてるとわびしうねた。おひて
ゆけど。すのものとにさまりて見るこそ。とびもいでぬべき
こゝちすれ。すゝなる事ばらだちて。おなじ所にね
ず。みじくり出るを。まひてひきよすれど。わりなく心こ
なればあまりになりて。人もさはよかなりとゑして。かい

[訂]原本引ますれどさある也。夫の火心
引ますれど。今イ本に従ひつ
入もさはよかなりとす。
あまり女の心はければ。男もはらだちて。
さあらばよし。と怨下うらみて。姿など引
かづきてふしたる。
あやにかりて。同所ながらに別々にうむ
きわて。あやにくに寒くなりたれば。
さすがおきあらんあやしくて。人は皆れ
たるに女一人おきあたらんもさすかにおや
しければ。其まふしたるさま。おらん
は居たらん。春たてば花とや見らんも見
たるらん心。其詞。同ト
やからるびより。寒く物おそろしさに念
トわびてやがてそりり男の方へころびよ
りて。
なほこそはかり給はめなど
此上にも猶心こはくし給はんよと女をこら
しめいふ。
かたはらいなき。はづかしくをかしく氣味
あしき心。
[増]源云。旁痛の義。今俗にいふ氣のどく
によくかなへり
せいせできく。客あるにないひをさもいは
で。客の前にはしかられれば。
さいぬたるかもしらで
其ぬしのきいぬるをしらでうはさを陰ご
する。

くゝみてふしぬるのち。いとさむきをりなど。只ひとへ
むくたりさまなるべし。
ぎぬばかりにて。あやにくがりて。大かたみな人もねたる
にさすおきおきあらんあやしくて。夜のふくるまゝにね
たかおきてぞいぬべかりける。など思ひふしたるに。おく
にもどにも物うちなりなどして。おそろしければ。やをら
まろびよりて。きぬひきあふるに。そらねしたるこそいと
ねたけれ。なほこそはかり給はめなどうちいひたる
所まで省くべし。
かたはらいなきもの
まらうとなどにあひて物いふに。おくのかたはらうちとけ
ごと人のいふを。せいせできくこゝち。おもふ人のいたく
おひておなじ事したる。きゝるたるをもしらで人のうへ
いひたる。それは何はかりならぬつかひ人なれど。かたは
らいたし。旅だちたる所ちかき所などにて。はずどりいさ

おのれがゆるにかなしきまふ いさほし
く思ふ心なり。伊勢物語。ひさつこにさへ
ありければいさかなしうし給けり云々

こまによしもおほえぬわがうた きく人
はよしもおほえぬおのが言を。又の鏡
さのみよしもおほえぬ清少のうたを。友
達のあいさつに。人のほめしなご人に
かた。但初の鏡可然なり

またねもひきさのへぬ琴 よくしらへ

心ひきさつをやりて 人のへぬ事
人もゆるさぬ不堪の所作を。おのが心ひき
つにまんとて彈する
いささしう 前々のかたはらいたき物の品
々をうけて。是らさへあるに。ましてなご
いふこころ

さしぐしみがくほど さしぐしみがくほど
白氏文集樂府云。石上卿玉管玉管欲成中
央折
おほの
[増]弘云。おほのさいふに同ト
さころせく久しくなごや
車などのゆたかなる物はくつがへるも所従

れかはしたる。にくけなるちをかのれがこよちにかな
しとおもふまゝに。うつくしみあそはし。これがこゑのま
ねにて。いひける事などかたりたる。さえある人のまへに
てさえなき人の。物おほえがほに人の名などいひたる。こ
とによしとおほえぬ我うたを人にかたりきかせて。人
のほめし事などいふもかたはらいたし。ひとのおきて物
がたりなどするかたはらに。あさましううちとけてねた
る人。またねもひきさのへぬ琴を。心一つやりてさやう
のかたしりつる人のまへにてひく。いとさしう。すまぬむ
このさるべき所にてしうとに逢たる

あそましきもの

さしぐしみがくほどに。物にさへて折たる。車のうちかへ
されたる。さるおほのかなる物はどころせく久しくなご
やあらんとこそおもひしか。只夢の心ちして淺ましうあ

く物につかへなごして。しつかにほどへて
こなたふれめと思ひしに急にたふれて。夢
のやうにあさましき

からすのいとちかくかうと
櫻園花集二十歳吟
大僧正覺思
「遠こはわたおさりする山がらす今は
うごぞればなけれける

のり弓 河海抄云。贈射。清和天皇の貞觀二
年正月十八日贈射。贈射は天子弓場殿に幸
して弓を御覽する。仲春の月弓を見る事
禮記より出たり。四府左右兵衛の舍人射之
左右の大將射手の奏をさる。事果て奏を給
ふ。近衛の管領なる故。猶江次第奏。雲
圖抄に圖あり

くちをしき
[増]弘云。今俗にいふ残念の意によくかなへ
せらふ 正月の三節會。十一月豊明の節會
など

佛名 前註四の卷にあり
御物思には。四方拜などの外は主上出御な
ければ。禁秘抄云。御物思之時想不出。御
他殿會中。諸事於三殿中。有之。或出。御廣

○増訂枕草紙春曙抄卷之五

やなし。人のためにはづかしき事。つよみもふくちもあ
どなもいひたる。かならずきなんとおもふ人をまぢあか
して。あかつきがたにたゞいさゝかわすれてぬいりたる
に。からすのいとちかくかうとなくにうち見あけたれば
ひるになりたるいとあさまし。てうはみにどうどられた
る。むけにしらす見ずきかぬ事を人のさしむかひてあら
がばすべくもなくいひたる。ものうちこほしたるもあさ
まし。のり弓にわななくわななくひさしうありてはづし
たる矢の。もてはなれてことかたへ行たる。

くちをしきもの

せちる。佛名に雪ふらで雨のかきくらしふりたる。せちる
其外可然儀式の折
さるべきをりの御物いみにあたりたる。いとなみいつし
かとおもひたる事。さばること出て俄にとまりたる。
いみしうする人の子うまでとしごろふしたる。あそびを

前二不問之時例也。凡如四方拜一者。雖三御物
忌一或出三御東庭於三小初拜二不出御。其因
房御申。依三神明天道一也。然者如三御物一
多出三御廣間一也。同記云元三御物忌如女官
使取等三參簡。他人外宿候三殿上。不參三御
前二不下略
やづかへ所などになじやうなる人
宮仕する所などにて位おさらぬ人なり

わびては 我がさまをあまり見せまほしき
にうち路てはの心也
増弘云。小町が「わびぬれば身をうき草のれ
をたえてさそふ水あらばいなんぞ思ふ」
などいへるをも思ふべし。人の心もわびぬ
ればさまんくなるものこそを思ふ示せる
こ

すきんくしからんけすなどにも 物すき
なる下衆などにも見せまほしきと。下
衆に見せんは本意ならぬとさるべき人の見
ざりしが口をしきにうち路ていふ詞
五月の御さうどのほ
年三まで正五九月には精進などする事也。
河津云。長壽經云。若有二善男女等。修二
之齋戒。忽脱三諸難等。獲三殊勝福利。又曰天
帝以二正月五月九月二巡三向南列二註。記衆生
作業一云々
稱名院云。塗籠は佛道のやう
なりごめの 稱名院云。塗籠は佛道のやう
にしておく所也。文庫などのやうなる体也。

もし見すべき事もあるに。必きなんと思ひてよびにやり
つる人の。さばる事有てなどいひてこぬくちをし。男も女
もみやづかへ所などは。おなじやうなる人もろともは寺
へ申うで。物へもゆくにこのもしうとほれ出て。よういは
けしからず。あまり見ゆるしとも見つべくはあらぬに。さ
るべき人の馬にても車にても行あひ。見ずなりぬるいと
口をし。わびてはすきんくしからんけすなどにて。人に
かたりつべからんにて。おがなともふもけしからぬなめ
りかし
是より清少の郭公間に行し物語
五月の御さうじのほど。しきにおはしすに。ぬりごめの
まへ。ふたまなる所をこにまつらひしたれば。れいさま
ならぬもをかし。ついたちより雨がちにてくもりくらす。
つれくなるを。郭公の聲尋ありかはやといふをきいて。
清少に催されて
われもくと出たつ。賀茂のおくになにがしとかや。七夕

のわたるはしにはあらで。はくき名どきとえし。そのわた
りになん日ごとになくど人のいへは。それは日ららしな
たふる人も有しん
りどいらふる人もあり。そこへとて。五日のあした。みやつ
かざ車のこといひて。北のちんより。さふたればどがめな
き物ぞとて。さしよせて四人はかりがのりてゆく。うらや
ましがりていま一つして。おなじくはなごいへは。いなご
おほせらるればきくもいれず。なごけなごさまにて行に。
うまはといふ所にて。人おほくさわく。なにごとするぞと
とへは。てつがひにてまゆみいるなり。しはし御らんじて
おはしませとてくるまどとめたり。右近の中將みなつき
給へるといへど。さる人も見えず。六位などのたちさまよ
へは。ゆかしからぬことぞ。はやくすぎよとて。ゆきもてゆ
けは。道もまつりのころおもひ出られてをかし。かういふ
所にはあきのぶの朝臣のいへあり。そこもやがて見んと

なにかしとかや
「訂」萬歳抄には何ぞきこいやとあり。萬歳に云。
加茂の奥に何さきとほ。私按するに。加茂
のおくに鶴川といふ所有にや。古歌に
「鶴の川風たちね七夕のもみちさばかり波
やうくらん」
にくき名どきとえし
いにくき名の橋などやさしき名にはあらでき
北のちん 拾芥云。經殿御前平門云。北門
さみだればさめなき物ぞ
よのつねは乗車の法度あれども五月の雨中
にはさめなきと。延喜式云。凡乗車出
入宮城門一者妃以下大内侍以上應三宮外
四位已下及内侍者隨出入土門一但不得
乘車つればゆるさるなるべし
河津云。左近馬場は一條四洞院。右近馬場
は一條大宮也
つがひにてまゆみいる
花鳥餘情云。手結は右近の眞手結也。五月
五日にあたり。又云てつがひは馬弓の時
二人づいつがひて射る事也。但未考之云
々。猶伊勢物語。ひちりの註。抄に委。袖中
抄云。後醍醐法性寺入道殿にて。五月五
日の心を詠けるに「永き恨も花の袂にかな
る也けふや眞弓のひかりなるらん
右近の中將みなつき給へり
花鳥云。乙殿屋さて左右近の馬場にあり。
五月の騎射の時中少將着座す云々
しのかたさきたるさう

禁中の下侍。齋堂所などに馬形の障子あり。禁秘抄に馬形障子波瀾也とある是也。やうの事かなぞらへたる障子なるべし。あじろ屏風。山里びたるあじろ屏風。有。河津本巻に。山里びたるあじろ屏風。有。河津云。普通の網代にて張たる屏風也。昔は山莊などの古めかしき調度には定る事也。漆骨片面を張て細組にて閉合せたる物之。屏風といふ也。はしちやくあさはかなれど。端近く淺くはかき居なるべし。イ本ニちうめきてはしちかなれど。さば鹿などのやうにて。奥ふかかられど面白き家居也。

いれといふ物。清少などへ馳走に去年の稻取出てこかせて見する也。源氏の須磨の巻に三月はかりに馬に稻を飼し事あり。古は秋の稻を其まゝ置しとみゆくるべき。増弘云。和名抄機部に反轉久流閉積とある是歟。又田舎の俗に稻をこきて後穂なうつ長長にくるりぎと云ものあり。からみにあるやうなる。唐繪などに書たることくるはしき懸盤なるべし。ひなびたり。田舎ものめきたる心也。懐しくてくはざるをいさむる詞也。

いひて。車よせてかりぬ。中だち。事ぞきて。馬のかたかき。たるさうじあじろびやうぶ。みくりのすだれなど。ことこらにむかしの事をうつしいでたり。屋のさまもはかなだちて。はしちかくあさはかなれど。をかしきに。げにぞかし。かましど。思ふばかりになきあひたるほどよぎすの聲を。口をしう御前に。きこしめさず。さばかりしたひつる。八々にもなどおもふ。所につけてはかゝる事をなん見るべき。とて。いねといふものおほくどりで。わかき女どもの。きたなげならぬ。其わたりの家のむすめをんななどひき。ゐてきて。五十六人してこかせ。見もきらぬ。べきものふたりしてひかせて。うたうたはせなどするをめぐらし。てわらふに。郭公の哥よまんなどしつるわすれぬべし。からるに。あるやうなるかけはんなどして物くはせたるを。見ゆる人なければ。家あるじ。いとわろくひなびたり。か

あるもなごせめ出して。ある物を何にも出せせめ出ても。こくひ給はめさ。イななもさば。出せさ。可也。とりはやし。とりしてはやす。馳走するさまなるべし。つきなみてはあらん。替也。女官などの機織につきなちびてくふやうにはいかにあらん。行儀うるはしくはえくふまじき。恥たる心にや。さばれみちにて。さもあらば。あはれ。おもしろ。うのはかき。卵花。おもしろ。白くうら。背き夏。の衣也。

あるもなごせめ出して。ある物を何にも出せせめ出ても。こくひ給はめさ。イななもさば。出せさ。可也。とりはやし。とりしてはやす。馳走するさまなるべし。つきなみてはあらん。替也。女官などの機織につきなちびてくふやうにはいかにあらん。行儀うるはしくはえくふまじき。恥たる心にや。さばれみちにて。さもあらば。あはれ。おもしろ。うのはかき。卵花。おもしろ。白くうら。背き夏。の衣也。

ゝる所にさぬる人は。ようせずは。あるもなごせめいだし。てこそまゐるべけれ。むげにかくては。其人ならず。なごいひて。とりはやし。此下わらび。つづからつみつる。なごいへば。いかで女官などのやうに。つきなみては。あらん。なごいへば。とりおろして。れいのは。ひおし。ならはせ。給へる。あま。たちなれば。とて。とりおろし。まかなひ。さわら。ほご。に。雨ふりぬ。べし。と。いへば。いそぎ。て。車にのる。に。さて。この。うた。は。こゝにて。こそ。よま。め。と。いへば。さ。は。れ。み。ち。に。て。も。なごいひて。卵花。い。み。しく。さ。きた。る。を。折。つ。く。る。ま。の。す。だ。れ。そ。は。な。ご。に。な。が。き。枝。を。ふ。さ。さ。した。れ。は。た。う。の。に。な。が。さ。ね。を。こ。に。か。け。た。る。や。う。に。ぞ。見。え。け。る。と。も。なる。を。の。こ。ご。も。い。み。し。う。わ。ら。ひ。つ。あ。じ。ろ。を。さ。へ。つ。き。う。が。ち。つ。こ。ま。だ。し。く。さ。し。あ。つ。む。な。り。人。の。あ。は。な。ん。ど。おも。ふ。に。さら。に。あ。やし。き。法。師。あ。やし。の。い。ふ。か。ひ。な。

たまさかに見ゆるいさ口をし
前にさるべき人の馬にてもくるまにても行
あひ見ずなりぬるいさくちをさし。此段の
願の下にていひし首尾なるべし
此車のさまをだに人に

尋みみて人に器傳へさせむと思ひしに。よ
まされば。此車の卯花の風流をだにさ。こ
前に人にかりつべからんにてもがなと思
ふもけしからぬなめりさいひし首尾なるべ
し

一條殿のまき 拾芥云。一條殿。一條南大宮
東二町。爲法住持大臣爲光家。この爲光を
恒徳公と云
侍從殿 勳物云。公信。恒徳公六男。母藤徳
公女。長徳元年九月十九日侍從
つちみかごさまへ

土御門の方へ。正親町の南。鷹司の北に
て。東西の小路也。四以下内侍など御車
して出入する門也。延喜式前註
しげん

「[萬]抄にはしげんしきと有り。是すすし。
さて按るにしげんしきしはしきしきいふべ
きみ餘りに急ぐ故にしげんしきはいへる
也。其さま見るが如くいと面白し
さうしきものはつて
「[萬]抄抄井ニイ本には。さうしき三人はか
りものはつてあり。是もいと羨しくては
ひあり
あへぎまごひて
喘息迷也。いきもつきあへず急ぎ來給ふ
猶おりて見よ 我かく笑ふゆゑな。清少も
下りて見よと

可憐人に行き送る。行あふ心
き物のみたまさかに見ゆる。いとくちをし。ちかうきぬれ
は。さりともいさかうてやまんやば。此車のさまをだに人
にかたらせてこそやまめとて。一條殿のまきにさめて。
侍從殿やおはします。郭公のこゑきよていまなんかへり
侍るといばせたる。つかひたゞ今もある。あがきみく
なんのたまへる。さふらひにまひろけてさしぬきたてま
つりつといふに。まつべきにもあらずとて。はしらせて。つ
らみかごさまへやらするに。いつのまにかさうぞくしつ
らん。おびは道のまよにゆひて。しはくくとおひくる。とも
に。侍ひさうしき。ものはかではしるめる。とくやれどいと
さいそがしくて。つちみかごにさつぎぬるにぞ。あへぎま
ごひておはして。まづ此くるまのさまをいみしくわらひ
給ふ。うつゝの人ののりたるをなんさらに見えぬ。猶おり
て見よなどわらひ給へば。ともなりつる人ども、興じわ

侍從のまき給ふ。うたはしきまみ給へるぞと
らふ。哥はいかにかそれきかんとのたまへば。いまあまへ
に御覽せとせてこそはさといふほどに。雨をことばふり
ぬ。なごかこと御門のやうにあらで。此つちみかごしも。う
へもなくつくりそめけんといふこそいとにくけれなどい
ひて。いかで歸らんずらん。こなたさまは。たゞおくれじと
思ひつるに。人めもしらずはしられつるを。あういかんこ
そいとすさまじけれとのたまへば。いさ給へかし。内へな
ごいふ。それもさへうしてはいかでか。とりにやり給へ
なごいふに。さめやかたふれば。かこなたさまのこともたゞ
ひきに引いれつ。一條よりかさをもてきたるをさよせて。
うち見かへりうち見かへり。此たびはゆるく。と物うけ
にて卯花はかりをとりおはするもをかし。さてまありた
れば。ありさまなどとはせ給ふ。うらみつる人々をさし心う
がりなぶら。藤侍從一條のおほちはしりつるほど語るに

「[萬]抄にはしげんしきと有り。是すすし。
さて按るにしげんしきしはしきしきいふべ
きみ餘りに急ぐ故にしげんしきはいへる
也。其さま見るが如くいと面白し
さうしきものはつて
「[萬]抄抄井ニイ本には。さうしき三人はか
りものはつてあり。是もいと羨しくては
ひあり
あへぎまごひて
喘息迷也。いきもつきあへず急ぎ來給ふ
猶おりて見よ 我かく笑ふゆゑな。清少も
下りて見よと

いままへに御覽せさせて
清少の哥はよまさりし事かしくしあさむき
ていへる也。先いま府宮に見せ申て。こも侍
從殿にも見すべけれと

こも御門のやうにあらで
自の御門には屋根有に此土御門にしも屋根
もなく作りけん也。けふ雨宿りすべきや
うもなくしてくきさなるべし

こなたさまはたいふくれつ
こいへ道來るは。追つかんと思ふばかりに
て。人口も思はず走りきたる也
あういかんこそいさ冷しけれ
あうは嘘と嘆たる詞也。すこくと御り
いなむこそ無算ならめと

まぼうしにてはいかい
侍臣の参内は。衣冠が。儀式の折は東帯な
るべし。今侍從ごのは直衣烏帽子なり下は
指貫也

かさなきをのこどもに
清少の供なる笠もたぬ男ども。町をいさひ
て車か急きて土御門を引いれしと

うらみつる人々 前にいま一つしておな
くはなごうらやみたる女房達
まどこいさうがりがう
清少の引くしげんしきを絶下ながら

「[萬]抄にはしげんしきと有り。是すすし。
さて按るにしげんしきしはしきしきいふべ
きみ餘りに急ぐ故にしげんしきはいへる
也。其さま見るが如くいと面白し
さうしきものはつて
「[萬]抄抄井ニイ本には。さうしき三人はか
りものはつてあり。是もいと羨しくては
ひあり
あへぎまごひて
喘息迷也。いきもつきあへず急ぎ來給ふ
猶おりて見よ 我かく笑ふゆゑな。清少も
下りて見よと

かうくさいすれば
かやうく首尾にて番はよみ侍らすと申
あぐる

ききつらん所にてふさこそ
番まば當座こそよめるべけれと。其部
公きいたる所にてこそよむべけれと
あまりきしき事だめつらん
儀式之。あまり儀式めきてよまんとするに
よりて哥のおそれば興さめつらん

ありつるうの花に
前に卯花ばかりをさりおはするさありし音
尾之

ほさきすなくれ
清少の郭公尋ねゆくこと聞たらば。我心
をへ奉つけてやるべき物なと

宰相のきみ
后宮の女房之。かくに北野の三位のむすめ
さあり。輔正卿の女にや
そに 尾下なり。猶清少に返し書給へ
と

ぞ。みなわらひぬる。さていづら哥はとせ給ふ。かうか
うどけいすれば。くちをしの事や。うへ人などのきかん
ては無事と

いかでかをかきかき事なくてあらん。其きつらん所にて
ふどこそよましか。あまりきしき事だめつらんぞあや
しきや。こゝにてもよめ。いふかひなしなどのたまはすれ

は。ゆにと思ふにいこわびしきを。いひあはせなどするは
るべし

どに。藤侍従の。ありつるうの花につけて卯花のうすや
うに

侍従
ほどきすなくれたつねに君ゆく

きかばこころをそへもしてまし
便の返哥をまたん
かへしつらんなどつばねへすゞりごりにやれば。たゞ
口なり

これしてとくいへとて。御すゞりのふたにかみなどいれ
てたまはせられたは。宰相のきみかき給へといふを。なほそ
こにまといふほどに。かさくらし雨ふりて。神もおどろ

しきの御きうしは。しとみをぞみかうしにまわりわたし
まどひしほどに。うたのかへりこともわすれぬ。いとひこ
しく鳴てすこしやむほどはくらくなりぬ。たゞ今なほ其
御返事奉らんとてとりかゝるほどに。人々上達部など神
の事申にまわり給ひつれば。西おもてに出てものなごき
こゆるほどにまぎれぬ。人はたさしてえたらん人こそし
らめとてやみぬ。大かた此事にすくせなき日なりと。うじ
ていまはいかやさんいきたりしとだに人にきかせじ。

などぞわらふを。いまもなどそれいきたりし人ごものい
はざらん。されどもさせじとおもふにこそあらめと物し
奥に思召
ゆにおほしめしたるもいとをかし。これいもいもすさ
じくなりにて侍なりと申す。すさまじかるべき事かはな
どのたまはせしかはやみにき。二日はかりありて。その日

しとみなぞかかうしにまわりわたし
格子のうへにしとみをおろしたる也
和名云。郭。周禮註云。音部字又作。部禮。禮
障光者也
神の事申にまわり
雲の御見まひに參給へる也
人はた。さしてえたらん人こそしらめとて
清少ならぬ人。又其哥を得たる清少など
こそ返哥の事はしるべけれ。こまへはしら
すさて返哥もせざりし也
うて

【訂】原本は上のきも下を此所にそへてミラド
てまよませて。註に動之動轉しての心と
あり
如童子云。春晴抄の註非之。こは上につけ
て見るべし。すくせなき日なりと。句之。
うて之。うじは倦下なるべし
弘云。此説よろし然れどもうては體の字な
るべし。竹取物語にうんとて皆かへり給へ
りさあるうんと同意なるべし
いまはいかやさんいきたりしとだに人にき
かせ

今はさやうに郭公き、にゆきしといふ事を
だに沙汰せじと
などそれいきたりし人ごものいはざらん
今までもいかでか賀茂へ行し人々の言ま
であらん。讀べき事と
すさまじかるべき事は
いやうに時過すべき事は。當座によま
無念の由をの給へば。いまおくれよむ

きにもあらでやみたること

おもひ出るこのさまよ
郭公の存などの事はおもひも出ずして。只
くひたりし物と思ひ出しよこと

したわらび。そ 清少や宰相などの心を
しはかりて戸宮の御たはふれこ

うけはりたりや

孟津抄に。断。承諾。はむかる事もなきない
ふ也云々。清少のあまりはむかりなく厥を
したふ事をたはふれての給ふこ
かけつらん いひつらんさいふおな
こ。大和物語に「見きこないひそ人の
くに」さある言を。源氏帯木巻には。見き
さなかけそまけり。同じ心なればなるべ
し

「訂」ものにくるこ。かけつらんは。心ニカ
クテアアラウ
わらはせ給ふもはづかしながら何か イ本
もはづかしながら何かいふ聞なくて。わ
らはせ給ふ此うたすべてさ有
いひでもしらす。時節たがふ事もし
冊一字のすもしらす。時節たがふ事もし
らぬやうに。一向に此道しらぬにはあられ
どもこの心

うたよむさいはれしすま
清少は彼深婆父が曾孫元輔がむすめなれば

の事などいひ出るに。宰相のきみ。いかにぞ手づからをり
たる事
たる事といひし下わらびはどの給ふをきかせ給ふて。おも

ひ出ることのさまよとわらばせ給て。紙のちりたるに
ひ出ることのさまよとわらばせ給て。紙のちりたるに

したわらびこそこひしかりけれ
上句を申せよ
とかし給ひて。もといへと仰らるるもをかし
清少納言

ほどよぎすたつねて聞し聲よりも
后宮の御詞
とかきてまらせられたれば。いみしうけはりたりや。かう
公を思ひすてし事よ
までだにいかで郭公のことをかけつらんとわらばせたま
ふもはづかしながら。何かこのうたすべてよみ侍らじと

なんおもひ侍る物を。ものよをりなど人のよみ侍るにも。
よめなどおほせらるれば。えさふらふまじき心ちなんま
侍る。いかでかは。もじのかずしらす。春は冬の哥をよみ。秋
は春のをよみ。梅のをりは菊などをよみ事は侍らん。され
ど哥よむといはれ侍しするは。すこし人にまざりて。

其せりの哥はこれこそありけれ。さばいへどそれの子な
れはなごいはれたらんこそかひあるこちし侍らり。露
てひてたる事もなくして。清少の卑下
どりわきたるかたもなくて。さすがに哥がましく我はと
おもへるさまに。さいそによみ出侍らんなん。なき人のた
のためおぼせよ
めいどほしく侍るなどまめやかたけいすれば。わらはせ
給ひて。さらばたし心にまかす。われはよれどもいはいはじと
清少の詞

の給はすれば。いと心やすく成侍ぬ。今は哥の事思ひかけ
侍らじなどいひてある比。かうじんせさせ給て。内大臣殿
の伊周公成中の御用意
いみしう心まうけさせ給へり。夜うち更るほどに題出
して。女はうに哥よませ給へば。みなけしきだちゆるがし
出すに。宮の御まへに近くさふらひて物けいしなごこと
清少のうたよまんとせめ
清少の詞
事をのみいふを。おど御らんじて。なごか哥はよまでは
なれるたる。題とれとの給ふを。さる事承りて。うたよむ
まじくなりて侍れば。思ひかけ侍らず。ことやうなる事よ

なき人のためいさほしく

元輔さしもの哥仙なりしに。其むすめさし
てこなる事なくば。父のおもてふせなれ
ばこ

かうんせさせ給ひて
庚申を守る事。庚申の夜れば三戸まで
悪き虫人の身申に入て癆瘵の病をなす。こ
其故に今宵れさる事古今醫統にもあり。拾
芥云。庚申夜。影候子影常子命見子。悉入
幽冥之中。去離我身。袋双紙云。庚申せで
酉文「しや虫はいれや去りれや我床をいた
れどれぬぞれいざれたるぞ」

さる事うけ給はりて
前に后宮のさらば心にまかす。我はよめ
もいはしこのたまひし事。さやうの御詞
なりてこ

けきようきいもいで
氣清也。いさかもうたむべきけしきな
く。潔白にさりのはざりし。

もとすけがのち
清少は元輔がむすめとして今在うたよま
あらばいかゞの心

その人の徳さ
前になき人のためいさほしく侍るなどい
る所の心なり

是より出まうでこまし
つしむ事なくはよめさの物なくとも
よりさし出て千首も讀侍んこ
御つたん君達

后宮の御妹の御つたん。伊周公等の君達
なるべし。イ木しきにおはします比八月十
四日の月あかき夜などいふ事此段の上に

實に御ゆるしにや。后宮へ問給ふ間
ことばにさる事やは侍る。なごかはゆるさせ給。いとあるま

じき事也。よしこと時はしらず。こよひはよめなどせめさ
せ給へど。けきようきいもいれでさふらふに。こご人ども

よみ出して。よしあしなどさだらるるほごに。いさしふ
なる御文をかきてたまはせたり。あけて見れば

ひとすけが後といはるるさみしもや
こよひのうたにはづれてはをる

あるを見るに。をかしき事ぞたらひなきや。いみしく笑
へば。何事ぞくことおともの給ふ

その人の後といはれぬ身なりせば
こよひのうたはまづぞよまし

つしむ事さふらはすは。千問なりとも是よりぞ出まうで
こましとけいしつ

これより后宮の御前にて有し事共のものたり
御つたん君達うへ人など。御まへに人おほくごふらへ

は。ひさしの柱によりかよりて。女房と物語してゐたるに。

物をなげ給はせたる。あけて見れば。思ふべしやいなや。だ
い一ならずはいかゞとせ給へり。御前にて物語など

するついでにも。すべて人には一におもはれずは。更に何
にかせん。只いみしうにくまれあしうせられてあらん。二

三にてはしぬともあらじ。一にてをあらんなどいへば。一
乗の法なりと人々わらふ事のすちなめり。筆かみ給はり

たれば。九品蓮臺の中には下品といふともかきてまる
らせたれば。むけにかもひくんしにけり。いとあろし。いひ

そめつる事はさてこそあらめとのたまはすれば。人にま
たがひてこそ中。それがあろさぞかし。だいに一人に。又

一にかもはれんとこそ思はめとおほせらるるもいとさ
かし

有。然ども言かきなりてよろしかられば今
不用也
「指」云。此所にイ木さあるは。萬壽抄の事
なるべし。萬には此段の上に左の數句あり
「しきにおはします比。八月十四日の月あ
き夜。右近の内侍にひはひかせてはしち
くおはしまして。是れ物いひわらひなど
するに。ひさしのはしらによりかよりて。
ものもいはてさふらへば。なごかうさも
せぬ。ものいへさうしきにさおほせら
るれば。たゞ秋の月の心を見侍る。こま
せば。さていひつべしをほせらる」
思ふべしやいなや
后宮よりなげて給へりし物に會給へる間
也。清少我を思はんやとの心
だいにならずはいかゞ
第一の人に清少をさほすは。清少も相
もふまづくやとの心
二三にては。第二第三に思はれては
もあるまづき
一乗の法なり
是方價品の文の心也。一乗の法とは。法華
經の事也。最爲第一の經なれば。彼清少の
第一に思はれん二三にてはあらじといふに
つけて。人々なぞらへいひし事の筋を。今
后宮の第一ならずは如何と仰らる。也。法
華經方價品云。十方佛土中唯有二乘法。無
二亦無三。佛方便說。但無上道一
九品蓮臺の中には。開詠の詞也。后宮の御
意みにかいらは。たゞひ下品にても満足
也。極樂寺建立顯文慶保風。十方佛土之中
以三四方爲。九品蓮臺之間。三下品。應足
て九品の淨土ある事觀無量壽經に委

いひそめつゝ事はさてこそ 始め第一に思はれんといふほどならば 後まで其心をたがへずこそあるべけれと。下品と云ふともいへるなきがめ給ふ御たはふれと。 なみくの人にも第一に思はれんとも申さめ。其人によりて下品にても満足と云。后宮のいさも尊をいはんとて人にしたがつてこそ

是より別之事隆家の事 中納言殿まらせ給ひて。御扇奉らせ給ふに。九かいへこ

そいみしきはねをえて侍れ。それをばらせてまらせんと

とするをおほろけの紙はばるまじけれは。もどめ侍る也

と申給ふ。いかやうなるにかあるととひ聞えさせ給へば。

すべていみしく侍る。更にまだ見ぬほねのさき也となん

人々申。まことにかはかりの侍ざりつと。ことたかく申

給へば。さて扇のにはあらでくらげのなりとさきこゆれば。

隆家の詞。此清少の饒音の面白きをうちやめる詞

これはたかいへか。ことにしてんてわらひ給ふ。かやう

の事こそ。かたはらいたき物のうちに入つべけれど。人こ

となわとしそと侍ればいかゞはせん

雨のうちはへふるころ。けふもふるに。御使にて式部のせ

うのぶつねまるとりたり。例のしとねさし出したるを。つね

くらげのなり 増賀上人のむ「みつわさす八十餘りの老の波海月のほれにあひけるかな」

かたはらいたき物の内に 自發めきたる事いふは此双紙の片腹寄き物の内に入て。こには書まつけれど。人毎にな書添しそといへば。せんかたなくしてしと

式部のせうのふつれ 藤原信經は。中納言兼輔の曾孫。雅正の孫。隆興守爲長の子也。勅物云。信經の長徳元年正月十一日職人。三年正月式部丞云云

せんぞくれう 既得料にや。順和名云。藤原信也。今案毛唐也。俗體の皮にて作る云々。中尋記

せんぞくれうを。せんぞくといひて。足のよこれし事をいふに付て。洗足料にこそならめと秀句に云云

かたはらいたく 旁編く人のいひしき合めし詞

おほきさいのみや 勅物云。皇后宮安子康保元年四月廿四日崩卅八云々。村上后。九條右大臣師輔の女。皇太后宮は后宮也

美濃守にてうせにける藤原のさきから 勅物云。時柄康保五年正月廿八日美濃守。長保二年五月三日職人兵部丞。被補作物所別當

かたきにえりても 職相手に掲ひ出てもい

かたきやうに珍名出合べきぞと。蒙求に

○増訂枕草紙春曙抄卷之五

かたきにえりても 職相手に掲ひ出てもい

かたきやうに珍名出合べきぞと。蒙求に

○増訂枕草紙春曙抄卷之五

かたきにえりても 職相手に掲ひ出てもい

かたきやうに珍名出合べきぞと。蒙求に

○増訂枕草紙春曙抄卷之五

かたきにえりても 職相手に掲ひ出てもい

かたきやうに珍名出合べきぞと。蒙求に

○増訂枕草紙春曙抄卷之五

かたきにえりても 職相手に掲ひ出てもい

かたきやうに珍名出合べきぞと。蒙求に

○増訂枕草紙春曙抄卷之五

かたきにえりても 職相手に掲ひ出てもい

かたきやうに珍名出合べきぞと。蒙求に

○増訂枕草紙春曙抄卷之五

かたきにえりても 職相手に掲ひ出てもい

かたきやうに珍名出合べきぞと。蒙求に

いひそめつゝ事はさてこそ 始め第一に思はれんといふほどならば 後まで其心をたがへずこそあるべけれと。下品と云ふともいへるなきがめ給ふ御たはふれと。 なみくの人にも第一に思はれんとも申さめ。其人によりて下品にても満足と云。后宮のいさも尊をいはんとて人にしたがつてこそ

是より別之事隆家の事 中納言殿まらせ給ひて。御扇奉らせ給ふに。九かいへこ

そいみしきはねをえて侍れ。それをばらせてまらせんと

とするをおほろけの紙はばるまじけれは。もどめ侍る也

と申給ふ。いかやうなるにかあるととひ聞えさせ給へば。

すべていみしく侍る。更にまだ見ぬほねのさき也となん

人々申。まことにかはかりの侍ざりつと。ことたかく申

給へば。さて扇のにはあらでくらげのなりとさきこゆれば。

隆家の詞。此清少の饒音の面白きをうちやめる詞

これはたかいへか。ことにしてんてわらひ給ふ。かやう

の事こそ。かたはらいたき物のうちに入つべけれど。人こ

となわとしそと侍ればいかゞはせん

雨のうちはへふるころ。けふもふるに。御使にて式部のせ

うのぶつねまるとりたり。例のしとねさし出したるを。つね

より遠くおしやりてゐたれば。あれは誰がれうぞとこい

へは。わらひて。かゝる雨にのほり侍らば。あしがたつきて

いとふびんにきたなけになり侍りなんといへば。なごせ

んぞくれうにこそはならめといふを。これは御まへにか

しこうおほせらるゝにはあらず。のぶつねがあしがたの

事を申さざらましかば。えのたまはざらましとて。返々い

ひしこそをかしかりしか。あせりなる御身はめかなどか

たはらいたく

はやうおほきさいの宮に。るぬたきといひて名たかきし

もづかへなんありける。美濃守にてうせにける藤原の時

から。藏人なりける時。下づかへともある所に立よりて。

それや此高名のるぬたき。なごせも見えぬといひける。返

事に。それはとさきからも見ゆる名也。といひたりける

なん。かたきにえりてもいかにかかざる事はあらん。殿上人

○増訂枕草紙春曙抄卷之五

かたきにえりても 職相手に掲ひ出てもい

かたきやうに珍名出合べきぞと。蒙求に

○増訂枕草紙春曙抄卷之五

かたきにえりても 職相手に掲ひ出てもい

かたきやうに珍名出合べきぞと。蒙求に

○増訂枕草紙春曙抄卷之五

かたきにえりても 職相手に掲ひ出てもい

げにめてたくうつくし
前に后宮のうつくしき君なりとのたまひし
をうけて。げに清少の見たる心

こなたにむきて
今清少のぞく方にむきて。即白殿のおは

す
めでたき御ありさまをもうちふみて
后宮御最舎など御形を。即白殿よりこび見
給ふさま

たはふれこ
「増」殿言。酒澄なごいふと。下のさるが
ふとあるも同トやうのにて人を笑はしむ
ることをいふと

しげいしやのみにけきたるやうに
うるはしく行儀たしきさま。源氏若紫
に。榮上のありさまを。只ふにけきたる物の
姫君のやうにこいへる同じ儀なるべし

せんようでんちやうくわ殿
これ御最舎より登花殿へゆく道つゞきな
り。宣耀殿。和名云。藤原殿の北にあり。貞
觀殿。和名云。常寧殿の北にあり。これを御
殿殿といふ云々。御最舎は。昭陽金の北。藤
原殿のうしろにあり。其西宣耀殿。其西
貞觀殿をさほりて。其西登花殿に至るべし。
今の御しつらひ登花殿の東の二間あり。
拾芥抄。宮城の園。和名等にて勤し

いみしくけにめでたくうつくしと見え給ふ。殿はうすい
るのなほし。もえぎのかりもの、御さしぬぎ。紅の御ぞど
も。御ひもさして。ひさしの柱にうしろをあて。こなたさ
まにむきておはします。めでたき御ありさまをもをうち
るみて。れいのたはふれこをせさせ給ふ。しげいしやの
るにかきたるやうにうつくしけにてるさせ給へるに。宮
いとやすらかに。いすすこしおとなびさせ給へる御けし
きの。紅の御ぞに匂ひあはせ給ひて。猶たらひはいかでか
と見えさせ給ふ。御てうづまある。彼御かたは。せんようで
ん。ちやうらわでんをさほりて。わらは二人。しもづかへ。四
人してもてまあるるめり。からびさしのこなたのらうにぞ
女房六人はかりさふらふ。せはしとてかたへは御おくり
してみなかへりにけり。櫻のかさみ。もえぎこうはいなど
いみしく。かさみながくしりひきて。とりつぎまあるらすい

取次

となまめかし。かり物のからぎぬごもこほれ出て。すけま
まこのうまのかみのむすめ少將のきみ。北野の三位のむす
め宰相のきみなどぞちかくはある。あなをかしと見るは
どに。この御かたの御てうづはんのうねめ。あをすうこの
も。からぎぬ。くんたい。ひれなどして。おもてなどいとしる
せしさま。下仕手水を取次て采女にわたす

くて。下づかへなどとりつぎてまあるほど。これはたおほ
やけしうからめいをかし。おもひのりをりになりてみら
しあけまるとりて。藏人どもまかなひのかみあけてまあるら
するほどに。へだてたりつる屏風もおしあけつれば。か
ぞきわしがくれ所なきをいふ

まみの人。かくれみのとられたる心ちして。あかずあびし
ければ。みすとさちやうとの中にて。柱のもとよりぞ見
奉る。さぬのすを裳などからさぬはみなみすのうとに
し出されたれば。殿のはしのかたより御らんじ出してた
ぞや霞のまより見ゆるほど。どがめさせ給ふに。少納言が

かすみのまより
清少のほかに見ゆるをの給ふ。古今や

みぐしあけまわりて
河津云。昔は女御更衣以下常に髪を上るむ
本職也。也尾軒云。内の女房は晴の時髪は
上とて致などして髪をいたさへ上る云
々。后宮の御ぐしを女職人など扱するさま

御手水番のうれめ
百寮訓要抄云。采女と申は。日々より可憐
美女をえらびて天子へまわらす。御陪
膳などをもゆるさる。女房云々。御手水
の役をもつさむるなるべし

からさぬ。御名云。背子形如三半臂。無腰襦
之給衣也。背子漢抄云。背子婦人表衣。以
之給衣之

北野の三位。菅原輔正。藤原由良官在船一
男現。北野殿是也。正暦三年二月十五日
假三位。公卿補任大系圖等に有り

御手水番のうれめ
百寮訓要抄云。采女と申は。日々より可憐
美女をえらびて天子へまわらす。御陪
膳などをもゆるさる。女房云々。御手水
の役をもつさむるなるべし

みぐしあけまわりて
河津云。昔は女御更衣以下常に髪を上るむ
本職也。也尾軒云。内の女房は晴の時髪は
上とて致などして髪をいたさへ上る云
々。后宮の御ぐしを女職人など扱するさま

かすみのまより
清少のほかに見ゆるをの給ふ。古今や

宮の御子たちまでひき出たらんにわろくは侍

らし
后宮の皇子うませ給はばその心。松君をかやうにもてあそぶやうに皇子をさし出た

らばさ。これ正暦三年二月なれば。一品宮敷藤親王などもいまだ生れさせ給はぬは

えんたうまぬさ。
龜道しく事。行幸には必道しくを云。一條院の後宮の御方へ入御のさま

宮もこなたによりせ
殿うへなどの御前を立去て。帝のおはしま

すつたへより給ふ
殿の御まへに宮づかき召て。中宮大夫以下の宮司に。皇子香などの事仰付て。殿上人

なもてなせと申給ふ
山井大納言。遺贈也。后宮伊周公などの別殿の兄君。山井殿は三條坊門の北。東

極の西。聖所なるよし給芥に見えたり。永頼の三位の家。
榮花物語云。此大千世君は國々あまた知たる人の山の井といふ所にすむがむすめおほ

る御に成給ひぬ云々。大千世君は即道頼也なり
みうちまわらて給て

しう物の給ふを。誰もくうつくしがりきこえ給ふ。宮の

御子たちとて引出たらんにわろくは侍らじかし。などの給はするを。ゆになどか。今まやさる事のこと心もとなさ

ひつじの時ばかりに。えんたうまぬるといふほどもなく。うちそよめきいらせ給へば。宮もこなたによりせ給ぬ。や

がて御帳にいらせ給ひぬれば。女房南おもてにそよめき出ぬめり。らうに殿上人いとおほかり。殿の御まへに宮づ

かさめして。くだものさかなめさす。人々蒸はせなどおほせらる。まことにみなをひて。女房と物いひかはすほど。

かたみにをかしとふもひたり。日の入はどに。おきさせ給ひて。山井の大納言めしいて。みうちまわらせ給ひて

かへらせ給ふ。櫻の御なほしに。紅の御ぞの夕はえなども。かしこければと。つ。山のるの大納言はいりたぬ御

せうとにて。いとよくおはすかし。句ひやかなるかたは。

此大納言にも。せまがり給へるものを。世の人はせちにいひ

おとしきこゆるこそいとほしけれ。殿大納言。やまのるの大納言。三位の中將内藏頭などみなさふらひ給ふ。宮のほ

らせ給ふべき御使にて。うまの内侍のすけまあり給へり。后宮今夜はえまわらとて。父母への御禮なるべし

こよひはえなどしふらせ給ふを。殿きかせ給て。いとあるまじき事。はやのほらせ給へと申させ給に。又春宮の御つ

かひしきりにある程いとさわがし。御むかへに女房春宮のなごもまありて。とくとそものかしきこゆ。まづさばか

の君わたしきこえ給ひてとのたまはすれば。さりとともい

かでかどあるを。猶見おくりきこえんなどのたまはする

ほど。いとをかしうめたし。さらば遠きをさきにとて。ま

づしけいしやわたり給て。殿などかへらせ給ひてそのほら

せ給ふ。道のはども殿の御さるがふ事にいみしくわらひ

こ。ほどくうちはしよりもおちぬべし

紅雲賀巻に。うへはみうちまわらしめして出

させ給ぬる云々。河津云。御くしとる人の事

云。花鳥云。蔵人私記云。御製御製那侍臣之

間。撰書事之人。供無定例。皆著三彩色冠。三

之御註。今案御もさり御びんにまわら

人は。紫のきぬの直衣を着て候候するを御

うちまわらしめ云々
内殿頭。是も道隆公の御子也。頼親の内殿

頭と藤原系圖にあり
うまの内侍のすけ
左馬權頭時明の女。一條院源氏物語を御覽

下て。式部は日本紀をこそよく見たりけ

れとのたまひしを新みて。式部を日本紀の

局といひし入なるべし哥人云
まづさばかの君わたし
さあらば先しけいさをまわらせ給ひては

○増訂枕草紙春曙抄卷之六

してかよふ道
「乱」うちばしは打橋。源兵に多くあり
殿上より
此段原本には前の段に書つ、けり
はやくおちけり
期詠。大坂嶺之梅早落誰問「粉粧」これは紀
納言長谷推の詩序の文也。イ本前段につ
けし本にしたがはば、かの内際よりもち
ぬべき折に合せたれば、早落にけりさ答
るにや

二月つごもり

是も正暦三年の比前の段さな下比にや
かうしてさふらふさいへば
かくのごさくの用事ありてまぬりしさいふ
公任の君。宰相中將殿の
公任と宰相中將殿と兩人のおこせ給ふさい
ふ。公任は瀬河相國頼忠公の男。和漢の
才人。
宰相中將は寮信門にや
すこし春ある。雪など降苑て春色の少き心
。此詞を取て俊成卿「埋火にすこし春あ
る心ちして夜深き冬を慰る哉
誰々おこせし一座の人々を。誰にやは
すこせへば。それくそこたへし」

殿上より梅の花のみなちりたる枝を。これはいかにかにとい
ひたるに。たゞ。ばやくおちけりといらへたれば。其詩を
けに詩を誦しと云。黒戸瀬口戸の四にあり前委
じゆじてくろどに殿上人いとおほくるたるを。うへの御
前さかせおはしして。よろしき哥などよみたらんより
も。かゝる事はまさりたりかし。よういらへたりと仰らる
。時にあふ味はさ
二月つごもり風いたくふきて空いみしくくるさね。雪す
こしうちりたるほど。黒戸にどのもごかきとて。かうし
てさふらふさいへば。よりたるに。公任の君。宰相中將どの
「とあるを見れば。ふどころ紙にたゞ
すこし春あるこゝちこそすれ

とあるは。ゆにけふのけしきにいとよくあひたるを。これ
がもとはいかにつくべからんと思ひわつらひぬ。誰々か
ととへば。それくといふに。みなはづかしき中に。宰相中
將の御いらへばはいかことなしびにいひ出んと心ひと

おにきのこもけたり
帝の渡御にて后宮の御慶なりし
まげれとて。任儀也。たさひあしきもあれ
さうちいでたる間
そらさむみ。箱にまがへてちる雪にさいふ
にてすこし春あるなあへしらへるこ
そしられたらばきつ
此付句あしきならは我に其沙汰きする
人もあら下との心
さしたの中將
源俊賢卿。西宮左大臣高明公の男
兵衛のすけ。誰とも不知もしさしたの兄
弟思賢の兵衛佐にや

千日のさうじ

御慶精進などに
はんひのをひり始る
和名云。半臂は衣名也。橘葉葉葉云。或抄云。
近代半臂以二小袖二結之。往古之例以二大袖
二筋二結之。今世少三知人云々。橘葉今案照
半臂さいふもあり。冬は緩夏は生の綾を用

○増訂枕草紙春曙抄卷之六

つにくるしきを。御前に御らんせとせんとすれども。うへ
のおはしましておほどのでもりたり。このもづかさはと
思事なすこ
くくといふ。ゆねおそくこへあらんはどり所なければ。
さはれとて
清少の付句
そらさむみ花にまがへて散る雪に
おづくのこころ
とわななくわななくかきてとらせて。いかゞ見給ふらん
と思ふもわびし。これが事をさかはやとおもふに。そしら
れたらばきかじとおほゆるを。としかたの中將など猶な
いしに申てなさんとさだめ給ひしとはかりぞ。兵衛の佐
中將にておはせしかかたり給ひし
はるかなる物

千日のさうじはじむる日。はむひのきをひねりばじむる日。
みちの國へゆく人のあふ坂の關こゆるほど。うまれたる
ちこのおとなからなるほど。大はんにや經御とまやうひ

このすなはち油單之
つようさらへられ
油單に方弘が足をつけまつはされし
したうつ 和名服亦作和名之太久頭足
衣也。結華葉葉云。襪履買の小袖を着する時
は袷賃を用ふる。宿老は白き平絹の袷りに
りたる也云々
頭つき給はぬほどは
殿上人何もつづぬ。方弘は頭より先に豆
なくひしこ

へられにけり。さしあゆみてかへれば。やがてとうだいは
るゆみ
たふれぬ。したうつはうちしきにつきてゆくにまこと
道こそしんごうしたりしか 頭つき給はぬほどは。殿上の
大はん人もつかず。それにまさひろはまめひともりを
とりて。こさうじのうしろにてやをらくひければ。ひきあ
らばしてわらはるゝ事ぞかぎりなきなり
せきは

あふさかのせき 近江。忍熊王武内宿禰
と戦まけて退し。武内宿禰退てこにて
行達て終に忍熊王を亡たる故達坂と云さ口
本紀九有
くきたの關 細流云。奥州の栗田關也。
俗にくきたのせきといふ
たさへなくこそ たさへがたなき心。
只こゆるさいふ名と。信るさいふとはたさ
へくらへがたなき心
はせりのせき
増演云。後拾遺書一よみ人しらすしらら
めや身こそ入めをばせりの關に誤はさ
らざりけれ
よこばしりの關
増演云。兼盛集
「よこばしり清見が關のよこばしりにいづと

あふさかかせき 津の國也 伊勢也
川のせき。衣の關。たこえのせきは。ばかりのせき。た
どしへなくこそおほゆれ。よこばしりの關。きよみがせき。
兄るめの關。よしなくのせきこそ。いかにおもひ返した
るならんといとしらまほしけれ。それをなこそその關とば
いふにやあらん。あふ坂なごをまで思ひ返したらはわび
しからんかし。あしがらのせき
せきは

いふことはながくさめつ 此の野の意にては。伊豆の國にや
いかに思ひ返したるならん 思ひ立たる事を。又由なしと思ひ返したるやうなれば
達坂なごをもて 達べしと哭りし人の由なしな來そぞ思ひ返したれば信しからんこと。達坂を達にそへてうたにもあまたよみたれば。伊千
載集に頼朝卿「都には君に達坂ちければなこそ其の關は達きとされ」

おほあらしのもり 大荒木 八雲山城云々
しのびのもり 未知。但八雲しのぶの森臨
奥云々。是を書たがへしにや忍びの岡は河
内
こひの森
増演云。拾遺書に右大臣顯光
「こひにたつれくさなく御公ましてこ
いひの森はいかにぞ」
こがらしの森
増演云。古今六帖
「八しれぬ思ひするがの國にこそかをこが
らしのもりは有けれ」
いはせのもり 盤河森。八雲云。大和又攝津
信濃にもあり云々
増演云。新勅撰夏に田原天皇
「神なびのいはせのもりの時鳥ならしの岡
にいつききかん」
くるべきの森 八雲にもしれす
神なびの 神南備森之。津國今やうないさ
いふ所
うきたの森
増演云。万十
「かくしてやなはやみなん大荒木のうき
たの森のしめならなくに」

おほあらしの森。しのびのもり。こひのもり。こがらしの
森。しのだのもり。いくたの森。うつきものもり。きくだのも
り。いはせの森。立聞のもり。ときはのもり。くるべきのも
り。神なびの森。うたねのもり。うきだのもり。うへ木のも
り。いはたの森。かうたての森といふが。みよとくまること
あやしけれ。もりなどいふべくもあらず。たゞひと木ある
を。何につけたるぞ。こひのもり。こはだのもり
卯月の晦日に。はせ寺にまうづとて淀のわたりと いふも
のをせしかは。舟に車をかきすおてゆくに。しやうぶこも
などの末みじかく見えしを。とらせたれば。いとながより
ける。こもつみたるふねのありきしこそいみしうをかし

信賢 六任左大臣重信公の息方敏徳可約

たいきよき衣を 誰もやつれて参るにのぶ
かたは淨衣にてまうでんきていへる詞云
かならずよもあしくてよき 金峯山の藏王
も必無くやつれてまわれよきよもの給は
ト云云

あなやまぶき
桃華葉。衣色異説云。青山吹波實實此云
二月にも用る事あり云々
たみつものもりのすけ
勅物云。隆光主殿助長保三年藏人年廿九。
三任右大臣定方より五代左衛門佐宣孝の息
云々
すのかん 桃華葉云。赤千尋。夢にても
平緒生にても又色は白くても何にても大納
言の時まで内々に着用之

いひげんになつばもこ とききてきき
てんになでう事あらんといひしにたがは
かも有ける説の心云

十月一日のほど
陰曆七月三日。十月總時入二義林下

いみしき人ときこゆれど。こよなくやつれてまうづとこ
そばしりたるに。右衛門のすけ信賢はあぢきなき事なり。
たゞきよき衣をきてまうてんに。なでうことかあらん。か
ならずよもあしくてよきみたけのたまはじとて。三月つ
ごもりむらさきのいとこきさしぬき。しろき。あをやま
ぶきのいみしくおどろくしきなどにて。たかみつがと
のもりのすけなるは。あまいるの紅のきぬすりもどろか
したるすあかんはかまにて。うちつゞきやうやたりける
に。歸る人もまうづる人も。めづらしくあやしき事にすべ
て此山道にかゝるすおたの人見えざりつとあさましが
りしき。四月晦日にかへりて。六月十餘日のほどに筑前の
かみうせにしかはりになりしこそ。けにいひげんにた
がはずもときこえしか。是は哀なる事にはあらねども。
みただけのついで也。九月三十日。十月一日のほどに。只ある

「きりくす夜露に秋のなるまゝ」によわる
かこゝの遠ざかりゆく四行

秋ふかき庭の淺茅に 家持集。松陰の遠ざ
がうへの白露をけたすて玉にぬく物に
川竹の風に 一本夕暮曉に川竹の風よふ
れたるめさましてきいたるさあり。此本
心云云

増演云。此所のすべてさいふ調は。夕ぐれ
さあつぎき夜と。三ながら川竹の音のあ
はれなるかいふ云
弘云。かは竹はたゞ竹のこゝろ。漢字にて
漢竹。皮竹。川竹などもかけご文字になつ
むこさなけれ
二十六七日 はずあまみむゆかなぬかと
よむへし

年うちすぐしたる
年老過たる云
朗詠。香火一燈灯一盞白頭夜禮切名短云々

いさあらうはあらぬ風の
一説是も荒たる家の穉蓮など生たる所によ
く心なるべし

寺にこもり
三井寺にや。いつくにてん

かなきかにきつつけたるきりぎりすのこと。にはどりの
子いだきてふしたる。秋ふかき庭のあさぢに露のいろい
ろ玉のやうにてひかりたる。川竹の風にふかれたる夕ぐ
れ。あかつきにめさましたる夜などもすべて。おもひかは
したるわかき人の中に。せくかたありて心にしもよかせ
ぬ。山里の雪。男も女もきよけなるがくるき衣きたる。二十
六七日はかりのあかつきに。物がたりしてゐあかして見
れば。あるかなきかに心ほそけなる月の。山のはちかく見
えたるこそいとあはれなれ。秋の野。年うちすぐしたる僧
たちのおこなひしたる。あれたる家にむらばひかゝり。
よもぎなどたかくおひたる庭に月のくまなくあかき。い
どあらうはあらぬ風の吹たる
是より例の無すさび云
正月に寺にこもりたるはいみしく寒く。雪がちに氷たる
こそをかしけれ。雨などのふりぬへまきけしきなるはいと

おびうちかけて
かけおびのさまにや旅すがたのやつせる殿
東なるべし
「増」上に委しくいへり

法師のよりきて
清少の宿坊の法師の寄來たる。願文讀し
人々
しかくの人こもらせ給へり。是も清少の
宿坊の法師我もまた又こもりおはする人の
事なごつたりき。せて歸るさま。

はんさう

區ハンザワ和名云。柄中有道可。以注水之
器也。俗用。棟字。所出未詳。或云。有柄
半挿。其内。故呼爲半挿。

御さの人はかの坊に
堂にての清少の扇掛ければ。ひの人々は留
坊へさそふ。

すきやうの鐘のおと

願經也。新經の經をよむ事。江兵衛舟
巻に。すきやうのの風の風につきてきこえ
くるをつくんと聞ふし給へり云々

我なりさきけは

我がましましむる所願の鐘の音成けりこと

たかくうち出させまほし

彼男の忍びにのつぎ経をも高からず
な。壁高く間にいださせまほしきこと
けさやかに

あざやかにあらはなるん

日比こもりたるに

前にも日比こもられしなるべし
はやうは有し
前にはやうに晝夜さほびくはなかりし
さなるべし

かひないさたかく

昔は十二時に貝を吹し。千載集に「けふ
も亦午の貝こそ吹つなれつとのあゆみ近
付めらし」赤染衛門

すきやうの物

願經の布施物なり。浮舟の
まきに。御すきやうさせ給へて其れう
の物文など書へてもてきたり云々

たう童子

堂童子は。法會の時花笠をおこなひをさめ
などする物。江次第に佛事に見えたり。
御さんたひらかに
御産の祈禱など申さま。平に守給へて申
な

教化などしたる

法理をのべて此佛燈むなしかるまつき白な
教化しきするにや

奉るに。清少のこもりぬし局へ法師などのしきみをつかはす
てもてきたるなどのたふとぎきなども猶をかし。犬ふせぎ
のかたより法師よりきて。いどよく中傳ぬ。いくかはかり
こもらせ給ふべきなどさふ。しかくの人こもらせ給へ
りなどいひきかせていぬる。すなはち火をけくた物など
もてきつゝかす。はんさうに手水などいれてたらひの手
もなきなどあり。御さの人はかの坊になどいひてよび
もてゆけば。かばかりとぞゆく。すきやうのかねのおと我
ななりとさきけはたのもしくきこゆ。かたはらによろしき
男のいと忍びやかにぬかなどつく。たちるのほど心あ
らんと聞えたるが。いたく思ひ入たるけしきにて。いもね
ずおこなふこそいとあはれなれ。うちやすむほどは經高
くばきこえぬほどによみたるもたふとけなり。たかくう
ら出させまほしきにましてはなごをけさやかにき

にくくはあらで。すこし忍びてかみたるは。何事をおもふ
らん。かれをかへはやとこそおほゆれ。日比こもりたる
に。ひるはすこしのとかにぞはやうは有し。法師の坊にを
のこ共わらばなごゆきてつれづれなるに。たゞかたは
らにかひさいとたかく俄にふさ出したるこそおどろか
るれ。きよげなるたて文など持せたる男の。すきやうの物
うち置いて。だう童子などよ。こゑは。山ひゞきあひてきら
しくしうきこゆ。かねの聲ひゞきささりて。いつこならん
やうぞと。たれの御願などいふ
とさくほどに。やんことをなき所の名うちいひて御さんた
ひらかになど。教化などしたる。すゞるに。いかならんとお
ほつかなくねんせらる。これはたゞなるをりの事なめ
り。正月などは。只いと物さわがしく物のぞみなどする
人の。ひまなくまうづる見るほどに。おこなひもしやられ
ず。日のうちくるゝにまうづるばこもる人なり。小法師

あざやかにあらはなるん
日比こもりたるに
前にも日比こもられしなるべし
はやうは有し
前にはやうに晝夜さほびくはなかりし
さなるべし
かひないさたかく
昔は十二時に貝を吹し。千載集に「けふ
も亦午の貝こそ吹つなれつとのあゆみ近
付めらし」赤染衛門
すきやうの物
願經の布施物なり。浮舟の
まきに。御すきやうさせ給へて其れう
の物文など書へてもてきたり云々
たう童子
堂童子は。法會の時花笠をおこなひをさめ
などする物。江次第に佛事に見えたり。
御さんたひらかに
御産の祈禱など申さま。平に守給へて申
な
教化などしたる
法理をのべて此佛燈むなしかるまつき白な
教化しきするにや

屏風などの高さ
彼通夜の人の肩をいこはんためなるべし
いさよしくしたいし
進退也屏風の高大なるをよくもてあつちひ
たるさま

そよくこあまた
是に歸りし人の今歸るさま也

あいざやうづきおこりたるこも
愛敬めき護たるこ。愛敬有ながらほこらし
き童のさま

めりこの名母なごうち出たらん 往うこの
乳母の名をよび母なごいひ出たるなり
これならんといさしちまほし 其めのまほ
なごは是ならんを見出たきこ

其寺の佛經
たとへば。初編にては觀音經のうつとまに

すは。經師經のたぐひ

おれうしたるも
圓造也。いの背鏡の指賣きたるを。侍ごも
のたちめぐり温仰したるさま

さかくつばねどもなごの
女中の扇のわたりに立さまよひのそくさま
別當などよびて
其寺の別當に其扇の事をさしやき同
えせ物さは見えずかし
心のさき若人さは見えずいささまのふり
敷ありけるこも

ほらのもたぐべくもあらぬ屏風などのたかき。いとよく
持上べくもなき
しんたいし。たよみなどほうとたておくと見れば。たよつ
ほねに出で。犬ふせきにすだれをさらくことかくるさま
其事になれたる
なごぞいみしく。しつけたるはやすけなり。そよくとわ
またかりて。おとなたちたる人のいやしからずしのびや
かなる御けばひにて。かへる人にやあらん。そのうちあや
うし。火の事せいせよなどいふもあり。七つ八つばかりな
るさのここのあざやうづきおこりたる聲にて。さふらひ
火用心の事なる
人よびつけ物などいひたるけばひもいとをかし。又みつ
ばかりなるちこのねをびれてうちしはよきたるけばひ
いとをしける心
もうつくし。めこの名母なごうち出たらんも。これなら
んといとしらまほし。夜ひとよみしうのしりおこな
ひあかす。ねもいららりつるを。ごやなどばてすこしう
後夜
ちやすみねぬるまゝに。其寺の佛經をいとあらくしう

たかくうち出てよみたるに。わきとたふとしどもあらず。
驚行者めきたる
すぎやうじやだちたる法師のよむなめりとふどうち驚れ
てあはれにきこゆ。又よるなどはかほしらで。人々しき人
のかこなひたるがあをにびのさしぬきのばたはりたる。
花田いろのこき
白き衣どもあまたきて。子どもなめりと見ゆる若きをの
このをかしよううちごうぞきたる。わらはなどして。さぶら
童などくしたる
ひの物どもあまたかしこまりあねうしたるをかし。か
是れおのさしひきたる人のさま
りそめに屏風たてぬかなごすこしつくめり。かほしら
ぬは誰ならんといとゆかし。見知らるはそれ殿ぞ見る
もをかし。わかき人どもは。さかくつばねどもなどのわた
りにさまよひて。佛の御かたにめ見やり奉らず。別當など
よびてうちさよめき物がたりして出ぬる。えせ物どは見
えずかし。二月卅日三月朔日ころ。花さかりにこもりたる
もをかし。さよけなるさのこどもの忍ぶとみゆる二三人

さくらあなやき
直垂。或は袴衣なきにや。襦は表白裏赤花。
柳は表白裏青。

つぎしきの心
さうぞくをうしうしたるふくくる
魔の餌袋に見事にかざりしたる。魔など
すまさせて來たるさまなるべし

増源云。もま鷹狩などに用ひしものなるを
此程よりたしわりこやうのこまにいへり。
かげろふ日記に

「此草紙人の家につぎしきのものさうぞ
くよくしたるふくくる」さあるを見るべし
すりもごろかし 袴にすりなごみだれ書
たるなるべし

増弘云。しのおもちすりさいふも。もご
ろかしして摺れる事。故にもごろかしも亂ら
し摺りの事

こんぐ 金鼓和名云。最勝經云。妙樂菩薩
於中一見大金鼓云々。こまなる佛事に
樂人物の音を發せんさて。圖書金鼓をうつ。
又明師音聲を發せんさて。金鼓を打事江
次第十三にみゆ

増源云。此はそやかなるものは今いふ鐘木
なるべし。ぐしては金鼓にぐして。金鼓
はたいきけれ
いっておはしらん

此方には見付たれごもあなたには見付れば
我さはいつてしらんご
すべて例ならぬ所に

守籠にかざらず。惣て常ならぬ所に能居な
ごせんに。我一人斗籠るはかひなし。同じ
心の女友達などぐしてありたきご

清少のみならず
男もかやうにおもふやらん。わざと友達を
たづねありご

心づきなき物
此段衍文云。た一人のりてさいふ以下は
前のにくき物に有。其外はかくはしく
あればこゝには註せず

訂源云。末に心づきなきものさあるいご
はしければ。こゝはまぎれていりたるなる
べし。萬葉抄には。こゝにのみ此段をあけ
て。末のくはしき段を脱せしは。なご
に誤なるべし。いづれにも同下題二所にあ
るべきやうなし

櫻青柳などをかしようて。くよりあけたるさしぬきのすそ
もあてやかに見なざる。つぎしきをのこにさうぞ
くをかしようしたるるふくろいたかせて。ことねりわらは
ごも。こうはいもえぎのかりきぬに。いろくのきぬ。すり
もごろかしたるはかまなどきせたり。花などをらせて。侍
めきてはそやかなるものなどふしてごんごうつこそをか
しけれ。さごかしと見ゆる人あれど。いかでかはしらん。う
ちすぎていぬることさすがにさうしけれ。氣色を見
せまし物をなどいふもをかし。かやうにて寺ごもり。すべ
て例ならぬ所に。つかふ人のかぎりしてあるはかひなく
こそおほゆれ。猶おなほごにて。ひとつ心にかしき事
もさまごいひあはせつべき人。かならずひとりふたり
あまたもさそはまほし。其ある人の中にも。口をしからぬ
もあれごも。めなれたるなるべし。をごごごご思ふに

五十九段

こころづきなきもの
こそあめれ。わざとたづねよびもてありくめるはいみし
まつりみそぎなどすべてをのこの見る物見車に。只ひと
りのりて見る人こそあれ。いかなる人にかあらん。やんご
どなからずごも。わかきをごごもの物ゆかしと思ひた
るなど引のせて見よかし。すきかけにたゞひとりかゞよ
ひて。心ひとつよまもりたるらんよ。いかばかり心せはく
けにくきならんごごおほゆる。物へもいき。寺へもまうづ
る日の雨。つかふ人などの我をほおほさず。何がしこそ只
今時の人などいふをほのきよたる。人よりはすこしにく
しとおもふ人の。おしはかりごごうちし。すゞるなる物う
ら見しわれさかしがる」

六十段

わびしげ
「わびしげの意。げはわすす。或は
へきやうすさいふにて。俗にイヤニミ
ル。イヤニ思フなごの意」

わびしげに見ゆる物
六七月のうまひつじの時はかりに。きたなけなる車にえ

はりむしろ 雨覆ひ服車などにむしろをは
る事四宮記に有るはくひなり

かたる 乞見。和名云。列子云。齊有貧者
常乞於城市。乞見云。天下之辱莫過於是。
和名加多井
〔増〕弘云。土佐日記。二月四日の條に。日も
はからはむつたふなりけり。と見えたり

せんくしたる 僧正の馬。つりて供養し
たる云

なつばされどよし 雨にぬれても冬のやうに寒かればなるべ
し

すめしんのたま 近衛の番長。環翠軒云。
近衛顯身の上。鶴を番長といふ。泰氏下毛氏
等今に顯身たる云。勢東は。鶴の衣冠。又は鶴
衣に花をつけたり。時に依て出立様々
のふのけさ

和名云。俗云。能。智度論云。
五比丘。白佛當。著。何等衣。佛言。應。著。三。稱
衣。袈裟。和名袈裟。天竺語也。此云。無垢衣。
又功德衣。俗云。介。佐
ての少將 出居次將は。賭弓などに帯銀し。弓箭をきりて。主上の出御に警備を講ず。江次第に。五月の長勝講。七月の相撲節などにも。出居
次將若座の事あり。是らの折あつげなるにや。出居の座敷上。にあり。雲圖抄に委
きんのふくろ 河海云。管絃の器皆發に在る。事本儀。下。すはうのあざり 修法。開。講。覽。な。ご。修。する。僧。云。
あつたれのかぢ 和名云。鐵治打。金。鐵。二。爲。器。也。俗云。鐵治。説也。くるがれなうつも。六七月には。暑。る。べ。け。れ。ど。あ。つ。た。れ。い。へ。ば。又。あ。つ。け。な。る。
にや

せ牛かけてゆるボしゆくもの。雨ふらぬ日ばりむしろし
たる車。ふる日ばりむしろせぬも。年老たるかたる。いとこ
むき折も。暑きにも。けす女のなりあしきが子をかひたる。
ちひさき板屋のくろうきたなけなるが雨にぬれたる。雨
のいたくふる日ちひさき馬にのりてせんくしたる人のか
うふりもひしけ。袍も下襲もひとつになりたるいかにわ
びしからんと見えたり。なつばされどよし

あつけなるもの
ずるじんのをさのかりぎぬ。のふのけさ。でるの少將。いっ
しくこえたる人のかみおはかる。きんのふくろ。六七月の
ずはうのあざり。日中の時などおこなふ。又おなじ比の銅
のかぢ

はづかしきもの

六十二段
をとこの心の中
イ水いろこのむ男の心の中とあり。女はお
るかにて。色好む男のすかし安く思はんが
恥かしき心。猶おとに委
〔訂〕弘云。萬葉抄にも。此の上にいるこのむの
五んじありて。いこのむをとこの」とあ
り。なくてもしかるべし
いざとよめる僧
夜をもれぬ心。河海云。夜居僧内裏の二間
に候ひて。夜もすがら加持まるる僧云々。
其恥かしき心跡にあり
くらさまきれにふところ
盗人の隠れぬて見るをもしらで家人の物置
む
あなうたてかしかまし
御前ちかき人の。夜居の僧のきく事を心得
させんさていふ詞
いひくつてのはては
拾遺「世の中をかくいひくつてはてはくは
いかにやいかにならんとすらん
こなたの詞斗を用
うたておもふさまならず
男の心に思ふやうならずもどかしさるる女
も先さしむかひてはふかく思ひがほにすか
したのむるさ
情ありこのまじき人にしられたる
情あり好色人にてありと世にもしられたる
男はと
心のうちにもあらす
男の心中の恥かしきみにあらず。しわざ

をとこのこころのうち。いざとよめるの僧。みそかぬす人
のさるべきくまにかくれぬ。忍びて人のするをみるらんがはづかしきと
はしらん。くらさまぎれに物ひきいる。人もあらんかし。
おのれもす人なれば
それはおなじ心にかしと思ふらん。よめるの僧はいど
しき事をいふ
はづかしき物也。わかき人のあつまりては。人のうへをい
ひわらひ。そしりにくみもするを。つくぐときよあつむ
る心のうちもはづかし。あなうたてかしかましなど。御前
ちかき人々の。物けしきばみいふを。きといれずいひひ
てのはては。うちとけてねぬる後も恥かし。男はうたて思
はづかしき事をいふ
ふさまならず。もどかしう心づきな事ありと見れど。さ
しむかひたる人をすかしたのむるこそはづかしけれ。ま
つれの男だにはづかしきと
してなきけ有このまじき人にしられたるなどは。おろか
すかしたのめて。浅からず思ふ人と女におもはするが恥かしと
なりと思ふべくももてなきすかし。心のうちにのみもあ

にもうちとけがたき所有と也

我がばしらで

男の心中を察していへる詞也
なまなく人にわたらるゝをしらで。只かく
外の女の事をかたるを。我をこよなく思ふ
故かたる成けりさのみ女の思はんか。男の
思ふが助かしきま

心もなき物なめりさ
又あはしと思ひつめ。男に對しては。心
もなき女ぞと見えてもはづかしからぬと

さすがに人のうへをば

さやうに情なき男の。かへりて人の事はう
らみもどきて。我が非をいひつくるふま

たいにもあらず成たる

彼宮仕へ人の體態せしなも情なく見捨て其
事をもりあへずしてやみはてしき
【訂】弘云。萬葉抄に。成たるは成ぬるに作る。
又結句「なまなく思ふ」を「なまなく思ふ」
か。活本には「なまなく思ふ」にてなまもあめ
るよとあり

此女の事はかの女にかりたき事とす
らず。又みなこれが事はかれにかり。かれか事はこれに

いひきかすべかめるを。我がこころをばしらで、かくかたる

をばこよなきなめりごおもひやすらんと思ふこそはづか

しけれ。いであはれ。又あはしと思ふ人にあへば。心もなき

物なめりと見えてはづかしくもあらぬ物ぞかし。いかにし

く哀に心ぐるしけに見捨てたき事なごを。いかにか何事

とも思はぬも。いかなる心ぞこそはあさましけれ。さす

がに人の上をほもどき。物をいとよくいふよ。ことには

にもあらず成たるありとすまなごをもしらでやみぬるよ

むとくなる 無徳也せなくよしなき事也

【増】源氏乙女の巻に「水のうへむとくなるけ
ふのあつかしさかな」とあるも此所と同
意也。無徳などいふにかなへり
すまひのまけて

相撲の節にて禁中にある也。年中行事公
註云。相撲といへる事は諸國の供御人をめ
しあつめて。七月に相撲の節といふことな
おこなひて。天子御覽する也。始めを召合
せさいふ。後にすむりてめされん事をば
ぬきてと申す。下巻江次第雲圖抄に委し
心と出来たる。イ本此次になま心をとりし
たる人のそりなる事いひむつかりて一つ
にもふさく云々あり。前のれたき物にあ
れば不用

【訂】萬葉抄にも。此次に「なま心をとりし
る人さ心なることいひむつかりて云々」と
いふより數十句あれど大方は上の五卷に。
れたきものさある宋文と大同小異にて互復
すれば省きつ

こまいゆしくまふもの。和名四。曲調類
高麗樂曲の中に。猶犬とてあり。此まひを
舞もの、奥に乗下て踊るが無徳なるにや。
俗人にさふべし

修法は佛眼眞言 是は無徳なる物にあらす
例のふと書出たる筆すさびなるべし。佛眼
尊は曼陀羅圖の中央にあり。一切諸の佛菩薩
隨に圍繞せられ。諸の佛菩薩の功徳を具足せり。亦佛母尊とも號せり。時金剛薩埵對一切如來前。總持現三作一切佛身。住大自強。
身作百目。兩目微笑。二手住。諸如入。香摩地。從三一切支分。出生十道。河沙俱。隨。一々佛。皆作。禮敬。下。此修法の次。等。其。言。家。秘密。也。かの。修
法。等。べし。【訂】漢接。例の筆すさびにはあらす。こは修法はさいなる一段也。さくいはるは下文陀羅尼はたその例なり

【訂】漢接。例の筆すさびにはあらす

むとくなる物

干瀉

しほひのかたなる大なる舟。かみみじかき人の。かづらど

りおろして髪けづる程。大なる木の風に吹たふされて。根

をさくけてよこたはれふせる。すまひのまけているうし

る手。えせものすさかかんがふる。翁のもどりはなちた

る。人のめなどのすざるなる物えんじしてかくれたるを。

必尋ねさごがん物をと思ひたるに。さしも思ひたらず。ね

たけにめてなしたるに。さてもえ旅だちるたらねは心と

出来たる。こまいぬしくまふ物のおもしろがりばやり出

てをどるあし音

修法は佛眼眞言などよみたてまつりたる。なまめかしう
たふとし

はしたなきもの

はしたなき物 物の相照せぬ心。よわき物につよくあたる類。
 [増] 源接。今いふつまらぬといふにちかし。語の原ははしたなる意にてなきはそへたる詞のみ。
 弘云。はしたは。源氏末摘花の巻に「はしたなる大きき女」竹取に「立つもはした居るもはしたにてあたまへり」其他にも多くなる詞なれど。俗にいふ。不都合の意。なきは。いとけなき。いはけなき。などのなきは同意にて甚ものじの意。源氏夕顔の巻に「はしたなきほどにならぬさき」とあるも甚不都合の時分ならぬ前にと解してよく通ふべし。故に此所も甚不都合なるものといふ意。
 [訂] 且まばぬにさへさし出るに。まして物さらす折はいと。はしたなきの意。原註わろし今改めつ
 其人のある前
 其そしられたる人の前にて童の意地わるく告たるなるべし
 八幡の行幸 一條院の行幸。榮花物語さくしの悦ひの巻云。永延元年といふ二月は例の神わざごもしきりて。所々の使たち何くれといふほどに過ぬ。三月は石清水の行幸あるべければいみしういそがせ給ふ云々。此時の事にや江次第十六に。石清水行幸の次第あるべけれど今撰たり
 さばかりの御ありさま
 選挙の諸官供奉のめでたき帝の御ありさまにて。女院の御消息を敬せさせ給ふ事。みなあらはれ 願はなるべし。泪に白粉の

こと人をよぶに。我もとてさし出たるもの。まして物とらする折はいと。おのづから人のうへなどうちいひそしりなごもしたるを。をさなき人のきとりて。其人のある前にいひ出たる。哀なる事など人のいひてうちなくに。けいと哀とはきまながら。泪のふつといでこぬいごはしたなし。なきがほつくり。けしきことになせせいとかひなし。めでたき事をきくには。又すづろにたゞいできにこそ出くれ。八幡の行幸のかへらせ給ふに。女院御さじきのおなたに御こしをとどめて。御せうそ申させ給ひしなど。いみしくめでたく。さばかりの御ありさまにて。かしこま申させ給ふが。世にしらずいみしきに。まことにこぼるれば。けさうしたるかほもみなあらはれて。いかに見ゆるしかるらん。せんじの御使にて。たゞのぶの宰相中將の御

おられたる
 せんじの御使
 帝より女院への御使。宣旨御使なるべし
 隨員四人 宰相中將の召員せられし

すこしはほうりおりて
 女院の御機數より遠くより密信廻下馬し給ふなり。禮儀
 院の別當 女院の大別當。職原抄追加云。院
 大別當 大臣公卿清華之人任之
 女院も大署。院と同云々

さてうちわたらご
 女院の御機數の前を帝の洗御

うれにはががきき
 かやうのめでたき事には清少の泪さめがたくて笑はる。物の哀なる事をきよてはかへりて泪出てぬここのありさまをべし
 かうたにおもひほらするか。しこしやいはんや帝女院あごの御事は。猶かやうにおもふも恐れ多しと
 くる月より
 黒月。拾芥に瀧口の戸の四さあり。大鏡云。こまつ帝申す此御時に藤原の上の御局の黒月はあきたるご問侍るはまごこにや

の御機數へん

ごじきにまわり給ひしこそいごをかしよう見えしか。只隨身四人いみしうさうぞきたる馬そひのはそうしてたるばかりして。二條のおほちひろうきよらにめでたきに。馬を馬をはやめて。うちばやしていそぎまわりて。すこしとほくよりありて。女院の御目まはりならわつたの。そはのみすのまへにさふらひ給ひし。院の別當ぞ申給ひし。御返しうけ給りてまたはしらせかへりまわり給ひて。御こしのもにてそうし給ひしほど。いふもあろかなりや。さてうちわたらせ給ふを見奉らせ給ふらん女院の御心思ひやりまらするば。とびたちぬべくこそおほえしか。それにはながなきをしてわらはるよぞかし。よろしきさばのひとだに猶此世には。めてたき物を。かうだにおもひまらするもかしこしや。
 是より清隆公のめでたかりし事
 關白どのくろろ戸より出させ給ふとて。女房のらうに隙なくさふらふを。あないみしのおもとだちや。翁をはいか

大納言殿 御物云。伊周公正暦三年權大納言

したまはれしりなぐく 權柄藤原云。御は下殿の尻也。昔はつけけたるか着する時頼ひ有によりて。切はかして替之也。仍一としてかはる事なし。たけは代々の不同也。但近代進家に用れる分は。納言以前は八尺。大臣一丈。關白の時一丈二尺ばかり。大際かくのごとし。又可し隨時膝つばのへい 和名云。飛香會在弘徽殿北布知豆保

宮の太夫殿 勅物云。御堂正暦二年權大納言中宮太夫如元 榮花物語三云。六月一日正暦元年后にたせ給の定子太夫には右衛門督ごのなをしきこえさせ給へれどあり。是中關白の御弟御堂の關白道長公云

忌の日 春日の事云。六春日には殺生を斷事。於亦にも見ゆ

老人をわらはんご 女房の中へ出給ふにをこなりとわらひ給ふらんとわけいでさせ給へは。戸

口に人々の色々の袖ちちしてみすをひきあけたるに。權大納言殿御くつとりてはかせ奉らせ給ふ。いと物くし

うきよげによそほしけにしたがさねのしりながく所せばきく 大納言はかりの人にくくさふらひ給ふ。まづあなめでた。大納言はかりの人にくつをとらせ給ふよと見ゆ。山のゐの大納言。そのつぎく。さらぬ人々くろきものをひきちちしたるやうに。藤つは

のへいのもごより。とうくごでんのまへまであなみたるに。いとほそやかにいみしうなまめかしうて。御はかしなごひきつくるひやすらはせ給ふに。宮の太夫殿の清涼殿

のまへにたせ給へれば。それはあせ給ふまじきなめりと見る程に。すこしあゆみ出させ給へば。ふとあせ給ひしこそ。猶いかばかりの昔の御おこなひのほどならん

と見奉りしこそいみしかりしか。中納言の君の忌の日と

たべ其すゞしはし 句を切へし其殊敷を留給はれと云。中納言のあまりに行給ふをあざけりされて。珠衣なもとりて坊るままに

猶いさこめでたけれ 中納言をば笑へども實に關白殿の果報はめでたき也 佛になりたらん さまざま宿業の善果をうけば。關白ごの御身よりはおこらひて佛果かえまほしきと云 大夫ごの 道長の中關白殿につくまはせ給ふ云

此のちの御ありさま 道長公の後々の御榮花を后宮御存命にて見給はせと云。此御紙は清少の考後后宮去のいちかけるにや ことわりさおぼしめされ かく願勢ある御堂殿も道隆公にはつくばひ給へる事な。后宮おぼしめしあはせば。我がく感すもひし事はこそはりと思召れんご云

糸もたまに雨のせいり 雨の糸のきれおへく雨のせいりする云

くすかおこなふ木巻に注けつゝしからんごめく関てくすしがりおこなひ給ひしを。たべ其すゞしはし。おこなひてめでたき身にならんごかとて。あつちよりてわらへど。猶いとこそめでたけれ。御まへにきこしめして。佛になりたらんこそ。是よりはまさらめとてうちあせ給へる

に。又めでたくなりてぞ見せらるる。大夫ごのよるさせ給へるをかへすくきこゆれば。例の思ふ人とわらはせ給ふ。まして此のちのたありさまを見奉らせ給はましかば。清少の中云 后宮の御おこなひを感しおもふ人云

ことわりとおぼしめされなまし 九月ばかり夜一よふりあかしたる雨の。けさはやみて。あさ日の花やかたにさしたるに。せんざいの菊の露こぼるは

かりぬれかよりたるもいとをかし。すいがいらもんすきなどのうへに。かいたるくものすのこほれのこりて。所

かに糸もたまに雨のかよりたるが。しろき玉をつらぬきたるやうなるこそいみしうあはれにをかしけれ。す

いさおもしけなりつるに
其本にしがはばいさおもしけなりつるの
のわつるにさつてけて見るべし。露の風
まさりて面白にや

さみにも 領の字云。やびてきたへもせ

いざなごこれかれ 引申也。いざ見給へな
ご人々をさそひ儲す心云
むべ成けり 彼子共さかむほなるは尤云
耳無草なれば云

つめご翁哥 此五文字草を纏に。人をつみ
おどろかす心をそへたり。つめごもさかむ
かほにこたへはつれなし。あまたある中
には聞さいふ草もあるものを云。翁を纏
て云

二月くわんのつかさのうぢやう 是二月
列見の事なるべし。列見定考。始終の公考

こし日たけぬれば。萩などのいとおもけなりつるに。露の

かつるに枝のうちうごきて。人も手ふれぬにふとかみぞ

まへあがりたるいみしういとをかしといひたる。人のこ

ちにはつゆをかしからじとおもふこそ又をかしかれ

するに。見もしらぬ草を子どものもてきたるを。何とこ

れをはいふといへ。とみにいはず。いさなごこれかれ

見あはせて。みよな草となんいふといふものゝあれば。う

べなりけり。さかぬかはなるはなご笑ふに又をかしかれ

る菊の生たるをもてきたれば。

つめごなほみよな草こそつれなけれあまたしあれば菊

もまじれり

二月くわんのつかさにかうぢやうといふことするは何事

なればやうにいへるにや。江次第の釋奠
の所にも列見定考。二日。萬上廟祭。釋奠
例天曆二十八云々。

百寮訓要云。太政官の官人を云々。
大臣公卿政務を成敗の人は太政官の被官
之。辨少納言外記史など申す儀式官も皆太政官の内官云。列見は公事根源云。公卿辨少納言外記史など参りて太政官にて行へる公事云。六
位以下の職能あるものを指して。式部兵部の二省より準してまねるを。上卿を召よせて器量容儀を見る心云。朝所并宴饗の座につきて儀
式あり。委き事は定考の所にし侍へし中書。定考は。公事根源に云く是は昔六位以下の加附する人は。彼能行跡格勳を擧げて官爵を給
ひける云。上卿。官の東の座に著て事を奉行ふ次に朝所につきて三献の儀式あり。次に宴饗の座につく。各三献あり。大つた二月の列見に
なすは申侍る云。定考と文字には書て侍れどもかうぢやうと云ふ侍るは口傳にて侍る也。選叙令に委事はのせたり。其儀などは次第に見えたり
トなどはかけ奉りて。釋奠に孔子の像を掛てまつるにやせ。釋奠は二月上の丁の日なれば。ちな丁二月の中の公事さきりあはせていふる
べし。公事根源云。釋奠は二たひ二月と八月とあり。上の丁の日必おこなはる。大學寮にて孔子并十哲の影をまつる。上卿辨少納言あ
まわりて廟拜にち。宴饗の坐に若く文章博士題を出す。孝經禮記毛詩尚書論語易左傳年につけて用る。朝所にて孔子并十哲の影をまつる。職人持
て朝餉の前に進む。職人又一人御手水の間の。たの。實子にて。あれは何ものぞいふ。職人答てふんやのつかさの幸れる昨日の。説の昨と云
字を長くいひて高く捧て。殿中に入之中下。禮記王制に云く。釋奠先師。月令仲春將釋奠之。論語喜式江次第等に委仁平三年八月廿
二日云く。先聖先師九哲像巨勢金剛所寄云云
そうめいさて。イ本そうめうとて聰明これの公事根源に明る日。釋奠の昨をまわらすとある事云。江次第。釋奠の所に云く。祭官居。聰明
以三新敷高梁等一蓋公卿一註聰明者昨也。餅白黒。梁飯粟飯乾飯也。昨字案云音新祭福肉也
あやしき物なごはらけに。の餅梁飯などなれば云

もてきたり
「訂」原本にはもてきたるごあり。今活本に
よけて改めり

「いだん」といふ物を
餅飯 糝餅の中に鴨鴨などの子雞菜等を
いれ。糝合せて四方にきりたる物云。一名
餅飯ともいふ名にあり。是二月の列見

「いだん」といふ物を
餅飯 糝餅の中に鴨鴨などの子雞菜等を
いれ。糝合せて四方にきりたる物云。一名
餅飯ともいふ名にあり。是二月の列見

「いだん」といふ物を
餅飯 糝餅の中に鴨鴨などの子雞菜等を
いれ。糝合せて四方にきりたる物云。一名
餅飯ともいふ名にあり。是二月の列見

にあらん。しやくてんもいかならん。くじなどはかけ奉り
てする事なるべし。そうめいとて。うへにもみやにもあや
しさものなごかはらけに。もりてまらする。

「辨」の御もとよりとて。そのもづかさるなどやうなる物を
しるきしきしに。つとみて。梅の花のいみしく咲たるにつ
けてもてきたり。あにやあらんと急ぎ取いれて見れば。へ

「いだん」といふ物を二つならべてつとみたる成けり。そへ

「いだん」といふ物を二つならべてつとみたる成けり。そへ

「いだん」といふ物を二つならべてつとみたる成けり。そへ

「いだん」といふ物を二つならべてつとみたる成けり。そへ

齋僧の清少を懸よびて。又自然あふ
所などにてうらみ給ふ事を云云
殿上などあけくれなき
今齋僧の殿上人にて。清少もくも見え
る時達。たらはで。昇進の徒など殿上にも
あらざらん時は何を思ひ出にせん也。齋
僧當官頭中將云
さら也。勿論の事云云
さもあらんうちに。若夫。たたりてはあ
たら齋僧をえほめまらすま。と云
い。て。句をさるべし
人のほむる時も夫婦なる身になりては。い
か。で。か。ほ。め。ま。ら。せ。ん。と云
心のおに出来ていひにく
ほめたき折も心に夫婦とおもふを遠慮出来
ていひにく。からん。と云。心の身は心のあ
やまりを我と耻おもふやうの心云
それ。が。に。く。ら。す。は。こ。そ。あ。ら。め
夫婦なる人をほむるがにくきゆ。我は口
に。た。ひ。き
「増」案花物語哥合の巻に
「うれしきはもろやの。か。は。梓。弓。君。も。た
ひ。く。心。あ。り。け。り」
漢語。此。の。た。ひ。き。の。詞。後。に。昔。頼。朝。に。て。ひ。い。き
さいふはた。ひ。き。を。の。べ。い。ふ。の。み。別。の。口
にあらず。源河百首にも「梓弓ひきくた
れ。も。い。の。ら。ん。」と。よ。め。り
た。の。し。げ。な。の。事。や
思ふ人を懸くいふを懸立人こそ頼もしけ
れ。それを懸しよはたのもしげなしと云。
畢竟清少の姿まよき無色なれば。頼むた
なき心をこめていへるなるべし

八雲云うるはしく也
まほにちかくはかたらひ給はぬ。さすかににくしなど思
ひたるさまにはあらずとしりたるを。いとあやしくなん。
さはかり年ごろに成ぬるさくいの。うとくてやむはなし。
殿上などにあけくれなきをりもあらは。何事をか思ひ出
にせんとの給へは。さら也。かたかるべき事にもあらぬを
さもあらんの中にえほめ奉らざらんが口をしき也。う
への御前などにて。や。く。と。あ。つ。ま。り。て。は。め。き。こ。ゆる。に。い
か。で。か。た。お。ほ。せ。か。し。か。た。ば。ら。いた。く。心。の。お。に。出。来。て
い。ひ。に。く。侍。な。ん。物。を。と。い。へ。は。わ。ら。ひ。て。な。ご。さ。る。人。し
人よりほむるもあれは。見んのも。遠慮あるまじき事云云
も。よ。そ。め。よ。り。は。か。に。ほ。む。る。た。ら。ひ。お。ほ。か。り。の。給。ふ。そ
れ。が。に。く。か。ら。ず。は。こ。そ。あ。ら。め。男。も。女。も。け。ち。か。き。人。を
方引。之。盛。其。の。心。云
か。た。ひ。き。思。ふ。人。の。い。こ。う。か。あ。し。き。事。を。い。へ。は。は。ら。だ。ち
な。ご。す。る。が。わ。び。し。う。お。ほ。ゆる。なり。と。い。へ。は。た。の。も。し。け
な。の。こ。と。や。と。の。給。ふ。も。さ。か。し」

しきまわり給ひて
行成中宮にて清少をたらし給ひし云
隠人所のうやがみ
隠人所にある紙屋紙通。行成今隠人頭なれ
ば。此所の紙を清少への後朝の文に用ひら
れしにや。隠人所は後朝殿にあり。拾芥云
恒御物納。隠人所云々。紙屋紙通。秀
花抄云。紙屋の人初ていろ紙をすき出せる
也云々。北野のひみや川にてすき紙云
まうさうくん 孟嘗君が國谷園チ云し事
云。孟嘗百人一首抄云。孟嘗君といひし人
秦王にさらし。夜にまきされての。が。れ。し
時。雨谷の門の鳴。限。人。を。通。さ。す。孟
嘗君が三千の客の中に。鶴。明。と。て。は。鳥。の。ま
れ。を。よ。く。する。物。ま。れ。を。し。け。れ。ば。鶴。の。鳥。も
鳴。て。夜。深。に。關。を。明。て。通。し。け。り。云。々。
繪史記列傳十五二條
夜をこめて鳥の哥
後拾遺集ニ入。孟嘗云。は。つ。る。さ。は。た。ば。つ。る
云。相坂の關はゆるさ。ト。と。は。違。事。を。ゆる。さ
ト。と。云。惣。の。心。は。明。之。扱。國。谷。の。關。と。相。坂
と。を。や。す。ち。に。一。首。に。よ。み。出。ける。事。上。手。の
し。わ。ご。云。又。よ。に。達。坂。の。よ。に。さ。い。ふ。關。は。助
字。之。道。邊。軒。云。夜。深。き。に。鳥。の。鳥。を。た。ば。り
給。ふ。も。此。達。坂。は。雨。谷。の。こ。と。く。に。ゆる。す
ま。し。き。云。被。行。成。の。夜。深。く。歸。り。て。心。深。き
や。ま。なる。な。ま。さ。ら。は。さん。と。て。鳥。の。こ。も
に。留。り。て。さ。歸。り。の。給。へ。る。な。ま。さ。ら。の。鳥。に
た。ば。つ。れ。て。は。違。侍。ら。し。の。心。を。い。へ。る。云

頭辨のしきまわり給ひて物がたりなどし給ふに。夜い
どふけぬ。あす御ものいみなるにこもるべければ。うしに
へに禁中へまらんと云云
なりなほあしかりなるとてまわり給ひぬ。つとめて藏人
所のかうやがみひきかさねて。後のあしたはのこりおほ
かる心ちなんする。夜をどほして昔物語もきこえあかさ
んどせしき。どりのこゑにもよほされて。いとみしう
きよけにうらうへにことおほくかき給へるいとめでたし。
御かへりに。いと夜ふかく侍ける鳥のこゑは。まうさうくん
て。こ。こ。の。な。ら。鳥。を。な。が。せ。給。へ。る。云。又。行。成。船。よ。り。の。文。云
ん。の。に。や。と。き。こ。え。た。れ。ば。た。ち。か。へ。り。ま。う。さ。う。く。ん。の。に
は。ど。り。ば。か。ん。こ。く。く。と。ん。を。ひ。ら。き。て。三。千。の。か。く。わ。づ。か
り。し。云
に。さ。れ。り。と。い。ふ。は。あ。ふ。さ。か。の。せ。ぎ。の。事。なり。と。あ。れ。ば。
清少のうた云
夜をこめて鳥のそらねは。はかるとも世にふみかかのせ
ぎはゆるるべし
た。は。か。ら。る。事。は。侍。ら。し。の。心。云
心かしこせせせせせの侍るめりとせきこゆ。たちかへり。

清少に此君といふ詞を先せられて、けい
へるさていへる詞

よび出てな。女房などよび出て、清少もに
まんこのころ

竹の名もしらぬものを
清少は竹の名もしらで口上人達なれば
きみさいひし物なご

此君とせうす
明詠。藤原公。晋騎兵衛軍王子。此種而此
君。これ本朝文粹十一に修竹冬宵といふ事
を賦したる詩序の詞
殿上にていひきしつる事のほいもなくは
后宮の女房などよびまわすといひ期したる
本意もさげすして何さて師給ひしぞ

らんとて。中將新中將十六位ごもなご有けるはいぬ。頭辨は
ごまり給ひて。あやしきいぬる物ごもかな。おまへの竹を
をりて哥よまんとしつるを。しきにまありて。おなじくは
女房などよび出てをといひてきつるを。くれ竹の名をい
ととくいばれていぬるこそをかしけれ。たれがをしへを
しりて。人のなべてしるべくもあらぬ事をはいふぞなど
のたまへば。竹の名もしらぬ物を。なまねたしとやおほ
しつらんとはいへば。まことぞえしらすじなごの給ふ。まめご
となどいひあはせてる給へるに。此君とせうすといふ詩
をすして又あつまりきたれば。殿上にていひきしつるは
いもなくはなごかへり給ひぬるぞ。いとあやしきこそ
ありつれごの給へば。さる事には何のいらへをかせん。い
と中くならん。殿上にていひのしりつれば。うへも
きこしめして興せさせ給ひつるとかたる。辨もる共にか

御文まわらせたるにこの事をけいしたれば
少納言命婦みかどの御文を后宮へまわらす
るさて。此清少の名を殿上人のほむる事
を申上しごなり

さりなすでも
たさひ取なしていふごも。一向に誇なき
事はかくほめ草にはせとごの心

あんゆうのんの御はての
圓融院一徳院の御交帝也。正暦二年二月十
三日に崩卅三。御はてごは御一周忌の事也。
正暦三年二月の事也

「増」公任集は。ふにう院さかけり
みな人。御ぶくぬき
御一周忌過て服衣をぬくご。除服の禮さて
河原に出で祝事なす事なごあり
花の衣になご。仁明天皇の御果過て人々叙

へすく。おなじ事をすんじていとをかしがれば。人々い
れは。見る。とりとに物ごもいひかはしてかへるとて。猶
おなじ事をもちこるはずんじて。左衛門のちんに入まで
きこゆ。つとめていととく少納言の命婦といふが御文ま
あらせたるに。此事をけいしたれば。しもなるをめして。さ
る事やありしとばせ給へば。しらす。何ともおほはで云
出侍しを。ゆきなりのあそんのとりなしたるにや侍らんと
申せば。とりなすごもどうちあませ給へり。たれがご
をも殿上人はめけりときかせ給ふをば。さいはる人き
よろこばせ給ふもをかし

あんゆうのんの御はての年。みな人御服ぬぎなどして。あ
はれなる事をあはやけよりはじめて。院の人も花の衣に
などいひけむ世の御事なご思ひ出るに。雨いたうふる日
藤三位のつはねに。みのむしのやうなるわらはの。おほき

謂なごせし時。通昭「昔人は花の衣に成ぬ
之苦の袂よわきだにせよ」古今にあり。
又榮花物語四ニかくて月日も過もて行て。
正暦三年に成ぬ。哀にはかなき世になん。
二月には。故院の御果あるべきなれば。天
下急きたり。御はてなごせさせ給つ。世の
中のうすにびなごはて。花の袂に成ぬも
いさ物のほえあるさま云々
みむしのやうなるわらは。雨ふりて笠簀
きたるさま云々。誰方よりさしらすまき
さてかやうにせし。
きなんさばきつせ奉らす。かやうの使有と
藤三位殿には申さす云々。物思なれば遺書
して云々
くるみいろ。源氏にもたまの胡桃色の紙と
あり。表は香色に裏は白き侍云々

これをだにうたみと替
後拾遺の寄。同書この草紙も同心云々。
これをだにせは。服衣を成とも云々。しひしは
の袖とせ。八雲御抄に四位の異名云々。原
かだに故院の形見と加召すに。藤三位は原
めき加贈せしと云々。藤三位四位より加贈
せしなるべし。山僧のせしやうに藤三位は
と云々

仁和寺の僧正。榮花物語三云。仁和寺の僧
正さきゆゆるは。土御門の源氏のおとこの
御はらからにす。にわたのみことさき
えける御子におはす云々。實御僧正也。式部
卿敦實親王の三男雅實公の御弟云々
藤大納言。開成院の別當さきゆゆる。いまだ
藤三位も勤へ侍らす

なる木のしろきにや
藤三位の女房の詞云
は。いつこよりぞけふあす御物いみなれば。御しとみも虫
あけぬと云々
のらぬぞとて。しもはたてたるしとみのかみよりとりい
れて。さなんとはきかせたてまつらず。物いみおれば見え
ずとて。かみについさしておきたるを。つとめて手あらひ
て。其巻数とこひてふしをかみてあけたれば。くるみいろ
といふまぎしのあつごえたるを。あやしと見てあけて
ゆけは。老はうしのいみしけなるが手にて
一條院御うた
これをだにかたみとおもふ都には葉がへやしつるしひ
しはの袖
藤三位の心云
とかきたり。あさましくねたかりけるわさかな。たれがし
たるにかあらん。仁和寺の僧正にやと思へど。よもかよる
ことのためはじ。猶たれならん。藤大納言ぞかの院の別當
そおはせしかは。其したまへる事なめり。これをうへの御

それをふたつながら
權榮の袖のミナと藤大納言の返歌ミナつな
もちて。藤三位参内する也

僧がう
也
藤三位の詞云。藤三位僧都律師などいふ
也

此わたりに見えしにこそはいさよくにたれ
其老法師の哥は。帝の御つたにあるうたに
似たるとて。御厨子のもさなる御歌草を取
いでさせ給ふ云々
これおはされ
是いかなる御事ぞおぼしめして御らんあれ
と云。藤三位の詞云。しわさしわらぬらぬ

まへ宮などいかにせしめさせばやとおもふに。いと心
おどなけれど。猶おそろしういひたる物いみまじ果むと
ぬんじくらしして。またつとめて藤大納言の御もとに此御
返しをまてしおかせたれば。すまはち又返事しておか
せ給へりけり。それをふたつながらとりていそぎまゐり
て。かよる事なん侍しとうへもおはします御まへにてか
たり申給ふを。宮はいとつれなく御らんじて。藤大納言の
手の上まればあらで。法師にこそあめれどのたまはすれ
ば。さばこはたれがしわさにか。すきくしきかんだちめ
僧がうなどは誰かはある。それにやかれにやなどおほめ
さゆかしがり給ふに。うへ。此わたりに見えしにこそはい
とよくにたれれとうちはよきまをせ給ひて。今ひとすぢ御
づしのもとなりけるをとり出させ給へれば。いであな心
う。これおはされよ。あなかしらいたや。いかできし侍ら

おにわらばい、かのむしのやうなるまふし
首尾之。鬼童丸とて古ありし。
小兵衛 后宮の女御前におりし人。

ひきゆるがしかりて
后宮を藤三位のこころまぬらせらるゝさま
ふ。帝をこころ申さんば御りあればこ

いさほこりかにあいやうづき
御乳母なればはこれるものから。ますめに
愛敬ある。

だいはん所にも 禁中の置盤所は女房の侍
ひ。彼刀白がわらはを尋ね出むため
文よりいれし人に
かの使のわらは、是かきて其文うけざりし
藤三位の女房に見すればこ
つれづれなるもの

「改訂」つれづれなるもの
じ。何事もなす事なく茫然としてゐるこ
そをいふ。
さころさりたる物いか
ふかくつしむ時家をさり分にて物忌する

六十五段

んど。たゞせめにせめ申てうらみきこえてわらひ給ふに
やうくおほせられ出て。御つかひにいきたりけるおに
わらは、うたいはん所のとじといふものよともなりけるを。
こひやうはがわたらひ出したるにやありけんなどおほせ
らるれば。宮もわらはせ給ふを。ひきゆるがし奉りて。など
かくはからせおはします。猶うたがひもなく手をうち洗
ひて。伏をがみ侍し事よとわらひねたがり給へるさまも
いとほこりかにあいやうづきてをかし。さてうへのだ
いはん所にもわらひのしりて。つはねにかりて。此わら
はたづね出て文とりいれし人に見すれば。それにこそ侍
めれといふ。たれが文を。たれかどらせしぞといへば。しれ
くどうちをみて。ともかくもいはではしりにけり。藤大
納言後に聞て笑ひ興じ給けり」
つれづれなるもの

六十六段

うまおりの双六
馬は袋の事。晋書裴彦道が傳に。投馬經
叫とあり。是傳局にむかひての事。うま
おりのは双六に思ふ目のかりぬ
「訂」源按。袋を馬ともいへば。うまともかく
まじきにはあらざり。こころやう。高麗本
にめさあるや正しがるべき。馬も吳音にて
龍馬などいへば。なまさかしらなる人の口
ひがめたるにもあるべし

なごこのうちさるがひ
前にはさるがひさあるにむな。袋とて
在首などいひたはる。
輪いみなれ。つしむ折なれど與ある人
なればいるいこ

みそひめ 齋齋之齋齋云。非米非稻之齋也
と和名にあり。衣にひめのりして張は。こは
くせんためなるにねれてはざり所なかるべ
し

あさ火の火ばし
門燈火筋也。あさ。五音相通也。和名云
周禮云。門燈。門燈。俗云門火。
但此一句。祭忌の事なれば時によりて變つ
くまじき歟
「増」源按。相通も詞により。このあさひは
即跡火の意にて。裏を送り出せしあさにて
たく意なれば。あさ火といふべし。願氏家
訓。喪出之日。門前燈火云云

六十七段

ところさりたる物いみ。うまおりのぬすらる。ちもくにつ
かさえぬ人のいへ。雨うちふりたるはましてつれづれな
り」
つれづれなるもの
物がたり。で。すらる。三四はかりなるちこの物をかし
ういふ。又いごちひさきちこのものがたりしたるが。あみ
なごしたる。くだ物。をどこのうちさるがひ物よくいふが
きたるは物いみなれどいれつかし」
とりどころなきもの
かたはやくけに心あしき人。みそひめのぬれたる。これい
みしうわるき事いひたると。よろづの人にくむなる事と
て。いよとくむべきにもあらず。又あどびの火はしといふ
事などてか。世になき事ならねは皆入しりたらん。けにか
さいで人の見るべき事にはあらねど。此さうしを見るべ
き

なごて 句をきるべし。禁忌の事ながらい
 かて書出まじき事なり。あやしき事
 は。衣箱箱之。にくき事は。あさびは人の
 いかにくむ事なれば。

六十八段

りんとまつり。江次第六云。石清水臨時
 祭三月中旬日有。午時用。賀茂臨時
 祭十一月下旬日なほ次第。圖は雲圖抄
 にあり
 おまへば。りの事。臨時の祭に御前の座を
 いふ事あり。座座ともいふにや。外になき
 事なれば御前ばかりの事といふなるべし。
 江次第六云。御前座。御前座をはりて
 主上御ありて。侍下に侍御あり。職人頭
 召の由を告て。公卿以下座下の座に若く。
 又職人頭御せを承て侍御人以下を召て。
 献二献過て大臣座に若く。さて三献過て
 垣下の公卿座あり。御前をすまて階下
 音楽をなして。音曲の空を舞す。四献五献過て舞人階下重座を給ふ。さて舞頭の花を給ひて。使は左のたにさし。舞人は右の力にさす。
 「増」はかりは。ほごの意。つれの間にいささ
 し。くもいささ。試樂りんとまつりの音楽を先こるむる心。石清水の臨時祭の試樂は。祭の前一兩日に行し。賀茂臨時之。雲圖抄にあり。圖もあり。御殿の床に侍下。出御ありて。四位職人。舞人あせは。舞人竹置のしにて竹の枝を折かして。仁徳殿の廊の下より。御前につらなり。階下近衛の召人女子うたひ。呼笛ひちりきのれをあげ。舞人舞終りて大比禮。へしうたひてまわり出る由。公事根源にあり。猶
 次第は江次第二巻。百寮訓要云。諸祭は御前座の事を奉行する所。但もむしる風情の物を沙汰する所云々。藤原抄にも。舞人頭御せを承て侍御人以下を召て。三献過て。大臣座に若く。さて三献過て。垣下の公卿座あり。御前をすまて階下音楽をなして。音曲の空を舞す。四献五献過て舞人階下重座を給ふ。さて舞頭の花を給ひて。使は左のたにさし。舞人は右の力にさす。りんとまつり。江次第六云。石清水臨時祭三月中旬日有。午時用。賀茂臨時祭十一月下旬日なほ次第。圖は雲圖抄にあり。

き物と思はざりしかば。あやしき事を。にくき事をも。只
 思はん事の限りをかへんとて有し也。
 なほ世にめでたき物

りんじのまつりのおまへばかりの事は何ごどこにかあらん。
 しがくもいとをか。春は空のけしきのどかにてうら
 くどあるに。清涼殿の御まへの庭に。かもりづかさの丸
 たみどもをしきて。つかひは北おもてに。まひ人は御前の
 かたに。これらはひか事にもあらん

つひは北おもてにし。賀茂の臨時祭の使の座は北面。南祭の時は又南面なるよし雲圖抄にあり。此草紙のまは南祭のよしなれば不替。りて是らはひが事にもあらんといへるにや。大やうに書たるなるべし。
 ついさされとも。石清水の臨時祭の御前の座に内殿御前座をすする事江次第六に見

ゆ。所の衆は舞人階下などの瓶子を執るつ
 いがされをすする事おぼつかなし。但石清
 水立御前儀に突重を懸色以下投之とあり。
 此時所の衆もすむわたすべし。こは
 此儀式をいへるにや
 やくかひ。口訣あり
 「増」和名抄職員類云。鶴貝
 辨色立成云。鶴貝。夜久の器具。
 今按。本文未詳。但俗説西海有夜久鳥
 彼鳥所出也
 清涼殿。田各本和名今按以下作所謂清涼之紅
 縷之也とあるにて。このやくかひ貝にて
 作れる蓋なることしるし。されば女ぞ出て
 せりけるは蓋をさると
 「増」清涼殿下うち。ぼしては。酒をこぼさ
 して。春時抄其誤なり
 納殿。也足軒御前儀にてもなまめおめる
 所。こは。はやみちにつくかひをいれおく
 所にして。いばんとて。なまめおめるといへ
 るなるべし
 りんじのまつりの
 御前の儀果て舞あるべき事なり。江次第六
 に。掃部卿座主座除とあるは
 承香殿のまへのほごに
 承香殿は。和名に仁壽殿の北にあり云々。
 拾芥六内裏の圖に。清涼殿の丑方にあたる
 殿。職人舞人此殿のまへより。吳竹置をへ
 て清涼殿の前へ出る儀。江次第六臨時祭
 舞堂云。主上御有て玉簪着坐して殿上人
 座下の座に着。さて侍御人などを召。階下音
 樂をなす。職人所の懸色二人御琴を昇て吳

し。階下地下の職人
 べいじうも其日は御前に出いるぞかし。くぎやう殿上
 人は。かばるく。盃とりて。ばてにはやくがひといふ物。を
 のこなごのせんだにうたてあるを。御前に女ぞ出てとり
 ける。思ひかけず人やあらんともしらぬに。ひたき屋より
 さし出て。おほくどらんとさわく物は中くうちこほし
 てあつかふ程に。かろちかになどとり出ぬるものには。お
 くれて。かしこきささめごのに火焼屋をしてとりいる、
 こそをかしかれ。かんもりづかさのものもたみとる
 やおそきと。このもりづかさの官人ども。手ごどには。さ
 とりすなごならす承香殿のまへのほごに。笛をふきたて
 ひやうしうちてあそぶを。とく出こなんごまつに。うごは
 のうたひもの。江次第に清涼出至吳竹置下とあり。職人所懸色二人舞御琴一とあり
 まうたひて竹のませのものにあゆみ出てみここちうちたる
 ほどなど。いかにせんとぞおほゆるや。一の舞のいこちる
 はしく袖をあはせてふたりはしり出て西にむかひて立ぬ。

上の御やしるの一の口のほとに
少將の執心をさめてこいに有しと。愚
木の社の事にや。賀茂の橋木のやしるは
原質方ないはし由。つれく草に見ゆ此
存にや論可辱之

やはたのりんどの
袋双紙云。入幡臨時祭は。先帝御時
始行也。件番は其之奉之。其番ニ松生
又も苦むす石清水行末遠くつへまつらん
下略
ろくをえてうしろより
内藤づかき藤の唐櫃を小坂にかけもてき
て。蔵入頭以下。使舞人などにくばりあ
ふる事江次第六に委
其たびへりてまひしは
南祭にむかしは還立なかりしを。近信お
なほるより江次第などに侍るは。此時よ
りの事にや

のに思ひしみけるに。なくなりて。上の御やしるの一の橋
のもとにあなるをまきは。ゆしう。せちに物おもひいれ
じとおもへど。なほこのめでたき事をこそ更にかおもひ
すつまむけれ

やはたのりんどのまつりの名残こそいとつれくなれ。
なごてかへりて又まふわさをせざりけん。さらはをか
からまし。ろくをえて。うしろよりまかづること口をしけ
れ。なごいふき。うへの御まへにきこしめして。あすかへり
たらんめしてまはせんなどおほせらる。まことんやさ
ふらふらん。さらはいかにめでたからんなど申す。うれし
がりて宮の御まへにも。猶それまはせさせ給へどあつま
りて申まごひしかは。其たびかへりてまひしは。うれしか
りし物かな。さしもやあらざらんどうちたゆみつるに。ま
ひ人まへにめすききつけたる心ち。物にあたるはかり

〔改増〕小二條 拾芥抄中末に小二條後賢卿
家、師尹公家、御堂殿以下、大二條殿傳領、
二條南東洞院東、南北二町或號山吹殿、
二條后高子宅と見えたり。

故このなごおはしまで世の中にこそ出
中開白道隆公覽し給ひて。御堂殿白し給
ひしに。道長公道隆公と兄弟の御中よ
ざるにそへて。伊周公も下心いごみか
ありしに。伊周公其時の太上天皇山院を
由なき恨にて射奉らんとし給ひしつみ。又
禁中ならでおこなはせ給はぬ大元師法を伊
周公年比おこない給へるつみ。又其比の女
院東三條院をのり給へり云つみなごに
て長徳二年四月太宰権帥に左遷し給へり。
御弟の隆家も花山院を給はんとせしつ
みありて。出雲へ御流せり。后宮定子は
此御恨にて御やしおろして籠りおはす由。
榮花物語三四の卷大鏡にも見ゆ
何ともなくうたて。其比清少を妬む者有
御堂殿がたへ清少の心ざしありと説したる
ゆみ久しく后宮へ出仕せざりしに
黄胡葉のからさぬ 桃華葉に七月より九
月に至る云々
紫菀 河海云もて藤芳うちもえぎ也云々
萩 おもてすばうらあなしと桃華葉に
あり

さわらもいと物くるほしく。しもにある人々まごひのは
るさまこそ。人のすさ。殿上人などの見るらんもしらす。
もをかしらにうちかづきてのゆるさわらふもことわり也
故このなごおはしまで。世の中のこと出き物さわがし
く成て。宮又うちにもいらせ給はず。小二條といふ所にお
はしますに。何ともなくうたてありしかは。久しう里に
たり。御まへわたりおほつかなさなご。猶えかくては
るまじかりける。左中將おはして物語し給ふ。けふは宮に
まわりたれば。いみしく物こそあはれなりつれ。女はうの
さうぞく。もからさぬなどのをりにあひ。たゆまずをか
うてもさふらふ哉。みすのそはのあきたるより見れつ
れば。八九人はかりるて。黄くちはのからさぬ。うすいろ
のも。しをん萩などをかしうるなみたる哉。御まへの草の
いと高きをなごかこれしはしげりて侍る。はらはせてこそ

「改訂したい」「る」は衍文にてたいや即ち
對屋なるべしといふ説あり。

かたりきかせ奉れさなめり
いかなる事にも清少は侍ふべき物と后宮
の思召しを清少へ傳へよそのやうに人々
左中將にいひしよ
るだいのまへの 是は禁中などの事を取ま
ど語給ふさまにや。露臺は仁壽殿の邊と江
次第六に見ゆ。但小二條にもるだいは作ら
れしにや
ぼうたん 牡丹。花の比ならぬ枝葉も
唐めきしよにや。唐朝に盛にもてあそびし
事日氏文集。愛蓮殿などに見えればはら
めきをかしよにや
げにいかならんと思ひ
彼左中將の后宮の御心むけの形をたたられ
しをうけて。げに后宮の御氣色はいかなら
ん心もさなく仰るべき事もなしと清少の
心
左大殿 道長公。長徳二年七月廿日。左大
臣と公卿輔任にあり

といひつれば。露おかせて御らんせんとしてことさらにと。
宰相の君のこゑにていらへつる也。をかしくもおほえつ
る哉。御里居いと心うし。かゝる所にすまひせさせ給はん
ほどは。いみじき事ありとも必さふらふべき物におほし
めされたるかひもなくなど。あまたいひつる。かたりきか
せ奉れとなめりかし。まありて見給る。あはれけなる所の
さまかな。ろたいのまへにうゑられたりけるほうたんの
からめきをかしき事などの給ふ。いさ人のにくしと思ひ
たりしかば。又にくく侍しかばといらへきこゆ。おいちか
おさなしやかなる同と
御けしきにはあらで。さふらふ人たちの。左大殿のかたの
人しるすちにてありなごさ。めきこしつとひてものなど
いふに。しもよりまゐるを見てはいひやみ。ばなちたてた
るさまに見ならはずにくければ。まゐるれなどあるたびの

をさめ 長女。下づかへのなんなり

おまへより 后宮の御つたより。左京のき
みかさり次にて。此文を給へりさをさめか
かたる

こゝにてさへ 后宮は識人のまへをおぼし
て清少への御文を忍ばせ給へるに。長女清
少のかたにても忍ぶと

山吹の花びら 山吹は口なし色なればいは
で思ふさいふ心なるべし
いはでおもふに 「心には下ゆく水のわきか
へりいはで思ふさいふにまされる」前にお
ほせ事もなくて日ごろになればさある首尾
なり

まづしるさま
〔増〕古今雜下ふみ人しらす
「世の中のうきもつらきもつとまくにまづし
るものは涙ありけり

たれもあやしき御あかぬ 清少の欠しき思
居を人々あやしがる也

仰せをも過して。げに久しうなりけるを宮のへんには
たゞあなたにたになしてそらごとなども出くべし。れい
ならずおほせ事などもなくて日ごろになれば。こゝろは
そくてうちながむるほどに。をさめ文をもてさたり。あま
へより左京のきみしてしのびて給はせたりつるといひて
こゝにてさへひきしのおもあまなり。人づつての おほせ事
にてあらぬなめりとむねつおれてあけたれば。かみには
ものもかゝせ給はず。山吹の花びらを只一つ包ませ給へ
り。それはいはでおもふぞとかゝせ給へるを見るもいみ
じう。日ころのたえま。思ひなげかれつる心も慰みてうれ
しきに。まづしるさまをさめめもうちまもりて。御前には
いかに物のをりごとにおほし出聞ひさせ給ふなる物をと
て。たれもあやしき御あがののみこそ侍めれ。むごかま
あらせたまはぬなどいひて。こゝなる所にあからさまに

問過してまわらざりし
后宮の御あたりには
后宮の御つたより
左京のきみ
をさめ文をもてさたり
あま
こゝろは
人づつての
おほせ事
かみには
慰みてうれ
しきに
御前には
侍めれ
むごかま
あらせたまはぬなどいひて

おなふる事さいひなから
同上古哥の中にも此哥はこゝに誰もよく受
えたる事をさ
こゝもさにおほえながら
世俗に心やすき事を足もさなる事さいひに
おなふ

はたかくれ 端隠すこし面がくしに清少
のゐる

〔増〕遊仙窟に。半面さあり

小町家集。しそけなきれくたれ髪を見せト
さやはたかくれけん今朝のあさかほ

又源氏もの羅松風の巻に
「几帳にかくれたるかたはらめ」さあるも意
はおなふ

あれは今まわりか
清少のうわしげなるをたはふれの給ふ
詞

此をりはささいひつべかりけり
いかでおもふなごしうれくにくげなる事な
がら。此折ふしにはかなふべしと

見つけてはしほしえこそ
是清少の久しくまわらざりし恨みなの給ふ
と。かくいふにまさる心中の無音の遺恨あ
れば清少を見つげすばこのうらみはなごさ
むますと。是も御たはふれと

ありぬべしなど仰せられて。ついでに。人のなごくあは
せしける所に。かたくなにはあらで。さやうの事にらう
そくなどの功者
くしかりけるが。左の一番はおのれいばん。さ思ひ給へ
なごたのむるに。さりとともわろき事はいひ出じとえりさ
むるに。其詞をさかかん。いかになごさふ。たごまかせて
だむるに。其詞をさかかん。いかになごさふ。たごまかせて
物し給へ。さ申ていと口をしようはあらじといふを。けにと
おしはかる。日いどちかう成ぬれば。猶この事の給へ。ひぞ
うにさかしき事もこそあれといふを。いさしらず。さらは
またのまれそなごむつかれば。おほつかなしと思ひなが
ら其日になりて。みなかた人のをどこ女あわけて。殿上人
などよき人々おほく居なみてあはするに。右の一はんに
いみしうよういしもてなしたるさまのいかなる事をかい
ひ出んと見えなれば。あなたの人もこなたの人も心もどな
く打まもりて。なごくといふほどいと心もどなし。天に

まかりてまゐらんといひていぬるのちに。御返事かきて
まゐらせんとするに。このうたのものとさうらにわすれたり。
いとあやし。おなじふる事といひながら。しらぬ人やあ
る。こゝもどにおほえながら。いひ出られはいかにぞや。
などいふを聞て。ちひさきわらはのまへにゐるが。下ゆ
く水のとこそ申せといひたる。なごてかく忘れつるなら
ん。これにをしへらるゝもをかし。御かへりまゐらせて。
すこしほどへてまゐりたり。いかゞとれいよりはつゝま
しうて。御木丁にはたかくれたるを。あれは今まゝのりかな
ごわらはせ給ひて。にくき哥なれど。此をりはささいひつ
べかりけりとなん思ふを。見つけではさほしえこそ慰む
かりてこそなごさむべけれさの心
まじけれなどのたまはせて。かばりたる御けしきもなし。
清少の哥の上句わすれし事
わらばにをしへられしことばなごけいすれば。いみしく
わらはせ給ひて。さる事ぞ。あまよりあなづるふる事はさも

なごくあはせしける
陰を左方右方わかれて音合のやうに勝負す
る事と。なごの音合さいふ物もあり。其た
ぐひなり

ひざうにかかしき
非常に之。さやうに奥ふかけにても。よの
つれならすをかしくてわらはるゝ事もやと
むつかれば 發憤
はらだつと
みなかた人 左右の方々の人々居分れたる
あはするに なごくを合せあらそふと

ありぬべしなど仰せられて。ついでに。人のなごくあは
せしける所に。かたくなにはあらで。さやうの事にらう
そくなどの功者
くしかりけるが。左の一番はおのれいばん。さ思ひ給へ
なごたのむるに。さりとともわろき事はいひ出じとえりさ
むるに。其詞をさかかん。いかになごさふ。たごまかせて
だむるに。其詞をさかかん。いかになごさふ。たごまかせて
物し給へ。さ申ていと口をしようはあらじといふを。けにと
おしはかる。日いどちかう成ぬれば。猶この事の給へ。ひぞ
うにさかしき事もこそあれといふを。いさしらず。さらは
またのまれそなごむつかれば。おほつかなしと思ひなが
ら其日になりて。みなかた人のをどこ女あわけて。殿上人
などよき人々おほく居なみてあはするに。右の一はんに
いみしうよういしもてなしたるさまのいかなる事をかい
ひ出んと見えなれば。あなたの人もこなたの人も心もどな
く打まもりて。なごくといふほどいと心もどなし。天に

右のかたの人はいさ興あり
此など意部もしりたるにて。さきやうけれ
ば。勝べきにて逸興おもへる云

あなたによりてこそさらに 彼勢功の人右
方に心よせて。わざと左にまげさせんとて
したるわざをしたられたし。片時のほどに
さま／＼思ひくださし云

口ひきたれて おぞみて物いふさま云
敷させく 勢功の人かち定めて。勝の
敷をさらせたる云。花鳥餘情云。吾合に負指
さてある云。天竺の吾合には金銀の藤の枝
を洲渡にすみて。かすさしの所におく。花
の枝にて敷をさるる云々

此人に論じかたせける
淺き事をあざけて。隠右にまげしに。左の
勝は辯しき事にはあられど。先勝をよきに
してこの功者に任せし云

さこそはあれ しらすさいふからは勝に定
むべき事ぞこの心云
つみさりける 罪去。つみをいひのがる
心云。右方の人に彼しらすさいひし人さま
く／＼いひわけて罪をのがれたる云

これはわすれたる事かは 此などは清少の
ことく忘れたるにはあらで昔しりて能しら

のなぞ之号振月のと云
はりゆみといひ出たり。右のかたの人はいとけうありと思
ひたるに。こなたのかたの人は物もおほえずあさましう
なりて。いとにく／＼あいぎやうなきて。あなたによりてこ
とさらにまげさせんとしけるをなご。かたとき程にお
もふに。右の人をこに思ひて。うちわらひて。や／＼さらに
しらすと。口引たれて。さるがふしかくるに。敷させく
敷さしの人を下知して。右方の詞云

さらにかずさすまじとろんずれど。しらすといひいでん
は。なごてかまくるにならざらんとて。つぎ／＼のも此人
に論じかたせける。いみしう人の知たる事なれど。覺ぬ事
は。さこそはあれ。何しかはえしらすといひしと。後に恨ら
れて罪さりける事を語出させ給へば。おまへなるかざり
は。さばおもふべし口をししく思ひけん。こなたの人の心ち
さこそしめしたりけん。いかににくかりけんなどわらふ。こ

右方にかやうに恨み思ふべし云
左の人の彼勢功のひさをにくみし事は。后宮に聞召おきけん云

清ヶザヤカ万葉ニヨマ
正月十日そらいとくらう雲もあつく見えながら。さすが
に日はいとけさやかかいてりたるに。えせものゝ家のうし
ろ。あらはたけなごいふものゝ。つちもうるはしうあをか
らぬに。もゝの木わかだちていとしもとがちねさしいで
たる。かたつかたはあをく。いまかた枝はこくつや／＼かば
てすばうのやうに見えたるに。ほそやかかなるわらはの。か
りぎぬは。かけやりなごして。かみはうるはしさがのほり
たれば。又こうはいのきぬ白きなごひきはこえたるをの
こと。ばうくははきたる木のもとにたちて。われによき木
きりていでなごこふに。又かみをかしけなるわらはへの。
あこめどもほころびがちにて。はかまひなへたれど色や
どよぞうちきたる。三四人。うつちの木の下からんきりて
おろせ。こゝにめすぞなごいひて。おろしたればはしりが

のこむわり云
れはわすれたることかは。みなひとしりたることにや
正月十日そらいとくらう雲もあつく見えながら。さすが
に日はいとけさやかかいてりたるに。えせものゝ家のうし
ろ。あらはたけなごいふものゝ。つちもうるはしうあをか
らぬに。もゝの木わかだちていとしもとがちねさしいで
たる。かたつかたはあをく。いまかた枝はこくつや／＼かば
てすばうのやうに見えたるに。ほそやかかなるわらはの。か
りぎぬは。かけやりなごして。かみはうるはしさがのほり
たれば。又こうはいのきぬ白きなごひきはこえたるをの
こと。ばうくははきたる木のもとにたちて。われによき木
きりていでなごこふに。又かみをかしけなるわらはへの。
あこめどもほころびがちにて。はかまひなへたれど色や
どよぞうちきたる。三四人。うつちの木の下からんきりて
おろせ。こゝにめすぞなごいひて。おろしたればはしりが

あまからぬに
「訂」原本はなをからぬと有て。註に平直なら
ぬとあり
弘按。イ木にあなをあるなよしとすべし。
故に今改めつ
しもとがち
管和名梓玉露すは枝のおほく出たる云
いけやりなごして
物につけてやぶりたるさま云
ひきはこえたる
「増」演云。下文八の巻にも「つほさうそくな
どにはあらで。たゞ引はこえたるが云々」
あり。此詞今も東帯にいふ詞にてうしるに
角袋たる所をいふ。こゝは引ふくらした
るをいふのみ
よき木きりて
よき桃の枝きりて出せよと云。これ正月の
卯杖のれうにこふなべし。延喜式會入式
に。正月上卯日の御杖に桃梅各六束云々

はしりかひ
はしりまがふ心云。ちりひくもれなごい
ふと云

梅などのなりたるをりも
此梅の枝をばひあへるこまく梅のなりし時
もするさ也

さかにもいれれば
相手の髪を悪かれといひて。手に入てもみ
なぞして。頼ても筒にいれざるこ
さかいみしうのふも
さやうに我がさいを悪かれを阻するこも
よき目うたん物をさ也

ないがしろなるけしき
しどけなきさま。空蟬帯にふたあひの
うちさだつ物ないがしろにきなしてさま
な

ひ。とりわき。あれにおほくなどいふこそをかしかしけれ。く

ろきはかまきたるをのこはしりきてこふに。まてなごい
の今まはしまてさいふのこののわらけをせす
へは。木のもどによりてひきゆるがすに。あやふがりて。

さるのやうにかいつきてをるもをかし。梅などのなりた
る折もさやうにぞ有かし」

ぬにや。みじかきどうだいに火をあかくかよけて。かたき
のさいをこひせめて。とみにもいれねは。どうをほんのう

手にしておしりて。いとこはからぬえほうしをふりやり
て。さばらみしうのろふも。うちばづしてんやと心もど

なけにうちまもりたるこそほこりに見ゆれ」

碁をやんごとなき人のうつとて。ひもうちどき。ないがし
るなるけしきにひろひかくに。おとりたる人のあすまひ

もかしてまりたるけしきに。ではんよりはすこしとほく
ておよびつ。袖のしたいまかた手にて引やりつらうち
たるもをかし」

つるはみのかさ。やけたる所。みづぶき。ひし。かみおほか
るをのこのかしらあらひてはすほど。くりのいが」

かばらけ。あたらしきかなまり。たゝみにさすこも。水を物
にいろゝすきかけ。あたらしきはそひつ」

ねずみのすみか。つとめて手おそくあらゝ人。しろきつぎ
はな。すゝはなしありくちで。あふらゝるゝもの。すゞめの
こ。あつきほどにひさしくゆあみぬ。きぬのなへたるはい
づれもくきたなけなる中に。ねりいろのきぬこそきた

六十九

つるはみのかさ
標和名標實也云々。ごんぐりの笠のたぐひ
なるべし

みづぶき
和名云黄實也。俗ニ鬼燈ト云。
其實似ニ馬頭ニ故以名之

かなまり
金碗和名前註
増「竹取物語」に「しろけれのかなまりかして
水なくみありく」などあり。水なごを入る
水を物にいろゝ透影

ほそひつ
孟津抄ニ綿をかけたむしりなど
するもの。翻流ニねりたけなどのたぐひ
云々

すゝはな
増「和名抄」に。蘇須々波奈さあり
れりいろのきぬ
練色の絹のなへたるはこ也

けり
増「弘云」白の練絹のよるびてあへたるか藏
けりその意也

なげなれ

七十二段

まぎぶのぞうのしやく、式部丞尉。百寮訓要云、地下の六位可憐も
の任云々。式部丞と民部丞は二省の丞と
て、必辭を給ふ由藤原抄に見ゆ。式部丞必
叙爵すといへど、猶地下にて昇殿もかな
れば殿きにや
まかきたる

「訂」此の五もト万歳抄にはなし
むしろの車のおそひ
蘆をおほひたる車なるべし。四宮記云天祿
四年十一月八日女御懐子於三東何^ニ三餘服^ニ
其儀御^ニ極櫛毛車^ニ其上張^ニ建懸^ニ錦色^ニ藤井下
藤原等^ニ御被^ニ之後取^ニ三張^ニ懸^ニ三管^ニ藤原等^ニ即以
飯御^ス

「訂」万歳抄并ニ活本にはおそひをすそひに作
れり
けびおしのはかま 是は檢非違使の下の督
の長の事にや。其故は環翠軒云。看督長と
て別當の召具する物みな赤き袴衣に白き布
袴を着る云。白杖を持って雜人等追拂之云々。
此出立をいやしけるにや
むねつふる、いこま。此所には氣つひ
むねつふる、いこま。此所には氣つひ
むねつふる、いこま。此所には氣つひ

七十三段

「訂」活本に見るの二字なし
おやなどの心ちあしう
孝子の心尤胸つふるべし。伊勢物語に。と
みの事さて御文あり。おどろきて見ればな

いやしけなる物

まぎぶのぞうのしやく。黒きかみのすぢふどき。ぬのひや
て給なき香し物^ニ
うぶのあたらしき。ふりくろみたるはさるいふかひなき
物にて。中く何とも見えず。あたらしくしたてて櫻の花
おほくさかせて。ごふんすさなどいろとりたるるをかきた
る。やり戸^{厨子}つし。何もるなかもはいやしきなり。むしろは
りの車のおそひ。けびおしのはかま。いよすのすぢふどき。
人の子にはうし子のふどりたる。まことのいづもむしろ
延喜式民部式にあり

むねつふる、いこま。此所には氣つひ
むねつふる、いこま。此所には氣つひ
むねつふる、いこま。此所には氣つひ

むねつふる、いこま

くらべ馬見る。もどゆひよる。おやなどの心ちあしうして
れいならぬけしきなる。まして世の中などさわがしき比。
よろづの事おほえず。又物いはぬちこのなき入て乳もの

ごいふ所を思ふべし。小學云。文王有疾武王不説冠帶而養。文王一飯亦一飯。文王亦再飯再飯云々是らの心なふべし。人などのそのうへなごいふに。是も例の所なごにて。人の我身の上を陰ごとするにむれつふるべし。

七十四段

うつくしき物
めぐみあはれむ心。尤美麗の心もあり
「増」弘云。愛の字の意。愛はうつくしいつくしきよむ。うもいも音かへり。うつくしきものは俗にアイラシキモノ。ふりにあきたる。姫瓜の事なるべし。べになごつけて。雀子を受けて紅袖をつけしにや。いぢりひさきちりなご。白氏文集十の親三兒戲一時に。即乾七八歳。綺綺三四兒。弄塵復闢草。靈日樂嬉嬉。下略

まず。いみしくめのどのいだくにもやまでひさしうなきいつも聞あそぶ所なる。れいの所なごにて。ことば又いぢるからぬ人のことむれつふるべしききつけたるはことわり。人などの其うへなごいふに。まづこそつふるれ。いみしくに是も例の所にてくき人のきたるもいみしくこそあれ。よべきたる人のけさの文のおそき。聞人さへつふる。おもふひとのふみとりてさし出たるも又つふる。

うつくしきもの
ふりにかきたるちごのかは。すゞめの子のねずなきする居おこ心にをどりくる。またべになごつけすゑたれば。おやすめの虫なごもてきてくむるもいとらうた。みつはかりなるちごの。いそぎてはひくる道に。いとちひさきちりなごの有けるを。めさごに見つけて。いとをかしけなるおよひにたれとちへて。おとななごに見せたるいとうつくし。あまのさまあまのさまにそぎたる兒の目に髪のおはひたるを。かきはやらで。

たすきがけにゆひたるこしの
是も見のさなるべし。源氏物語の巻に。たすきがけのたすき引ゆひ給へるむれつきぞうつくしげさそひて見え給へる云々。和秘抄云。むかしはななき人小袖をばさす。たすきといふ物をきたる。猶秘訣あり殿上わらは。童殿上とて。元服以前に昇殿する事。

八九十ばかり やつこのつとほばかりとよむべし
皇子は。七歳にて讀書はじめの事。桐壺の巻にあり。只人も八歳より小學に入て。洒掃應對書教など習ふ事禮記にあり人のしりにたちて。伊勢物語に。しりに立ておひゆけごさあり。後の聲によむべし。鴨子。四官記かものこ。増かけるふ日記。康保四年の條に。三月つこもりかたにかりの。この見ゆるを云々。さあるも鴨の子なるべし。下文八ノ巻にもありさりのつほ。

髪をむかしかりかたふける。うちかたぶきて物など見るとうつくし。たすきがけにゆひたるこしのかみのしろうをかもしげなるも見るにうつくし。おほきにはあらぬ殿上わらは装束したてられしのさうぞきたてられてありくもうつくし。をかしげなるちこのあからさまにい其ま、そひつきてたきてうつくしむほごにかひつきてね入たるもらうたしひひなあそびの道具ひひなのでうと。はちすのうき葉のいとちひさきを池よりとりあげて見る。あふひのちひさきもいとうつくし。何もくちひさき物はいとうつくし。いみしうこえたる兒の二つばかりなるが。しろううつくしきが前二註。このああのうすものなど。きぬながくて。たすきあげたるが。はひ出くるもいとうつくし。やつ九つ十ばかりなるをこの。聲をさなけにて文よみたるいさうつくし。鶏のひなのあしたかにしろうをかえげにひよこのさま短衣著たるやうなるをいふきぬみじかなるさまして。ひよくとかしがましくなきて。人のしりに後シリへたちてありくも。又おや

るほどはなき歟
とらのつえと 虎杖和名抄に伊太止里云々。其意のまだらにて虎の名あるよし本草疏にあり

むつかしげなる 又物うき心もあり

ぬひもの、ぬの精のうら也。和名云所訪切韵云。繡以五色絲刺万物形状也。
かほきの 猛服表。船装のたぐひ。表の裏付の表の縫目見えてむさくしきにや

むつかしげなる物

ぬひもの、うら。ねこのみ、のうち。鼠のいまたけもおひぬをすのうちよりあまたまるはし出たる。うらまたつかぬかはぎぬのぬひめ。ことにきよげならぬ所のくらき。ことなる事なき人のちひさき子どもなどあまたもちてあつかひたる。いとふかふしも心ざしなき女の心ちあしうして久しくなやみたるも。男の心の中にはむつかしげなるべし。

えせ物の所うる折
常はあなづらはしき物の、折にふれては時にあふ事

正月のおほね 鳥雲。國國は元三によひを六本に折敷を。高土杯六本に折敷を。すま一の臺に餅大根橋をもる。下界。行幸の折のひめまうち君。東堅子也。公事根源にひめまつともいへり。正月の女銀位に叙爵す。故姫太夫といふにや。公事根源云。あいまわらばさいふは。

えせもの、所うるをりの事

正月のおほね。行幸の折のひめまうちきみ。六月十二月のつごもりのよをりの藏人。季の御讀經の威儀師あかけさきて僧の文ごもよみあけたるいとらうくし。御どきやう佛名などの御さうぞくの所のしう。

内侍司の被官にて行幸の時。ひめ松きてをかしき馬に乗て供奉する。これが事也。これはみつ子を用らる。にや。三子は天子の守りになる由。由緒も侍る故とや。年ごとに申文を出して必五位の位を給ふ。是は昔より同じ名乘を相傳して。紀朝臣季明々名なる云々。にきりあてがせて御被をつさむる。六月十二月の夜の。節折の命婦。竹を持ってまわりて主上の御より始めて。所々の寸法を取果て。宮主に其ほどに切あてがへば也と公事根源にあり。延喜式藏人式云。十二月晦日諸司供奉荒世和世御裝束。一同二月云々。又云孫麻呂北兩方立御屏風。其北御屏風前鋪。小庭。節折藏人座。江次第にあり。雲圖抄に圖あり。常はひき。女官の此時座をかまへなど所をうる。季の御讀經の威儀師。季の御どきやうと。二月と八月に百敷にて大般若經を四々日講せらる事也。江次第首書云。季御讀經春秋二季讀首僧於南殿。讀大般若經。其内定。御前僧廿口。於御殿讀仁王經。下界。威儀師は此みどきやうに彼精涼殿にて仁王經をよむ。この御前の僧を引て入る。行幸の僧也。江次第第五季御讀經の所に。威儀師引。御前僧二入。自三明鏡仙華等門云々。四宮記云。南座東端威儀師候前居。發云々。雲圖抄。此圖あり。あかけさきて。官職便覽云。延暦十三年九月三日延暦寺供養記云。奉行僧二人威儀師從儀師始賜三赤裝束云々。僧の文ごもよみあけたる。僧の名ごも書し例文なるべし。江次第第五季御讀經事。例文。上卿前入。二年々僧名名僧輔師。解文外任并死去。袖文等與。御寺延暦寺等。聖教者注文。近過去年僧名上押紙書。行今年可レ請定之僧名。御どきやう佛名などの御さうぞくの所の。季の御讀經などに行事の藏人。清涼院をかざり。辨南殿をかざる事あり。佛名にもかざるを。發東。さいふ。藏人所の衆此時所をうるにや。雲圖抄の裏書云。季御讀經事。初日行幸藏人奏。在御殿御裝束。二辨奉。三仕南殿裝束。云々。すなはち圖あり。江次第十一云。御佛名當日の裝束。等如式下界。延喜式圖書寮云。御佛名裝束。御持佛一。南院繪案一。佛。供帶花香。金銅花盤二口。火爐一口下略。此外三千佛の像。二鋪十六佛名。經一部などあり。

かすがまつりのとねりども。大饗のどころのあゆみ。正月のくすりこ。うづるのほうし。五せちの心見のみらしあけ。節會御はいせんとうねめ。大饗の日の史生。七月のすまひ。雨ふる日のいちめ笠。わたりするをりのかんどり。

六饗のどころのあゆみ 二宮大饗大臣大饗等也。あゆみとは或説云大臣などの御慶賀に學生ごも列參して。嘉辰令月。歡無極。さいふ詩を所詠して。腰指の緒を給ふ事云々。公事根源云。二宮さば春宮中宮を中。王崩以下本宮に參上て拜禮の事あり。次に芝罘門の東西の廊にして。雲につく。先中宮の體につく。次に春宮の體につく。三殿の儀有云々。猶江次第。大臣大饗は前に委註。あゆみとは歩の字也。江次第に勸學院歩といふ事もあり。常にはこなる事なき學生などの此折に所をうるを云にや。

正月のくすりこ 年中行事書合註云。藤子は。なまなき童女にて侍り。是も唐紙は小兒よりのむ六文あれば。先御願を是になめさせてきこしめ
 うづゑのほうし 卯杖を奉る法師にや。卯杖の事前註
 五せちのこころみかのみぐしあげ 五節の事前に註。十一月五日朝庭の試あり。江次第書合抄書合。いづれも五節の舞妓を天
 子の御覽する事云。みぐしあげとは。五節舞妓につく女房云。江次第には理髪とあり。雲圖には髪上とあり。江次第十。五節御前試云。時魁先
 五節御参入替座。次舞姫上。階人頭連三同長橋東。禁從御入。免入者理髪一人。童女二人。若置番等之。下略他の物はまわらわ所への懸
 止の女房は入る事なゆるさる。ゆみりえせ物のこころみ云云
 せちみの御はいせんのうれめ 御膳所は天子の御給仕つかまつる事云。禁從抄云。陪膳采女尤可。然事也下略。江次第一。元日御前云其南置
 縁草歌。陪膳未女座。又云采女兼御膳兼御下等。七日御會御前御會にもつくのこころ。采女はいせしもなき女官なれども。せちみの御はいせ
 んの折は所なうるさの講云
 大聖の日の史生 大臣大聖に大政官の史生を召て。勸杯居飯の膳有て。膳を給ふ事あり。江次第に述。史生は大政官の細事を書註す官人。是
 時所なうる云
 「増」弘云。史生の二字にてしやうとむべし。官儀にて一のしは約まる例云。和名抄に。史生。俗二言如實とあり
 七月のすまひ 年中行事書合註云。相撲といへるは諸國の供御人をめしあつて。七月に相撲節といふ事をおこなひて天子御覽する云。始めを
 は召合せといふ。錢にすぐりてめされんするなわきて申す。其次第は江次第。雲圖抄に關あり。是もいやしき物の此折に所なうる心なり

くるしけなる物

おもふ人ふたりもちて
 圓花集云。御恩雨人二。右大臣「いづく
 なもよがる」事のわりなきにふたつにわく
 るわが身ともな

一の所に 鴨陣抄云。執柄者必置二座文宣
 旨一放野一人二又云三一所
 時めく人 攝家などに近習にて召つかはる云

夜なきといふ物するちこのめのだ。思ふ人ふたりもちて。
 こなたかなたに恨みふすべられたるをどこ。こはき物の
 けあづかりたるけんじや。けんだにはやくはよかるべき
 を。さしもなきを。さすがに人わらはれにあらじとねんず
 るいとくるしけなり。わりなく物うたがひする男にいみ
 しう思はれたる女。一の所に時めく人もえやすくはあら

いなりに 延喜式神名云。福禰神社三座
 下社大山祇。中社倉稻魂。上社土龍神。こ
 の神は百穀を播し給ふ故稻魂と申す由下座
 の記にあり
 中の御社 倉稻魂と申す云
 二月うまの日 口傳。實之集第一云。延喜六
 年月次の那風の哥の中に。二月初午いなり
 まうでしたる所「猫のみ我えなくいな
 り山春の霞みかたちかくすらん」
 坂のなからばかり いなりの上の社は今の
 社の奥十八町ばかり山中云。今も氏人は正
 月五日に参事あり。瀧などの跡も有其道の
 ほごのさま云
 引はこえたる
 「増」此の詞。上の七卷。なほ世にめでたきも
 の、一段の末にも見えたり。そこに委しくい
 へり。見合すべし

ぬぞそれはよかめり。こころいられたる人
 うらやましきもの
 短氣にせはくしき人云
 經などならひていみじくたどくしくて忘れがちにて。
 返くおなじ所をよむに。法師はことわり。男も女もくる
 くとやすらによみたるこそ。あれがやうにいづの折と
 こそふとおほゆれ。心ちなど煩ひてふしたるにうち笑も
 のいひ思ふ事をゆけてあゆみありく人こそいみしくうら
 やましけれ。いなりに思ひおこして参りたるに。中の御社
 のほどわりなく苦きをねんじてのほるほどに。いさゝか
 くるしけもなく。おくれてくど見えたるものども。たよ
 ゆきにさきだちてまうづるいとうらやまし。二月うまの
 日の曉に急しかど。坂のなからばかりあゆみしかほみの
 時はかりになりけり。やうくあつくさへなりて。まこ
 どに倦しうかよらぬ人も世にあらんものを。何しにまうで

七度まで一日に七度まうつる。稻荷へは七度参る事信心にや。拾遺集に「瀧の水がへりてすまはいなり山七日のぼりしまゝるしとまほん」といふり

よき人の御前に
是より彼手よくく入のうらやましき事をいへり

鳥のあそびのやうに
手の一向あしきを云こ江氏柏木巻に。あやしき鳥の跡のやうにてき。河津云。若狭國鳥跡三文字一也

つらんどまて涙おちてやすむに。三十のまりはかりなる女衣をつはなる心之前に註よき人にはあらむまのつはさうぞくなどにはあらで。たゞ引はこえたるが彼女の詞よきままろは七度まうでま侍るぞ。三度はまうでぬ。四度はことにもあらず。ひつじには下向しぬべしと。道にあひたる人八時の事にうちひてくだりゆきしこそ。只なる所にてはめもとまるまじき事の。かれが身にたゞ今ならはやとおほえしか。男も女も法師もよき子もちたる人いみしう浦山し。か下たる衆のさまこながくうるはしう。さがりはなごめでたき人。やんごとなき人の人にかしづかれ給ふもいどうちやまし。手よくなき哥よくよみて。物の折にもまづとり出らるゝ人。よき人の御前に女房いとあまたさふらふに。心にくき所へつかはすべきおほせがきなどぞ。誰も鳥の跡などのやうにはなどかはあらん。されど下など手よき人にあるをわざとめし。御硯おろしてかゝせさせ給うちやまし。さやうの事は所

なにはわたりの遺つらぬ
手跡の未熟なるを云也。世俗に机はなれせぬさいふたぐひ。古今奥序になにはつこのはを手習ふ人のほつめにもしけるもあるに付て。若狭巻に。また難波津をだにはかんしうつげ侍らざればさいへるたぐひなるべし

あつまりてれたがり
彼手跡よき人にれたみうらやまま。人々あつまりてれたき事など戯てうらやめること

三まいたう
河津云。三昧は梵語也。三昧云。正受又名三昧云々。法華三昧。念仍三昧などして他事なく其事のみうけおこなふないふ。其堂を三昧堂といふ

早く見まほしくかまほしき心
まきぞめむらぐくりもの。巻染村瀧掃物。くり物は源氏關屋巻に。くりぞめさいへる物なるべし。今くしさいふ物のたぐひ
ちもくのまだつとめて。難除目の翌日早天ないふ
必しる人のなるべき。知人の感受領すべき年は何の國守とぞく聞たきと

のおとななどに成ぬれば。まことになにはわたりのとはからぬも事にしたがひてかくを。これはさばあらで。上達手跡未熟なるに部のもど。又はじめてまあらんなど申さする人のむすめかすへき御文にはなどは。心ことに上よりはじめてつゝろはせ給へるを。あつまりてたはふれにねたがりいふめり。琴ふえ習ふに。さこそはまだしきほどはかれがやうにいっしかとおほゆめれ。うち東宮の御めのと。うへの女房の御かたゝゆるされたる。三まいたうたてよひあかひきにいのられたる人。すろくうつにかたき相手のさいのよく出るのさいきしたる。まことに世を思ひ捨たるひしり面白し人の。とくゆかしきもの。まきぞめ。むらで。くりり物など染たる。人の子うみたる。男をんなとくきかまほし。よき人はさらなり。えせ物けす分際的心のきはだにきかまほし。ちもくのまだつとめて。必しる人

こゝろもなき
[増]弘云。心にもだしなき義にて俗にマナド
ホなどいふ意
さみの物めひに
頼の字。近き晴わざにきるべき物種はせ
し
居りつ
物見の所に入居る

事なりけり イさて入
祭などのわたる時節に成たる。源氏發卷
に物も見て歸らんさし給へど。事なりぬ
いへば云々おなト心
白きしも 警固の白杖を持て来る。答
は犯人をうつ杖なり
[増]源氏。たゞけいこのしもさにはあらで祭
はてたるあさより使の廳などへ引ゆく即人
をひき來れるけいこのしもさ。祭のけい
ごにはあらす。さればやりよするといひた
るも即人をいふなるべし
しられトおもふ人あるに
我ある事なかくさんとおもふ人の來たる
時。我は隠れ居て前なる人に我こゝにあら
ぬ由を教へてはせたる。イニ我はかく
れぬてしられト思ふ人のきたるに。前な
る人に。物いはせてきゝわたるこゝろも
あり

のなるべき折もきかまはし。おもふ人のおこせたる文

こゝろもなき物

人のもどねとみのもぬひにやりて待ほど。物見に急ぎ
出て。今や〜とくるしう居りつ。あなれをまもらへ
たる心ち。子うむべき人の。ほど過るまでさるけしきのな
き。遠き所より思ふ人の文をえて。かたふんじたるそく
ひなどはなちあくる心もとなし。もの見に急ぎ出て。事な
りにけり。白きしもとなど見付たるに。ちかくやりよする
ほど。わびしうかりてもいぬべき心ちこそすれ。しられじ
と思ふ人のあるに。まへなる人に教て物いはせたる。いつ
しかとまぢ出たるちこの。いかも〜かなどのほどになり
たる。行末いと心もとなし。とみの物ぬふに。くらき折。は
りに糸つくる。されどわれはさる物にて。ありぬべき所を
とらへて。人につけさするに。それもいそげはにやあらん

ありぬべき所をとらへて
我は糸付べき針をさらへて人にやきひて
つけさす
それもいそげにや
やさはれし人も氣をせくゆゑにやあらん頼
てにもえつけぬ
只今おこせんとて
其かりし車を追付返さんさてのりて出しこ
おほいきけるを
彼車の歸るを待程に他の車の大路をゆく

車さしよせてさじ
[訂]原本たてがとあり。今イ本によりて改
めつ
とみにいりすみおこす
煎炭也。急に炭をおこすに。おこりかぬる
程の久しく心もとなき
[訂]此所の心もとなし。原本にはひさし
せり。さてはいさ。間足はわやうなれば。
今イ本の文に従ひて改めつ
けさう人などはさし
思入人への返すは。應と物おもはせて週く
すべければ。さしそくまどつけれど。又自然
急くべき折もあり

とみにもえさしいれぬを。いで只なすげそといへど。とす
おになどてかばと思ひがはにえさらぬは。にくさ〜へそ
ひぬ。何事にもあれ。いそぎて物へゆくをり。まづわがさ
るべき所へゆくとして。只今おこせんとて出ぬる車まつほ
どこそ心もとなけれ。おほいきけるを。さなりけるとよ
ろこびたれば。外さまにいぬるいと口をしよして物見に
いでんとてあるに。事はなりぬらんなどいふをきくこそ侘
しけれ。子うみける人の〜ちのこと久しき。物見にや又御
寺まうでなどにもろとぬあるべき人をのせにいきたる
を。車さしよせてさるに。とみにものらでまたするもいと
心もとなくうちすて〜もいぬべき心ちする。とみにいり
ずみおこすいと心もとなし。人の哥の返しとくすべきを。
えよみえぬほどいと心もとなし。けさう人などはさし
いそくまじけれど。おのづから又さるべき折もあり。又ま

ときのみこそは

口さきのみこそ規模ならめ思ひて急ぎよ

み出ればひき事も出来ると

まつはぐらめ 松葉黒。待鶴黒。兩説之

「訂」此の兩説之の註釋當ならず。季鷹云。

まつの二字行か。上の行の明るまつのまつ

誤てこいには入れるなるべし。さて鶴黒の

ひるなまつほごないへる

濱接。是亦よくもあたらす。今思ふに上文

の云つてけたる例を考れば。まつはまたな

寄ひがめたる。又の意にてよくきこゆ

故殿の御ふくの比

中關白殿長徳元年四月十日。願忌令云。

父母殿一年。暇五十五日云々。

六月卅日の御はらへ

して女も男もたゞにいひかはすほどは。ときのみこそは
と思ふほどに。あいなくひが事も出くるぞかし。又こゝち
あしく物おそろしきほど。夜の明るまつこそいみしう心
もとなけれ。まつはぐらめのひるほごも心もとなし」
故殿の御ふくのころ。六月卅日の御はらへといふ事に出
させ給ふべきを。しきの御さうしは方あしとて。官のつか
さのあいたる所にわたらせ給へり。其夜はさはかりあつ
くわりなきやみにて。何事もせはうかはらぶきにてさま
こと也。れいのやうにかうしなごもなく只めらりてみす
はかりをぞかけたる。中くめづらしうをかし。女房庭に
ありなどしてあそぶせんさいにはくわんさうといふ草を。
ませゆひていとおほくうるたりける。花きはやかにかさ
なりて咲たる。うへくしき所のせんさいにはよし。時づ
かさなどはたゝかたはらにて。かねの音もれいには似ず

時つよきな。鳥の羽の羽士の事。百
寮則要云。漏刻博士は漏をつよきとる。晝夜
の時を何ふ。漏水のうつるを守りて。時
を正しくする儀也。職員令云。漏刻博士二
人。掌守辰丁何漏刻之節も守辰丁廿
八。掌守何漏刻之節一以時鐘鐘也。

きこゆるをゆかしかりて。わかき人々二十餘人はかり。そ
なたに。ゆきてはしりより。たかさやにのほりたるを。こ
れより見あられは。うすにびのもからきぬ。おなじ色のひ
とへがさね。紅の袴どもをきてのほり立たるは。いと天人
などこそえいふまじけれど。そらよりありたるにやとぞ
兄ゆる。おなじわかきなれど。おしあけられたる人はえま
じらで。うらやましげに見あけたるををかし。日暮てくら
まぎれにぞ。通したる人々みなたちまじりて。右近のちん
へ物見に出きてたはふれさわざわらふもあがりしを。か
うばせぬ事也。上達部のつき給ひしなごに。女房どもの
ほり上官などのある障子を皆うちどをしそこなひたりな
どくるしがるものもあれど。きゝもいれず。屋のいとふる
くてかはらぶきなればにやあらん。あつさの世にしらね
は。みすのどによるもふしたるに。ふるき所なれば。むか

たつきやにのほり
新古今「高き屋にのほりて見れば燈立民の
かまはにぎはひにけり」仁徳天皇御哥之
東野州注云たつき屋は樓閣などの事

くらまぎれにぞ
あ。きほどは樓閣へ上らざりし人々。くら
まぎれに若き女房にまはりてあそびあり
と

右近陣 月華門をいへり。拾芥に委
上達部のつき給ひし
公卿の着座し給ふ所にも女房のはからす
のほるなるべし
上官 政官也。太政官の官人少納言外記
などをいふ也
うちさかし

「訂」原云。さなはたふしなるべし。後人の
轉訛してかくはかけるならん
ふしたるに
「訂」原本ふしたるもさあり。今イ本によりて
改めつ
ふるき所なればむかひてさいふ物
こゝもと法華經譬喩品の長者の大宅久しく
ふりて。鐵輪鐵守宮百足などの諸惡虫交
雜踏走せしさまをおもひてかけるにや

大政官の地のいまやかうの
やかうは八調にや。これ古き序文などの句
なるべし。訓可考

(改訂)やかうのには 野十の庭なるべし。
野十は狐の異名(やかうといふは字音の
音便)即ち荒れはてて狐などの跋扈する
庭さならいふ意ならむ。

かたへすいしからぬ風の

六月より初秋まで、いに宿宮のおほせしに
や。古今二夏と秋と行かふ空の通路はかた
へ涼しきかせやふくもん。此うたをうけて
殘暑を云ふ

七夕まつりなど
八日に源御の前の夜七夕。乞巧奠の事江
次第にあり

宰相中将寄信
長徳二年四月廿四日參議桓公の三男
のふつたの中將 宣方六條左大臣重信公息
人間の四月をこそ

白氏文集十六云。大林寺桃花
人間四月芳菲盡山寺桃花始盛開長恨春歸
無二覺處不知歸入此中一來云々。此詩こそ
はが、めま。三月廿日にあすはいかなる
詩をいさへばなるべし

詠にをかし
する詞云

ぼそどの一の口
弘徽殿の廊の第一にあたりたる戸口なるべ
し。源氏花宴に。三の口あきたりさあるた
ぐひ歎。弄花抄云。弘徽殿の東にわたり廊
あり。それを細殿といふ。ぼそどのへ出る所
に戸三有。雨の第三にあたるくるるまきた
る戸也云々

頭中將源中將 前にいへる寄信と宣方と
るべし
露は別のなみだ
菅家文章五云。七月七日代平女借物
露照別淚一珠空露露是殘粧髮未成此句
詠にもあり

つづらきの跡今ぞ
拾遺「岩橋のよるの契も結わべしあくる節
しき葛城の神」役行者。金峯山とつづらき山
の間に岩橋をかけたに。つづらきの神
かたち見にくき故登徒を詠たる事あるをよ
める所之。此双紙の心も明はなれてかたち
のはしたなくあらはなる事を信じていへるな
るべし
わけておほしにし 前に露は別のと時下給
ひし其露を分て寄信のかへり給ふ

○増訂枕草紙春曙抄卷之八

二百六十七

でといふ物日ひと日おちかより。はちのすのおほきにて
つぎあつまりたるなど。いとおそろしき。殿上人日ごと
まあり。夜もあかし。物いふをききて。秋はかりにや。太
政官の地のいまやかうのにはとならん事をとすじ出たり
し人こそをかしかりしか。秋になりたれど。かたへすし
からぬかぜの。所からなめり。さすがに虫の聲などはきこ
えたり。八日ぞかへらせ給へば。七夕まつりなどにて。れ
いよりちかう見ゆるは。ほどのせはければなめり

宰相中将たのぶ。のふかたの中將とまあり給へるに。人
々出て物などいふに。ついてもなくあすはいかなる詩を
かといふに。いさかあもひめふらしとこほりもなく。
人間の四月をこそはといらへ給へる。いみしうをかしく
こそ。過去の古き事
うなどこそさやうの物わすればせぬ。男はさもあらず。よ

みたるうたをだになまおほえなるを。誠にをかし。内なる
人も外なる人も。心えずとおもひたるぞことわりなるや
此三月三十日はそどの一の口に。殿上人あまたたり
しを。やうくすべりうせなどしてたゞ頭中將源中將六
位ひとりこのりて。よろづの事いひ。經よみ哥うたひなど
するに。明はてぬ也。歸りなるとて。露は別のなみだなるべ
しといふ事を。頭中將うち出し給へれば。源中將もろとも
にいとをかしようずんじたるに。いそぎたる七夕かなとい
ふを。いみしうねたがりて。暁のわかれのすぢのふとあは
えつるまゝにいひて。わびしうもあるわざかななど。すべて
此わたりにては。かゝる事思まはさずいふは口をしきぞ
かしなどいひて。あまりあかくなりしかば。かづらきの
神今ぞすぢなきとて。わけておほしにし。七夕のをり。
此事をいひてはやと思ひしかど。宰相になり給ひにし

みたるうたをだになまおほえなるを。誠にをかし。内なる
人も外なる人も。心えずとおもひたるぞことわりなるや
此三月三十日はそどの一の口に。殿上人あまたたり
しを。やうくすべりうせなどしてたゞ頭中將源中將六
位ひとりこのりて。よろづの事いひ。經よみ哥うたひなど
するに。明はてぬ也。歸りなるとて。露は別のなみだなるべ
しといふ事を。頭中將うち出し給へれば。源中將もろとも
にいとをかしようずんじたるに。いそぎたる七夕かなとい
ふを。いみしうねたがりて。暁のわかれのすぢのふとあは
えつるまゝにいひて。わびしうもあるわざかななど。すべて
此わたりにては。かゝる事思まはさずいふは口をしきぞ
かしなどいひて。あまりあかくなりしかば。かづらきの
神今ぞすぢなきとて。わけておほしにし。七夕のをり。
此事をいひてはやと思ひしかど。宰相になり給ひにし

いづかかは其ほどに見付
上達部に齋信の成給へば、殿上人のやうに
中宮の御かたへもおはさぬないで、其七少
の比にも見付て此事をいはんぞ

月ころいつしと思ひ侍したに
月ころ此事をいへる齋信願に申出んと思ひ
かまへしだにぞ
我心ながらすきんし
齋信の覺給はぬ事などいひ出んも、我心な
がら物すきなるわざと思案せしにぞ
もろともにれたがり
宣方の事。齋信願と共に清少にさめら
れたがりし事
げにさしつなご
げにさしつなご
なごはてうけん。是は清少と齋信願のあ
ひ調なれば知がたし。但漢の張翥が河原を
尋て婦女を見し事あり。けふ七日なれば其
よせある事によ
よき中なればきかせてけり
齋信宣方申ければ其子細を齋信のきかせ
給ひしぞ

かは。必しもいかでかは其ほどに見付なごもせん。文かき
てこのもづかざしてやらむなご思ひしほどに。七日にまの
の御方へ
り給へりしかは。うれしくて。其夜の事など云出は心もぞ
せんぞ
え給ふ。すゞろにふといひたらはあやしなごやうちかた
んぞ
よき給はん。さらはそれには有し事いばんとてあるに。露
のよく覺え給ひし
おほめかでいらへ給へりしかは。まこといみしうをか
しかりき。月ころいつしかとおもひ侍しだに。わが心なが
らすきんしとおほえしに。いかでさはた思ひまうけた
えてこたへ給ひけんぞ
るやうにの給ひけん。もろともにねたがりいひし中將は。
思ひもよらでるたるに。有し曉の詞いましめらるは。し
らぬかとの給ふにぞ。げにさしつなごいひ。まごこはてうけ
んなどいふ事を。人にはしらせず。此君と心えていふを。何
事ぞくと源中將はそひつきてとへといはねは。かの君
になほ是の給へとすらみられて。よき中なればきかせて

〔改定〕おし小路 拾芥抄に二條押小路と見
えたり。内裏に近ければ、俗に「近い」と
いふ隠語なり。江戸時代に、遠きを本所と
いひし類なり。
こはん侍や。齋信。清少にいひやらんた
めにいへるよせ願
手はゆるし給はんや
清少。宣方に心さけ給はんやぞ。源氏竹
川巻に「哀さて手をゆるせしきしにを
君に任る我身ならは」是も基に寄し
さのみあらば。女のさやうに人になびやは
不定の物にならんぞ
悦び給ひし
「こはん侍は給ひきさあるべき時給んしは」の語
にや
猶過たる事忘れぬは
「こはん侍は別の涙といひし事を覺給ひしを
感ずるぞ」
「いさなかしう
齋信の願よくし給ひしに。上達部に成て
昔のやうにもまかり給はでせよ」といふは
くらをいひらんぞ
せうくわいけいのかびやう
期詠云。齋信之過言。詠三萬代之交。
是則綱綱の交友の序の文也。會稽の太守。唐
兵吳の季禮が賢をたひて其期に行あそび
し事

けり。いとあへなくいふほどもなく。ちかうなりぬるをば。
けり。いとあへなくいふほどもなく。ちかうなりぬるをば。
かし小路のほどぞなどいふに。我もしりにけるといつし
んぞ
かしられんとて。わざとよび出て。こはん侍やまろもうた
んと思ふはいかゞ。手はゆるし給はんや。頭中將とひとし
ご也。なほしわきそといふに。さのみあらは。さだめなく
やといらへしを。かの君にかたり聞えければ。うれしくい
ひたると悦び給ひし。猶過たる事忘れぬ人はいとをかし。
宰相になり給ひしを。うへのおまへにて。詩をいとをかし
うずんじ侍しものを。せうくわいけいのかびやうをも過に
しなごも誰かいひ侍らんとする。しほしならでもさふら
へかし。口さしきになご申しかは。いみしうわらはせ給ひ
て。さなんいふとてなごさし。かかしなごおほせられしをか
し。されどなり給ひしかは。誠にさうとしかりしに。源
中將おとらずと思ひて。ゆるだちありくに。宰相中將の御

いまだ三十のこに

宗三十三期古詩の詞なるべし。未種云

文一

「清」本朝文粹の一に。源英明が。白河朝野群

三十三期云々といへるなりや

さらにもわらうもあらう

わらうもあらう。よくもあらうとよくもた

る詞也。其故に信し的事やそのよかたのい

へる云

ちんにつき 豊信卿の眷厚し給ふ

かうなんいふ 清少かくのごまくいへば其

詞詠を我になしへ給へま也

いみしくよくにせて

宜方の豊信のちうえいに似せて也

たにたるなり

局にたいすみうたひしきの心也

たれぞとくからぬけしきにてさひ給へれば

彼たそとへる清少のけしきのいとほしく

て。此習ひて録する事をあざれてつたる

べし云

うへをいひ出て。いまだ三十のこにおよはずといふ詩を。

豊信のよき録し給ひし云

こと人にはにらずをかしようずし給ふなどいへば。なごかそ

れにおとらん。さうりてこそせめてよむに。さらにもわら

くもあらずといへば。わびしの事や。いかであれがやう

にすんせやなどの給ふ。三十のこといふ所なん。すべてい

みしうあいきやうづきたりしなどいへば。ねたがりて。わ

らひありくに。ちんにつき給へりける折に。わきまてよび出

て。かうなんいふ。猶そこをしへ給へといひければ。わら

ひてをしへけるもしらぬに。つはねのものとて。いみしく

よくにせてよむに。あやしくてこはたそとへば。あみこ

ぬになりて。いみしき事きこえん。かうくきのふちんに

つきたりしに。とひきてたちれたるをめり。誰ぞとにくか

らぬけしきにて思ひ給へればといふも。わざとさならひ

給けんまかしければ。これだにきけは出て物などいふを。

宰相の中將の徳見る事。そなたにむかひてをかむべしな

ごいふ。まもにありながら。上になどいはするに。これを

うちいづれば。誠はありなどいふ。あまへにかくなど申せ

ば。わらはせ給ふ。内の御物いみなる日。右近のさうくわ

んみつなにとかやいふものして。たうがみにかきてお

こせたるを見れば。さんせんとするを。けふは御物いみに

てなん三十のこにおよはずはいかゞといひたれば。かへ

りごころ。其は過ぬらんしゆはい臣がめををしへけん

年にはしもと書てやりたりしを。又ねたがりて。うへの御

前にもそうしければ。宮の御かたにわたらせたまひて。い

かでかゝる事はまりしぞ。四十九に成ける年こそさはい

ましめければ。のよかたはわびしういはれたりとい

ふめるはとわらはせ給ひしころ。ものゝるほしかりける

君かなと覺しか

宰相のよく見る

清少の出て物いふも。豊信のちうえいな

しへし功徳を見る云

まもにありながらうへになご

常に清少の局に右ても后宮の御前になど

守つかひて宜方にあはぬ云

右近のさうくわんみつ何

右近衛將曹光さまでは覺て其名を忘れし

ま云。諸官ニのみすけせうさくわんま

り。近衛つがさは大將をのみして。中少

將をすけし。將監をせう。將曹をさくわん

さす。さうくわんはさくわんさおな

其は過ぬらん為買臣がめを 后宜方の年
節をたはふれていふ詞云。三十歳に過て四
十餘五十歳にもあらん心の心云。前漢に
買臣が妻。買臣が貧きを諷めて去ん事を求
しに。買臣笑曰。我年五十。買臣今四
十餘矣。女昔日久。作三。買臣女功一
致へいさめし事云。前漢書六十四に。蔡買
臣が傳あり。買臣を云云

こきでんには
 武藏殿女御儀子の事。閑院太政大臣公卿
 公の御むすめ。一位院の女御。
 (改増)うちふし。大鏡に藤原兼家が寵した
 るうちふしのみこといふ人あり。これな
 るべし。
 おはしさいし
 「増」源按。おはしさいしは。おはしさいしに
 之。こは音便之。ましてなまいてさいふに
 かなす。初巻藤原などまいてさあるなご思ふ
 べし。
 御さのむなご。宿直之。御番仕る事之。中
 宮へ御見まひの事をうくいへる。
 さるべきさまに女房など。清少などあへ
 しりひ給はれば。物うくて殿違になりたる
 べし。

うちふしやすむ所の
 彼うちふしがむすめ左京の事を勢匂にいへ
 る。
 すべて物きこえずかた人さたのみ
 清少は口さながらす我方人さたのみしに
 人のいひふるしたるさまにさりなし給ふ
 世の人も此事いひふるすに。それとおな
 さまに清少の取なしいひなるべしとこ

是より別段之
 こきでんとは閑院の太政大臣の女御とぞきこゆる。其御
 かねに。うちふしといふものよむすめ。左京といひてさふ
 らひけるを。源中將かたらひて。おもふなど人々わらふこ
 ろ。宮のまきにおはしさいしにまゐりて。時々御どのの
 なごつかふまつるべけれど。さるべきさまに女房なども
 てなし給はねは。いと宮づかへおろかにさぶらふ。どのの
 所をだに給はりたらんは。いみしうまめにさぶらひなん
 まごいひる給ひつれば。人々けにまごいふほどに。まごこ
 人にばうちふしやすむ所のあるこそよけれ。さるあたり
 にはしげくまゐりたまふなる物をとさしいらへたりとて。
 すべて物きこえず。かた人とたのみきこゆれば。人のいひ
 ふるしたるさまに取なし給ふなど。いみしうまめだちて
 うらみ給ふ。あなあやし。いかなる事をかきこえつる。更
 に聞とゞめ給ふ事なしなどいふ。かたばらなる人をひき

さるべき事もなきを
 清少の聞には更に聞かむる事もなきにうち
 み給ふは。機子こそあるらめと云。恨み腹
 立をばとほり云云。
 「増」源按。ほとほりは。今俗にアツクナルと
 いふに同く。腹たぢいなるをいふならん
 是もかのいせ給ふ
 清少のをしへていはするさ。のおかたの
 らみ給ふ也
 殿上人のわらふさて
 殿上人も此事によりて笑ふ故又清少に此う
 らみをいひ出し也
 さてはひざりを恨み
 殿上人も笑ふさならば清少一人此うらみ
 ふべきにもあらぬを。あやしうかこち給ふ
 也
 むかしおぼはてふよう成
 昔の佛は有ながら不用に成くだりし心也
 うげんべりのなみ
 細網繰巻也
 ぢすりの物。白き絹に花田色のこもんなど
 すりたる也
 むすの目くらき
 所士繪師清濁二流なるべし
 「改訂」は衛士にて禁衛の官なれば盲目
 にては用なしといふなるべし。
 るひぢめのはひかへり
 蒲団繰巻也。葉は柱の灰をさす物なれば
 其色のさめたるを灰かへるといふ也

○増訂枕草紙春曙抄卷之八

ゆるがせは。さるべきこともなきをほどほり出給。ささこ
 そあらめとて花やかにかねあらふに。是もかのいせ給ふな
 らんとていと物しとおもへり。更にさやうの事をなんい
 ひ侍らぬ。人のいふだににくき物をといひて。ひきいりに
 しかは。後にも猶人にはちがましき事云つけたるとうら
 みて。殿上人のわらふとていひ出たるなりとの給へは。さ
 てはひとりをうらみ給ふべくもあらざる。あやしなど
 いへば。そのうちばたえてやみ給ひにけり。
 むかしおぼはてふようなる物
 うげんべりのなみのふりてふし出きたる。からるの屏
 風のおもてそこなばれたる。藤のかよりたる松の木かれ
 たる。ぢすりの物花かへりたる。あしのめくらき。きちや
 うのかたびらのふりぬる。もかうのなくなりぬる。七尺の
 かづらのあかくなりたる。あびぞめのたり物のはひかへ

八十五段
浮草水草茂りて
誰取つくるふ物もなき心をふくめたり

夜かれがち 夜離也
六位のかしらろき
若きは末の昇進の類もあれど。老たるはた
のもしげなき也

人の事をしほに
人の事を請取て。其事を成就せんとするま
ま也
經は不斷經
たゆむたぬむまじきのたのみかたき心なる
べし

八十六段

宮のほごりのまつり
たさへば春日八幡など遠き所も。其儀式は
宮中にてあれば。近くて遠きなるべし
くらまのつらなり
九折ツラナリ。今鞍馬に七曲といふ道也。
近き道をまかりのばれば遠き也

りたる。色このみの老くづれたる。面白き家の木たち
やけたる池なごはさながらあれど。うき草みくさしげり
て」
たのもしげなきもの

心みじかくて人忘れがちなるむこのよかれがちなる。六
位のかしらろき。空ことする人のさすがに人の事をし
がほに大事うけたる一番末のまけるもあるよき心也にかつすぐ六。六七八十なる人
のこちあしうして日ごろになりぬる。風吹いはやきににはあげた
るふね。經はふだんきやう」

ちかくてごほき物

宮のほごりのまつり。おもはぬはらから兄弟あんどくの中く
らまのつらなりをりごいふみち。えはすの晦日む月一日の
ほご」
ごほくてちかき物

八十七段

ごくらく 同類語に「方酒二十万位
土有世界名曰「輪廻」云々。又同類語
去レ此不遠ともさける心なるべし
舟のみち 三四十里の道も風よき時は一日一夜にもゆく心にか
男女のゆ 男は陽。女は陰。たぐひこなる物ながら。夫婦合杯の理遠くて近し

ごくらく。舟の路。男女の中」

八十八段

ほりかねの井 武藏
山の井さしと淺き
万葉「淺香山影さへ見ゆる山のぬの淺き心
は我もほなくに」大和物語には淺くは人
をおもふ物かはさ右。隱奥之。猶もまたあ
り

ほりかねのる。はしりるは。相坂なるがをかしき。山のる。
さしも淺きためしになりはじめけん。あすの井。みもひも
さむしとほめたるこそをかしけれ。玉の井。せうしやうの
井。櫻井。きささまの井。千貫のる」

あすかみもひも恋し
信馬樂「飛鳥井に宿りはすべし陰もよしみ
もひも恋しみ草もよし」花鳥餘情云。あ
すかみのうたの陰もよしは木陰也。みもひもは經水也。みまきさは馬草也。一説「飛鳥井は京にある清水也。二位万里小路に付きこ
玉の井
「増」山城の國相樂郡にあり
せうしやうのぬ 少將井と書。鳥丸の東。大炊御門の南と拾芥にあり
「訂」原本せうしやうぬとあり。今イ本によりてのらとを補ひつ
櫻井 山城水無瀬の近邊也。待宵の小侍従の舊跡ある所也
きささまのぬ 后町は。常樂殿にありと拾芥に見ゆ。井も有しにや
千貫の井 八雲に。ちねきのぬとあり

八十九段

受領は 國司の事
紀伊守 上國なれば。從五位下也。和泉
國にて從六位下也。官位命二有
やどりのつかさの權守
濃原所。舟橋從三位の。藤原抄の私抄云。宿

受領は
紀伊守。和泉」

やどりのつかさのごんのかるは

下野。甲斐。越後。筑後。阿波。

官とは。官外記などの五位したるが。頼て職に任下りたき。外國等にしばし任す。これは官を宿す義也。職原抄云。權守者近代多是通授也。環翠軒云。通授は。あるかにさつかる也。國の守は四位五位の者先任して即任におもむくを。權守は。其國へはおもむす。これ通授の儀也。又曰權守は地下の五位六位これに任す。又春の除目の時。參議雲客などの兼官になる事も有。それは別事。下野。甲斐。越後。およそ諸國に大國上國中國下國さてあり。大國上國には權守あり。中下國には權守なし。此草紙の五ヶ國は皆上國也。權守勿論有。

大夫は

大夫。侍の叙爵せしを大夫といふ也。假舉云。八省の不左右衛門尉など五位に成たる時。中務大夫。式部大夫など云也。侍の面目也云々。式部丞は。相當六位あるを。五位に叙して叙爵したるを。式部大夫といふなり。左衛門大夫。左衛門大尉は六位也。叙爵して左衛門大夫といふ也。史大夫。左右大史は正六位上也。五位にありて史大夫といふ也。かうふりて云々。叙爵する事也。一訂。是よりは何の筆すまび也。原本には。上につけてあれど。今前後の詞にならひて別行せり。

式部大夫。左衛門大夫。史大夫。六位藏人おひかくべき事にもあらず。

紫がはしてい。伊豫殿をむらさきの草にてかけたる。おやの家しうまは更。是より彼門つよくさせなごいひし事の心づきなきに付て。住べき家は假初に少死たるやうなるがよき事なふさて。其のしななく心づきなし。おやの家。しうまは更。紫がはしてい。伊豫殿をむらさきの草にてかけたる。おやの家しうまは更。是より彼門つよくさせなごいひし事の心づきなきに付て。住べき家は假初に少死たるやうなるがよき事なふさて。其のしななく心づきなし。おやの家。しうまは更。紫がはしてい。伊豫殿をむらさきの草にてかけたる。

おのづからむつましうち知たる受領自然したしく知たる國守の家。又は其國守の住國へ行て留守に住人もなくいたづらにあるなど借て住もからん心の心。宮ばらなごの屋あまた。宮邊ある所を宮ばらさいふ也。伊勢物語にそ成ける宮原にさあるにさなし。源氏に宮腹の中將さあるは別の事。増。こは殿原原なごいふさきのほらと同意にてだちなごいふにおなつ。つかさ待出で。其家に住べき程の官に至り。身の威勢付て後につまよけれ。いさよきしけり。訂。原本に系よきかけけるは。系を假字に用ゐたるなれど。類はしきやうなれば今改めつ。所々すなごの中より書き。則詠ニ庭増ニ氣色。晴砂縁。又晴砂草具三分許なごいへるさま。きはくしき。急度する心。

になどのすまぬいへ。其さるべき人のなからんは。おのづからむつましうちしりたる受領。又國へ行ていたづらなる。さらすは女院宮はらなごの屋あまたあるに。つかさまち出で後。いつしかとよき所尋出て住たるこそよけれ。女のひとりすむ家などはたゞいたうあれ。ついちなごもまたからず。池などのある所は。みくさる。庭などいよいよまぎしけりなごこそせねごも。所々すなごの中よりあをき草見えさびしけなるこそ哀なれ。物かしてけにだらかにすりして。門いたうか。め。きはくしきはいどうたてこそおほゆれ。

宮づかへ人の里なごも。親ごもふたりあるはよし。人ししく出いり。おくのかたにあまたさま。このころおほくきこえ。馬のおとししてさわがしきまであれどかなし。されど忍びてもあらはれても。おのづから。出給ひけるを。こらで

そへたり
へるなりけり」

とそうしけるこそをかしけれ。かへるのとび入てこがる
となりけり」

みあれのせんじ五寸ばかりなる殿上わらはのいとをかし
けなるをつくりて。みづらゆひ。さうぞくなどうるはしく
して。名かきてたてまつらせたりけるに。ともあきらのお
ほきみとかきたりけるをこそいみしうせさせ給ひけれ」

みあれのせんじ
今昔物語云。御形の宣旨といふ人は。優に
やさしくかたちもめでたかりけり。皇太后
宮の女房也。註御堂の中。三條院の御時
皇后宮に申たるが女房云々。愚案。後拾遺
集の作者大和宣旨と同人なるべし。作者部
頭云。申納首惟仲女。三條院皇后宮女房。
大和守兼忠の妻之故。大和一とあり
「増」万葉抄云。みあれのせんじは。源氏権登
なる齋院宣旨の類なるべし。みあれは齋院
のしるしめす事なれば。齋院の女官なかく
いふならん

中巻終

訂正 枕草子春曙抄下巻

宮にはじめてまゐりたる比。物のはづかしき事かずし
ず。なみだもおちぬべければ。よるくまゐりて三尺の御
几帳のうしろにさふらふに。ゑなどとり出て見せさせ給
ふだに手もえさし出まじうわりなし。これはとありかれ
はかよりなどの給はするに。たかつきにまゐりたるおほ
このあふらなれば。かみのすぢなども。中くひるよりは
けさうに見えてまはゆければねんとて見なごす。いとつめ
たきころなれば。さし出させ給へる御手のわづかに見ゆ
るが。いみしう匂ひたるうす紅梅なるは。かぎりなくめで
たしど。見しらぬさどび心ちには。いかゞはかゝる人こそ
世におはし申しけれどおごるかるゝまぞまもりま
らする。曉にはとくなどいそがるゝ。かつらぎの神もしは
しなどおはせらるゝ。いかですぢかひても御らんせん

宮にはじめて
これ清少の定子の御方へまゐりし始めの
時
よるくまゐりて
ひるも侍らぬにはあるまじけれど。御前へ
は夜々まゐりしなるべし恥る故
これはさみりければあり
給のいはれを定子の御せきかまらるゝ
たかつきにまゐりたるおほこのあふら
高杯にさままし灯之。よの露の灯籠ならで
ひききゆゑなごもよく見ゆる心
いみしう匂ひたる
寒氣に定子の御手のあひみて色のうつくし
き事をいふ
見しらぬさどび心ち
内わたりを見習はぬ里心にはさこ。清少の
身の手をいふ
からつきの神もしはし
清少をしぼしてさめさせ給ふ詞
城の神は形見ぐるして豊の役をせで。す
るのみ橋をかけられし之前註。清少のよる

上らふ御まかなひし給ひけるまゝにちかく
上臈御かた也。御陪膳をに候し。中宮
の御介錯をさする人なれば御前ちかく侍る
也。

やすらかなるを

清少のうぬしきに。人々の宮づかへ脚
て進退安けなるが浦山しき也

御ふさりつき。イ本御文さりつき此本可然
にや。御文は中宮の御封敷。河津云。三宮
は各千五百戸。弄花云。月は長月也。民戸
をよせらるゝ心也。うれを封月ともいふ也。
愚按今世の知行所の事也

あみわらふ

訂原本にははわらふとあれど。今イ本に四
りて補ひ改めつ

このまゝにせ給ふなりさて

實は伊周公をれどもまづ道隆公のおほせし
さて。おち散たる物をさりおきなごつくら
ふ也

さすがにゆかしきなめり

清少引入ながら又見まわらせまおしきけ。
我心ながらさすがに殿の御ありさまのゆか
しきにやさて。御几帳よりのぞきしと也。
めづらしき交辞也

道もなしとおもひけるに

拾遺「山黒に雪ふりつみて道もなしけふ
ん人を哀まは見ん」

まことにさありしなど

眞實に清少を思ひてありしこの給ひたはむ
れ給ふなるべし。前に女房にそらごまご
の給ひたるさ有し首尾也

行幸など見るに

年來行幸など見し折に。伊周公供奉にて清
少の物見る車を見おこせ給ひしとへ願わく
しなごせしとの心也

おほけなくいで立出に

かくはづかしき所へおほけなくも。宮仕へ
に出にしよと恥しきに思ふ也

増おほけなくは。大膽の意也。また身分不
相應などの義也。かの千載集慈圓の「おほ
けなくうき世の民におほふかな我たつ袖に
すみ染の袖」さあるなも思ふべし

かしこきかけとさいげ

我影かくすたけなき陰を頼たる扇をも
伊周公の取給ふ

ふりかくべきかみの

扇はごらるゝ。せめて面づくしに髪をふり
かけんも見ぐるしからんをおもふと

あふぎを手まさくり

清少の扇を伊周の手まさくり給ふ

しろいものうつりて

清少の汗に白粉ながれてからきぬにうつる
心也

のなしゑしたるにむかひておはします。上らふ御まかな
ひし給ひけるまゝにちかくさふらふ。つぎの間にながす

びつにまなくゑたる人々。からきぬきたれたるほご也。や

すらかなるをみるもうらやましく。御ふとりつきたちる

ふるまふさまなどつゝましかならず。物いひるみわらふ。

いづの世にかさやうにまじらひならんとおもふさへぞ

つゝましき。あうよりて三四人つごひて。繪など見るもあ

り。しばしありてきたかうおふこゑすれば。とのまゐら

せ給ふなりとて。ちりたる物ごも取やりなごするに。おく

に引入てさすがにゆかしきなめりと。御几帳のほころび

より。わづかに見いれたり。大納言殿のまゐらせ給ふ成け

り。御なほししぬきの紫の色。雪にはえてをかし。はし

らのもとに給ひて。きのふけふ物いみにて侍れど。雪の

いたくふりて侍れば。おぼつかなきになごの給ふ。みちも

ひて。物などの給ふ。まだまゐらざりし時間おき給ひける

事などの給ふ。まことにはさ有しなどの給ふに。御几帳へだ

て、よそに見やり奉るだにはづかしかりつるを。いと淺

ましうさしひかひきこえたる心ち。現どもおほえず。行幸

など見るに。車のかたにいさゝかみおこせ給ふは。下すだ

れひきつくるひ。すきかけもやとあふぎをさしかくす。猶

いと我心ながらもおほけなく。いかで立出にしぞとあせ

あへていみじきに。何事をかきこえん。かしこきかけとさ

さけたる扇をさへどり給へるに。ふりかくべきかみのあ

やしさとへ思ふに。すべてまことにはさるけしきやうきて

こそ見ゆらめ。よく立給へなどおもへど。あふぎを手まご

ふりにして。おぼたがかきたるぞなどの給ひて。とみにも

たち給はねは。袖をおしあて。うつふしるたるも。から

きぬにしろいものうつりてまだらにならんかし。久しう

ひて。物などの給ふ。まだまゐらざりし時間おき給ひける

事などの給ふ。まことにはさ有しなどの給ふに。御几帳へだ

て、よそに見やり奉るだにはづかしかりつるを。いと淺

ましうさしひかひきこえたる心ち。現どもおほえず。行幸

など見るに。車のかたにいさゝかみおこせ給ふは。下すだ

れひきつくるひ。すきかけもやとあふぎをさしかくす。猶

いと我心ながらもおほけなく。いかで立出にしぞとあせ

あへていみじきに。何事をかきこえん。かしこきかけとさ

さけたる扇をさへどり給へるに。ふりかくべきかみのあ

やしさとへ思ふに。すべてまことにはさるけしきやうきて

こそ見ゆらめ。よく立給へなどおもへど。あふぎを手まご

ふりにして。おぼたがかきたるぞなどの給ひて。とみにも

たち給はねは。袖をおしあて。うつふしるたるも。から

きぬにしろいものうつりてまだらにならんかし。久しう

これ見給へこれたが書たる 清少のため
に伊周をたいて給はんとて此繪を見給へと
后宮の給ふ人
人をさらへて云々

「増」弘按。伊周公の戯れての給ふ。人は公
か自身をさして云々。意は清少がわれをさ
らへて立たせ侍らぬと。こは公が立ても
し后宮のかたへ行かば。そのひまに清少は
すべり出て逃去りもやすると氣つひて。
わざと坐を立ち給はぬまも
いさいまめかしう

清少いま世にかりにや有けん。やうの
いまめかしきはふれば。年齢にも身のほ
ごにも相應せずと
人のさうかなかきたる
草假名。の后宮の見給へる繪草紙の
事

おなまほしの人
山井大納言。中納言隆家卿なるべし
われも何がしとある事
此同上に連綴せず若孫字などあるにや。但
まひて議をとり侍らば。われも何がしと
ある事は。彼同し直衣の人も人の上のさ
ありかりを申さる。殿上人の上をも
とりまぜ申さる。なまきは。清少のうひ
くしき心には變化の物天人などやうに覺
えしと

ひらひしとす
おなまわさねこそ有けれ。かく見る人々も。家の内出せめ
けんほどは。ごこそは覺えけめ。かくしめてゆくに。お
のづから。おもなれぬべし。物など仰られて。我をばおも
ふやととばせ給ふ。御いらへにいかにかはとけいするに
あはせて。たいはん所のかたにはなを高くひたれば。あな
心うそらごとするなりけり。よしとていらせ給ひぬ。
いかでかそらごにはあらん。よろしうだにおもひきこ
えさすべき事は。はなこそそらごとしけれとおほゆ。
さてもたれかかくにくきわざしつらんと。大かた心づき
なしとおほゆれば。わがさる折も。おしひしきかへし。あ
るを。ましてにくしとおもへど。またうひくしければと
もかく。もけいしなほさで。明ぬればありたるすなはち。
あさみどりなるうすやうに。えんなる文をもてきたり。み
れば

勿論。清少の恥らんと后宮のおしはかり給ふ
る給ひたりつるを。ろんなうくるしとおもふらんと心得
させ給へるにや。これ見給へ。是はたがきたるぞときこ
えさせ給ふを。うれしと思ふに。給ひて見侍らんと申給へ
は。猶こへどのたまはすれば。人をとらへてたて侍らぬ
なりとの給ふ。いといまめかしう身のほど年にはあはず
かたばらいたし。人のさうがなきたる草紙とり出て御
らんず。誰がにかあらん。かれに見せさせ給へ。それぞ世に
ある人の手は見しりて侍らんと。あやしき事どもを。只い
らへさせんと給ふ。二ところだにあるに。又さきうちお
はせておなじなほしの人まらせ給ひて。これはいます
こし花やぎ。さるがふ事などうちし。ほめわらひ興し。わ
れも何がしがとある事かゝる事など。殿上人のうへなど
申すをきけば。猶いとへんけの物天人などのかりきたる
にやと覺えてしを。さふらひなれ。日比すられはいとこし

かく見る人々も
后宮の御たの願盤所女房の侍ひなり
そらごするなりけり
清少思ふさは爲ならん。隣にはなひつれば
この御たはむれ。清輔典義抄云。人の事
。思ひくはたつるに。はなひつればならず
と云々。さやうの心にて后宮もかくの給へ
るにや。毛詩。孤風。願言聞。陸今俗人
云。人道。我。此古之遺語也云々
そらごしけれとおほゆ
「増」語りて思ひたるならんと思はる。いさ
「訂」おほゆは。イ本にはおほえてあり。お
ほえては思はれて

たいはん所のかたに
后宮の御たの願盤所女房の侍ひなり
そらごするなりけり
清少思ふさは爲ならん。隣にはなひつれば
この御たはむれ。清輔典義抄云。人の事
。思ひくはたつるに。はなひつればならず
と云々。さやうの心にて后宮もかくの給へ
るにや。毛詩。孤風。願言聞。陸今俗人
云。人道。我。此古之遺語也云々
そらごしけれとおほゆ
「増」語りて思ひたるならんと思はる。いさ
「訂」おほゆは。イ本にはおほえてあり。お
ほえては思はれて

わがさる折もおしひしきかへしてあるを
尋常にも人の違つれば。其はなひ返してあ
る物をさ。人のなひたる時又はなひ返
されば。わろき事有と世俗にいひならはす
事のゆみなり

ひらひしとす
おなまわさねこそ有けれ。かく見る人々も。家の内出せめ
けんほどは。ごこそは覺えけめ。かくしめてゆくに。お
のづから。おもなれぬべし。物など仰られて。我をばおも
ふやととばせ給ふ。御いらへにいかにかはとけいするに
あはせて。たいはん所のかたにはなを高くひたれば。あな
心うそらごとするなりけり。よしとていらせ給ひぬ。
いかでかそらごにはあらん。よろしうだにおもひきこ
えさすべき事は。はなこそそらごとしけれとおほゆ。
さてもたれかかくにくきわざしつらんと。大かた心づき
なしとおほゆれば。わがさる折も。おしひしきかへし。あ
るを。ましてにくしとおもへど。またうひくしければと
もかく。もけいしなほさで。明ぬればありたるすなはち。
あさみどりなるうすやうに。えんなる文をもてきたり。み
れば

見えざりしでうご
なかりし道長衣裳なども俄に出来ざるをわき
出るといふ。調度はつかふ道具も
もさきだちのなりあがりたるより
元來の公達也。公達とは。攝家大臣の息な
らでも。近衛の少將申將を経て。納言以上
にのぼる人々をいふ也。清華。英雄も申
ふ。さやうの人々より受領の中將になりし
はしたりがはなる也
中納言大納言大臣。公卿也。大臣を公とい
ひ納言は卿也
受領も大上國の守になりしはこまなしとの
心也
あまた國にゆきて
一任四ヶ年の國守を経てあまた他國に行て
合洛の人をいふ也
大貳。太宰府のおほい介也。相當四位也。
太宰のかみは帥也。帥は大かた親王の任官
にて。筑紫に下り給はず府務をおこなはざ
れば。大貳。帥にかりて筑紫に下りて大
宰府の務をおこなふ故に。規模さうる官也
四位。受領は大かた五位なれば也。何がし
供奉也
内侍率にや。定家内侍率。寛算内侍率のた
び也。官階御堂云々三年三月始内侍
率内侍師云々。日本記にあり。又延喜式
に毎年正月に大極殿にて。長勝王親講説の
時内侍率十餘師を講師とする事あり。十師
師は十八の事也

しつるに我にもまさる物どものかしてまじり。只仰せうけ
給はらんとつるせうするさまはありし人とやは見えた
る。女房うちつかひ。見えざりしでうごさうぞくのわき
づる。ずりやうしたる人の中將になりたるこそ。もときん
だちのなりあがりたるよりも。けたかうしたりがほにい
みしう思ひためれ。くらゐこそ猶めでたき物にはあれ。同
し人ながら大夫のきみや侍従のきみなどきこゆる折は
いとあなづりやすき物を。中納言大なごん大臣などにな
りぬるは。むけにせんかたなくやんごどなくおほえ給ふ
事のこよなきよ。ほどくにつけては。ずりやうもさこそ
はあれ。あまた國に行く大貳や四位などになりて上達
部になりぬればおもおもし。されどよりとてほごすき。な
にはかりの事はある。又おほくやはある。ずりやうの北
のかたにてくだることをよろしき人のさいはひには思ひ

僧都僧正に
僧も位高くなればしたりがはなるもの心也
さほしたるわたきぬ
一夏過したる縮絹也
いつのまにかう成ぬらん
八九月の風の冷やかにありしをとおごろく心
也

○増訂枕草紙春曙抄卷之九

てあれ只一人の上達部のむすめにてきさきになり給ふ
こそめでたけれ。されど猶男は我身のなり出ることめで
たくうちあふぎたるけしきよ。法師の何がし供奉などい
ひてありくなどは何とかは見ゆる。経たふごくよみ。見め
きよげなるにつけても。女にあなづられて。なりかよりこ
そすれ。僧都僧正に成ぬれば。佛のあらはれ給へるにこそ
とおほしきとてひてかしてまじり。何にかは似たる

風は

あらし。こがらし。三月ばかりの夕暮にゆるく吹たる花か
ぜいとあはれ。八九月はかりに。雨にまじりてふきたる
風いとあはれ也。雨のあしよこさまにさわがしう吹たる
に。夏とほしたるわたぎぬの。あせの香などかわき。す
しのひとへにひきかかねてきたるもをか。此すすした
にいとあつかはしうすてまほしかりしかは。いつのまに

かほにしみたる 願に寒き心也。文選宋玉
風賦云。其風中 人狀直 悽淋々々

むくの露 鶴一名即標和名也
野分の又の日 八月の比ふく暴風也。其明
る日の景氣を書之。源氏のわきの巻も是を
かけり
たてしどみすいせい
立遣遊垣

ふしなみたるに
野分に吹たふされて伏双びたる云
[訂]万葉抄にもふしなみかたれに作れり。
いづれにても大意はなす
せんさいども心くるしげ也
[訂]万葉抄には。心くるしげなるを。さあり
[増]せんさいは前栽のもとにて庭前の草木の
挿込みかふふ云
挿込みなる木ども
文選風賦云。聖石伐木梢二殺林葉一
けうしのつばなごに
格子のひま同くを穿といふにや。こま
くく吹入と次の詞にあり。此段の風の形
容は莊子が天鏡を論ずたる詞にささくお
さるまどくや
いこきいぬのうはぐもり
こま紅のうへのくろみたる云

かう成ぬらんと思ふをかし。あかつきかうしつま戸な
どおしあけたるに。嵐のさど吹わたりに。かほにしみたる
こそいみしうをかしけれ。九月つごもり。十月一日の程の
空うちくもりたるに。風のいたう吹に黄なる木の葉ども
のほろくくとこほれかつるいとあはれ也。さくらのほむ
くの葉などこそあつれ。十月はかりに木立おほかる所の
庭はいどめでたし

野分の又の日こそいみしう哀におほゆれ。たてしどみす
いがいなごのふしなみたるに。せんさいども心くるしげ
也。おほきなる木どもたふれ。枝など吹さられたるだにさ
しきに。萩女郎花などのうへによろほびはひふせるいと
おもはず也。かうしのつばなごに。そのさききぬのうはぐもりた
しらたんやうにこまくと吹入たること。あらかりつる
風のしわざともおほえぬ。いとこききぬのうはぐもりた

れざめつれば イ本れられざりつれば云々

うちふくだみたる
髪のをけたる云。源氏におほき同云
[増]ふくだみは。埃塵抄に髪髪のもとをかけ
り

物あはれなるけしきみる
其女房の野分の朝の草花のをれふして哀な
るを見ゆるほどに云

花もかへりぬれなごしたる
かの生絹の單の花田いろなるが色さめて。
野分のしなきにぬれたるさまなり

たけばかりはきぬの
髪長くて居長ほどきぬのすそにあまりし云

そばより見ゆる
彼物哀なるけしき見る女房の飾より此十七
八の女房の見ゆる云

うらやましげに
かの童のわかき人と諸共にせまほしげなる

うしろをかし
童のうしろ云。彼わかき女房のうしろもこ
めていへり

うしろをかし
童のうしろ云。彼わかき女房のうしろもこ
めていへり

るに、くちほのかり物。うす物などのこうちきよて、
どしくきよけなる人の。夜るは風のさわぎに寐覺つれば。
久しうねおきたるまゝに。鏡うち見て。もやよりすこしる
さり出たる。髪は風に吹まよはされてすこしうちよくた
みたるが。かたにかよりたるほど。まことにめでたし。物あ
はれなるけしき見るほどに。十七八はかりにやあらんち
ひさくばあらねどわざとかどなごは見えぬが。すし
のひとへのいみしうはころびたる。花もかへりぬれなど
したる。うすいろのどのる物をきてかみはをはなのやう
なるそぎするも。たけばかりはきぬのすそにはづれて。は
かまのみあきやかたて。そばより見ゆる。わらはべのわか
き人のねごりに吹をられたるせんさいなどをとりあつ
めおこしたてなどするを。うらやましげにおしはかりて。
つきをひたるうしろをかし

九十九段

心にくき物
「増」こは心に悪む意にはあらず。心にくきといふ一の詞にて。心ゆかしと思ふ意也。俗に心に愛む意もあり

物まゐる

「訂」活木を物まゐるさあり

はし 飯。等詞。一名、扶徳和名にあり

かひ 飯。或名伊勢物語和名云。飯支云。

ひさげのえ 提綱

心にくき物

物へだてよきくに。女房とはおほえぬ聲の忍びやかにきこえたるに。こたへ若やかにしてうちそよめきてまゐるけはひ。物まゐる程にや。はしかひなどのとりまぜてなり。ひさげのえのたふれふすもみよこそとゞまれ。うちたるきぬのあさやかなるに。さうがしうはあらで髪の上にかみのかりしさま。后宮ほどの御つた。りやられたる。いみしうしまつらひたる所の。おほとなぶらばまゐらで。長すびつにいとおほくおこしたる火のひかりに。御几帳のひものいとつややかに見え。みすのもかうのあけたる。このきはやかなるもけさやかに見ゆ。よくてうじたる火をけのはいきよけにおこしたる火に。よくかきたる繪の見えたるをかし。はしのいときはやかにすちかひたるもをかし。夜いたう更て人のみなねぬるのちに。どのかたにて殿上人など物いふに。かくにこいし。けいに

はしの
「増」活木。はしは火管のこゝにて上支の一のうきし

百段

うきしま 奥州しほかまの邊也。新古今に

「しほかまの前」にうきなるうきしまのうきて

思ひのある世なりけり

やそしま 八雲云。清輔云出羽にあり云々。

普通には只八十島也。愚案。粟平の小町が

圖像を見しは出羽の八十島也。小野篁の八

十島かけてさよみ給へるは只おほくのしま

をいふ義也

たはれしま 八雲云。尾後之。清輔抄ニハ

相撰云々

みつしま 八雲筑前。万葉或三島とも。東北の野坂の浦に舟出して水島にゆかん波たつなりめ

さよらの島 「増」大帖に忠岑「よそにみしよらのしまのふた心ありさしきげはさちたのます」

たさしま 「訂」活木にはなくしまさあり。万葉には。たくのしまの誤りか。然らば出雲こそ有り

ふきあげのしま 「増」古今歌に菅原朝臣

「秋風のふきあげにたてる白菊は花があらぬ

ながはま 八雲伊勢云々

うちでの 打出濱。八雲近江

千里の濱 伊勢物語二紀の千里の濱に

ありける云々チリのはまともむ歎

おふのうら 生浦也。八雲伊勢。古今大誓

所の誓いせ誓により

「訂」弘云。イ木になふの浦さあり。さては異

る音のあまた聞えたるいと心にくし。すのこに火ともし

たる。物へだてよきくに人の忍ぶるが夜中などうちおど

ろきて。いふ事は聞えず。男も忍びやかにうちわらひたる

こそなれ事ならんとをかしけれ

しまは

うきしま。やそしま。たはれ島。みつしま。松がうらしま。

がきの島。さよらの島。たさしま。

はまは

おふのうら。しほかまのうら。滋賀のうら。またかの浦。こ

浦は

おふのうら。しほかまのうら。滋賀のうら。またかの浦。こ

浦は

おふのうら。しほかまのうら。滋賀のうら。またかの浦。こ

浦は

おふのうら。しほかまのうら。滋賀のうら。またかの浦。こ

浦は

おふのうら。しほかまのうら。滋賀のうら。またかの浦。こ

浦は

おふのうら。しほかまのうら。滋賀のうら。またかの浦。こ

浦は

おふのうら。しほかまのうら。滋賀のうら。またかの浦。こ

浦は

おふのうら。しほかまのうら。滋賀のうら。またかの浦。こ

浦は

おふのうら。しほかまのうら。滋賀のうら。またかの浦。こ

浦は

おふのうら。しほかまのうら。滋賀のうら。またかの浦。こ

浦は

おふのうら。しほかまのうら。滋賀のうら。またかの浦。こ

百一段

百一段

すへて六観音 拾芥云。六観音配三六道。大慈観音。千手観音。地藏三昧。大慈観音。正観音。破三昧。三昧。獅子無畏観音。馬頭観音。道三障。大光普照観音。十一面觀音。三修羅道三障。天人丈夫観音。准提觀音。入道三障。大覺深遠觀音。如意輪觀音。天鼓三障。今案真言宗并法宗宗除三准提觀音。奉加三不空觀音。不動尊。底哩三昧經上曰。不動者是菩提心。大寂定觀也。猶觀軌委。六日經二曰。二切障。故住三火三昧。一類師。藥師琉璃光如來。要文我此名號一經其耳。衆病悉除。心身安樂。これなり。猶本願功德經に十二願を説けり。文しげれば尋しや。釋迦牟尼。釋迦名義集一曰。攝華云。此云能仁寂默。寂默故不住生死。能仁故不任三涅槃。悲智兼運立此高稱。猶委まことに一代の主にてなげすめり。名義集云。彌勒。淨名疏云。此彌勒氏。過去爲王名三善流支。慈育國人。自爾至今常名三善氏。姓阿逸多。此云三無能勝云々。みろくは。釋迦の付屬をうけて一生補處の菩薩とす。第一戒切のばつめに下生し給ふ。成佛して三會に説法すべき故に常來導師と申す。尺取入滅よりみろくの出世までは五十七俱低六百千歳をへたつこいへり。彌勒下生經には將來久遠劫於此國界成佛云々。河海普賢。名義集云。彌勒菩薩云。一約百億。體性周備曰普。隨緣成德曰賢。二約諸位。曲濟無遺曰普。都攝諸法曰賢。三約三位。體無不周曰普。調柔善順曰賢。云々。尺取法師經を説きはり給ひてのち。普賢はさち東方の寶威徳佛國より佛前に來りて。總法して四法成就の法門を得て。未代惡世に法華經の行者を守護し惡魔夜叉等の難をまねかれしめ。未來は成佛せしめんとして二十句の陀羅尼をさけり。猶普賢菩薩勸發品に委。

地藏。大藏經目指要錄三曰。地藏十輪經十卷。唐玄奘三藏譯。地即坐厚無邊。藏即包含無盡。以三十佛輪轉二十惡業之故。六道の衆生濟度のほさち。

文殊。名義集云。文殊師利。此云妙德。大經云。了見佛性。猶如三妙德等。淨名疏云。若見佛性即具三德。不縱不積故名三妙德云々。四攝記云。曼殊室利。唐言三妙吉祥。

物がたりは

住吉。うつほの類は。殿うつり。月まつ女。かたの少將。梅壺の少將。人め。國ゆづり。むもれ木。道心すむる松が枝。こまの物語は。ふるさかははりさし出てもいれしがをかしき也。

住吉物語 二卷あり。異本十卷あり。源氏物語に用られしは二卷の住吉物たりと見ゆ。うつほの類は。うつほ物がたりのたぐひさいへる事なるべし。うつほは廿卷あり。是より以下の物語今の世所見なし。入雲抄抄書の中にも住吉物たりの外はしるませ給はず。代にもつてに絶々なりしなるべし。源氏物語野分巻等に。其名出たり。又おちくほの物語にも辨の少將。世の人にはたの少將と申めりあり。又右近が父季繩の少將を交野の少將といふよし玄旨法印の百人一首抄に有。然共物語は世に傳はらず。

野は

嵯峨野さらへ。いなび野。かた野。こま野。あはづ野。飛火野。しめぢ野。そうけのこそすすろにをかしけれ。なごさつけたるにかあらん。あへの宮城野。かすが野。むらさき野。

陀羅尼は

あかつき。ごきやうは。夕ぐれ。

あそびは

よる人のかは見えぬほど。あそびわざはさまあしけれど。もまりもをかし。こゆみ。あんふたぎ。こ。

百四段

嵯峨野さらへ。昔は秋萩の時など野遊し。猶虫など新與の所なれば。更んさいへるなるべし。こま野。山城の駒のわたりにや。猶可尋之飛火野。入雲大和春日野也。袖中抄云。國史云。和銅五年正月廢高安峰。始置高見及大和國春日峰。以通平城一也云々。しめぢ野。入雲云。しめぢ野。山城。是在清輔初學抄云。おなト所なるべし。あへの。攝州住吉と天王寺とのあはしに安野あり是にやむらさき野。入雲云。近江。万葉あはれさす云々。愚案後拾遺に長能。紫の野にさよみしは山城今宮云。陀羅尼。名義集云。秦言三昧持。集音法。能持令不散不失。又維摩三昧持。謂持善不令失持。惡不生。此双紙の心はだらにはあつきよみてよしと。前にいへるすむぐたらに算勝だらに手だらにの類にや。一切經藏効戈の二箱に。陀羅尼集十二卷あり。啓の箱にも陀羅尼集十卷あり。其外諸經のだらにあけていひがたし。訂弘云。原本には「陀羅尼はあかつき。ごきやうは夕ぐれ」さやうにかき下しにききたり。古抄本には下の如く各一段としたり。これをよしとすべし。よりに今改めり。あそびは。音聲をいひ又よるづのあそびわざをいふべし。願相名云。蹴鞠は足道踏也。打毬毛丸打者也云々。愚案蹴鞠はよつれの鞠也。打毬は手まりの類也。又闘機活法に。擊毬あり。杖にてうちて上下せしむるあそび。こゆみ。源氏若菜の上巻に月のうちに小弓もたせてまゐり給へとあり。訂活本には。この次に「女はへんいさおかし」さあり。

百五段

するがまひ。もさめい。東遊是也。花鳥餘情云。東遊謂云。先二番。次踏河舞。次求子。次加太於呂之調子。高麗双調也。たいへいらく。順和名の道曲調の所に云。太平樂出時曲調三之胡少子武皇樂合歡臨太平樂之愈也云々

もろこしにかたきにやして。漢高祖項羽と鴻門の會に。酒宴の半に項羽の臣。亞夫高祖をうたんとて項莊に劍をぬいてまはしめてひまあらば高祖をうかむふに。項伯といふ者高祖をいたはりて。劍をぬいて共にまひて。高祖をへだておほひて終にうたせざりし。この項莊が舞を太平の曲をまひしと太平記にもしるせり。是を敵にやしてあそぶといふなるべし。史記九十一樂論が傳に委

鳥のまひ。河海云。鳥樂迎段類也一越調也云々。順和名に沙陀調の曲迎段類。妙音天淨南竺國に此樂を傳ふ。婆羅門僧正之を見て。愛傳て唐に地さめす本朝に傳云々。拾芥云。按頭乞食調云々。但和名道調曲の中に云。按頭波音如未云々。らくそん。落躑。高麗一越調の樂也。納蘇利ともいへり。五月六日の觀鳥の日雅樂寮これを奏するよし花鳥餘情にあり

仍以此兩調子爲先。琵琶の黃鐘調は白の平調に合する也。掃部頭貞敏四調を定めたり。風香調也。合三笛黃鐘調。反風香調也。合三笛一越調雙調。黃鐘調は。合三笛平調。清調は。合三笛平調雙調。そかうのさう。蘇香急。和名云。盤港調蘇合香大曲。俗具云蘇香云々。其樂の念語別にあり。二反めの時口傳ありとぞ。うぐひすのさへづり。春露鳴和名に一越調云々。源氏花宴に春の鶯さへづるといふまひいさ面白くもあり。此樂の事なるべし。増。柳川後百首に俊賴。「あを竹を袋の上人ふきたてはるのうぐひすさへづらすなり」さうふれん。想天橋。相府蓮。和名平調河津同。愚案太平廣記二百四十二經談部云。唐司空子願以三樂曲有想天橋之名。其不雅詩歌。又云。有笑曰南朝相府曾有「瑞霞」改「想天橋」自「后」人誤讀及「不」改。國中補。訂。活本には。このさうふれんの上で「もさうのこまは」の十七字あり

引ものは
琵琶。さうのこま
しらべは
ふかうでう。わうしきやう。そかうのさう。うぐひすのこ

さほうよりきこゆるが。人の笛ふきてありくなく時也。又人のふきある所を我まほりてきくさまこ。兩説皆可。用。文選長笛賦云。乍近乍遠さあるおもかげ有。訂。此段活本には。「すてふさころにさしいれてもたも何ともし」さある二十字なし。あるをよしとすべし

よこおえいみしうをかし。さほうよりきこゆるが。やうくちかうなりゆくもをかし。ちかうりつるがはるかになりていとほのかにきこゆるもいとをかし。車にてもかちれても馬にても。すべてふさころにさしいれてもたるも。何とも見えす。さはかりをかき物ばなし。ましてさしりたるてうしなどいみしうめたし。あかつきなどに忘れて枕のもとにありたるを見つけたるもなほをかし。人のもとよりとりにおこせたるををしつゝみてやる

さうのふえ 笙。名云笙生也。象一物貫地
生一以飽爲之。其中空以受聲也。說文曰笙
正月之音。物生故謂之笙。三簧。象鳳之聲。

ひちりき 賦文云。暮簫。簫管也。發三簧聲。
爲頭載竹爲管出三胡地。

なからばかりより 精留の調の半分はよりひちりきを吹たる
之。猶口傳

ほごこそ 此所は句さすべし。此のこそはこ
そあれと云べきあれを省きたるなるべし。

然らざらんにはこそのかりの結辭なくし
て語格さのほごこそ

うるはしき髪もたらん人もみなたちあがり
物のそむるに面白き時は毛髪立てぞつとす
る也。源河後百首二俊頼

「琴のれのことばにむせぶ夕ぐれば毛もいよ
立ぬそむるさむさに」

「増」演云。笛をちもしろく聞くほどに。ひち
りきの吹出ぬれば。興さめて身の毛もたつ
つ

弘按。此説よろし。原註の如く髪を毛立て
面白しといふはうけ難し。下文十一卷一丁
にも「身よりあせのあゆれば髪などもあが
りやすらんさおぼゆ」とあるを思ふべし

百十段

行幸 朝興行幸。野行幸。諸社の行幸の類
也。拾芥儀式部云。行幸前陣ニハ。京職

もたゞ文のやうに見えたり。さうのふえは。月のあかき
車などにて聞えたるいみしうをかし。所せくもてあつ
ひにくくぞ見ゆる。ふくかはやいかねぞ。それはよこぶえ
もふきなしありかし。ひちりき。いとぶつかしう。秋の
虫をいはくくつはむしなどにして。うたてけちかくきか
まほしからず。ましてわろうふきたるいとにくき。り
んじのまつりの日。いまだおまへには出はてず。物のうし
ろにてよこぶえをいみしう吹たてたる。あなかもしるど
きくほどに。なからはかりよりうちそへてふきのほせた
るほどこそ。たゞいみしううるはしきかみもたらん人も
みなたちあがりぬへき心ちぞする。やうく琴笛あはせ
てあゆみ出たるいみしうをかし

見るものは

行幸。まつりのかへさ。御賀茂まうで。りんじのまつり。そ

神祇内蔵正兵衛部民部雅樂治部式部官史軍
人少納王卿左右近衛。中央御典女官侍中。
後陣典内膳造酒下等。猶神社行幸の儀等

まつりのかへさ 賀茂祭の翌日きのふの使
の中少將舞人等の歸さ。禁中にも還立の
儀あり。江次第六云。還立儀東如昨云々

御もまうで 關白賀茂詣。卯月申日。公
事根源云。此事は必賀茂祭の前日ある事也。

主人は乗車にて。地下殿上の前庭有。白妙
の御幣。神賀の唐櫃やうの物をたげもた
しむ。琴持管笠深香さいふ物を召供す。上
達部車をつらぬ。社頭にて神拜あり。上下界
めもさまらぬ

「訂」こは語格さのほごこそまらさずさあ
るべき所也。ゆはすの誤りか

かざしの花 臨時の祭に簾を結びて蓋さし
て。挿頭の花を指て。長橋馬道の西のつま
に立て。重土器を舞人哥人に給ひて。後か
ざしの花を給ふ。江次第二委

かものやしらのゆふ露 愚案此哥かもの社
の姫小松といふべきをゆふだすき書たが
へしにや。古今集に冬の賀茂の祭のうた。

藤原のさしゆきの朝臣「千早ふる賀茂の社
の姫小松万代ふさも色ばはらト」此哥な
るべし。但又同集に「千早振かもの社のゆ
ふ露ひさびも君をわけぬ日はなし」といふ
哥をうたへるにや

「訂」弘云。此註「愚按より。此歌なるべし」と
あるまで削るべし。こはふようなる心す。

下の歌にてよくあたるをや
御こしにたてまつり
天子の御典ハ慈華さて。慈をかざるこそ

りんじのまつりの事を云ふ
らくもりてさむけなるに。雪すこしうちちりて。かざしの
花あをずりなごにかよりたるえもいはずをかし。たちの
さやのきはやかにくるうまだらにて。しろくひろう見え
たるに。はんひのきのやうしたるやうにかよりたる。やづ
りばかまの中よりこほりかどおどろくはかりなるうち
めなごすべていとめでたし。今すこしおほくわたらせま
さほらせて見たきか
ほしきに。使は必にくけなるもあるたびはめもとまらぬ。
されど藤の花にかくされたるほどはをかしう。猶過ぬる
かたを見おくらるゝに。べいじうのしなあくれたる。柳の
したがさねに。かざしの山吹おもなく見ゆれども。扇いと
たかくうちならして。賀茂の社のゆふだすきとらたひた
るはいとをかし

是より前にいひし事を委いふ
行幸にならずらふる物は何かあらん。御こしにたてまつりた
るを見おくらせたるは。あけくれ御前にさふらひつかふ

みつなのすけ 風盤の御綱を奉行する大舎
人助をいふにや。百寮訓要云。大舎人寮宿
直の事を司る。令に見えたり。節會の諸卿
なめす事は大舎人の役也。行幸の時御綱な
ごを奉行す云々
雲林院ちそくわん
紫野の邊にや前註

かれにせん
【訂】原本は「せん」とあり。今活本并二万
抄によりて「しん」と一つを補ひつ
をかしけれ
【訂】原本には「せん」の二字なし。さては上の「
その結び」とのほす。活本によりて改めつ

まつる事もおほえず。かうくしういつくしう。つねは何
ともなきつかさ。ひめまうちぎみさへぞやんごとなうめ
官人とも
東堅子前註
づらしうおほゆる。みつなのすけ。中少將などいとをかし
是亦一段
まつりのかへさいみしうをかし。きのふはよろづの事う
行紐の奇麗なりし
るはしうて。一條のおほちのひろうきよらなるに。日のか
けもあつく車にさしいりたるもまはゆければ。扇にてか
くし。ゐなほりなどして久しうまつるも見ぐるしうを
せなどもあへしを。けふはいとどくいて。雲林院ちそく
ゐんなどのもとにたてる車ども。葵かつらもちなへ
見ゆ。日は出たれど。空は猶うちくもりたるに。いかでき
かんと目をさましおきあてまたる。郭公の。あまたさへ
あるにやとさこゆるをでなきひさかせは。いみしうめで
たしとおもふほどは。鶯の老たる聲にて。かれにせんご
おほしくうちそへたるこそ。にくけれどまたをかしけれ。

ことなりぬや
事成時至れりや
【訂】活本には「ことなりぬや」とあり。按に。源
氏実録にも「ことなりぬや」といへば。さあれば
本のまゝにて聞ゆべし
またむ。無期。いつともなしの心也。
赤ききぬ着たる物ごもたへ
【訂】活本并に万葉抄にはまた「む」とあり。是
も本のまゝよし
御こし
江次第六。賀茂祭頭次第
云。長官。御輿駕丁前後廿人。輿長左衛
各五人。女嬬十人。執物十人。腰輿上下異
これに奉りておはしますらん
齋院是のりておはしますらん。齋院道の
ほどは御車にて。御社近くては腰輿に召る
い。江次第六。路頭次第云。齋王先詣三下
社。暫留三社頭小舎。脱三却衣裳。更三清服。即
駕三腰輿。入三社。輿長一行列在式。未到
社十許。文齋王下。腰輿。歩行以三兩。布三遺
就三社前左殿座。一本思出三社外。駕三牛車。一
上社。下思
あふひよりはしめて青栲葉ごもの
人々のうざせるあふひ草。青栲葉のきぬな
ご。桃華葉云。青栲葉。表青丹の黒み
あり青雲云々。イ木造にいひつれど程もな
く歸らせ給ふに。御使ひのいさしの癸もす
こしなやや。桂の葉もうちしほみて中
ノいさえんに見えたり。御車の過させ給
ふむより始め出し車ごもの扇からさぬ。
青栲葉なるごもなまめかしう見ゆる。雜
色所の衆のあまむ云々
亂れきて
【訂】古抄本にはひれきてに作れり。按にこは

○増訂枕草紙春曙抄卷之九

まつりのうへさままつり
いつしかどまつり。御社のかたよりあかき。ぬなどきたる
ものごもなごつれだちてくるを。いかにぞ。ことなりぬや
などいへば。まだむごなどいらへて。御こしたごしなども
てかへる。これに奉りておはしますらんもめでたく。けち
か。いかにでさるけすなごのさふらふにかとおそろし。は
るかけにいふほどもなくかへらせ給ふ。あふひよりはじ
めて。青くちほごものいどをかしく見ゆるに。所の衆のあ
白重夏の服
をいろしらがさねを。けしきはかり引かけたるは。卯花垣
卯花に似たる心
根ちかうおほえて。郭公も陰にかくれぬべうおほゆかし。
きのふは車ひとつにあまたのりて。二あるのなほし。ある
は狩衣など亂れきて。簾取おろし。物ぐるほしき迄見えし
君達の。齋院のえんがにて。ひのささ。ぞく麗くて。けふは一
人づゝをささくしく乗たるしりに。殿上わらはのせたる
物見の人歸すに
もをかし。わたりはてぬるのちには。などかさしもまごふ

しりがひのかの
【訂】活本には「しりっひもしらぬにやあらん
の云々」あり。万葉抄におな
あやしうきしらぬまなれど
職の香なれば
物くるほしけれ 狂の字。あやしき物の
香に愛着すれば

其折のかのこりて
端午の比香。其折の香のおなトやうに
かされたるもいみしうおかし云々

いさのよりもめでたし
今幾たる香よりもと。或本に此あまに。
「六月廿日ばかりにいみしうききし。煙の煙
のみ煙す鳴出して。風の氣色もなきに。い
さ木高き木ぞもおほかるが木くらく宵き
中より。黄なる葉のやうくひるがへりお
ちたるこそするに真なれ。秋の露おもひ
やられて。おなト心にいみしうききひるな
かに。いかなるわざせんぞ。風の風もゆる
心うつす事ありなんやさいふほどに。あたり
つらんほどのあせおもひやるも。心ざしあま
く入れ云々あり

水のちりたるこそかかしけれ 此次に
「下すたれを高やかをなほさみたれば。車
のながえはいさつやうかに見えて。月の影
のうつりたるなごいさおかし行
てあれしとせはゆ」あり

てはしらせていくこそいとすゞしけなれ。まして琵琶ひ
内にてひく
きならし笛のねきこゆるは。過ていぬるも口をしく。さや
うなるほどにうしのしりがひのかのあやしうかきしら
ぬさまなれど。うちかざれたるがをかしきこそ物くるほ
しけれ。いとくらやみなるに。さきにもしたる松の煙の
香の車にかゝれるもいとをかし
五日のさうぶの秋冬過るまであるがいみしうしろみかれ
てあやしきを。ひきをりあけたるに。其折の香のこりてか
ゞへたるもいみしうをかし
よくたきしめたるたき物の。きのふ。きとどひ。けふなごは
うち忘れたるに。きぬを引かつぎたる中に。煙ののこりた
るはいまのよりもめでたし
是亦一段
是は我のりてゆくまな
是亦一段
只今何ばかりなる事あらんに。此香を忘れて
なでしこのいみしう色なきにむすびつけたる文をさりいれたる。この曲
かくつかふ風だにあかすぬるくおほえつる。もつひきあけつ
れ

百十一段

くた物 和名寒。クタモノ菓子
ふぶくる 鹿の鹿鹿
かなまり 今輪也前註
ほいづき 増和名酸漿。餘名苑云酸漿一名浴神珠。和
名保々豆木
松の水 訂活本にはなし
花びら 和名云。藤。草木花片也

さみの物ぬふ 急く物を縫糸
さうだい 灯籠
人のむすめのこと 舌つきにてあいだれたるなさらへるなるべ
し
くりや 厨和名
字葉云。厨煮狂之所ものを烹調るまこと。
臺所なるべし
侍ひのさうし 曹司は局を同じ。今の世の
部屋
かげはん 懸燈籠人の禪に用の。源氏書
三院の御まへに淡香のかげはとあり

水のちりたるこそかかしけれ
下すたれを高やかをなほさみたれば。車
のながえはいさつやうかに見えて。月の影
のうつりたるなごいさおかし行
てあれしとせはゆ

月のいとあかき川をわたれば。牛のあゆむまゝにす
しやうなどのわれたるやうに水のちりたるこそをかしけ
れ
かほきにてよき物
法師。くだ物。家。あぶくろ。すゞりの墨。そのこの目。あま
りほそきは女めきたり。又かなまりのやうならんはあそ
ろし。火桶。ほいづき。松の木。山ぶきの花びら。馬もうし
よきはあはきにこそあめれ
みじかくてありぬべき物
さみの物ぬふ糸。さうだい。けす女の髪。うるはしくみじ
かくてありぬべし。人のむすめのこと
人のいへにつきとくしき物
くりや。侍ひのさうし。はしきのあたらしき。かげはん。童
女。はした物。ついたてとらじ。三尺のきちやう。しやうど

童女。はした物。イ本おぼきやかなる童女。
よきはした物とあり

かき板

【訂】活本になし
【増】かき板とは。物を載せてかきもて運ぶに
用る板也。前後二人して持つ板也

ひさげ。てうし。中のはん

【訂】此三は。万歳抄。イ本。活本。に皆なし
中のはん。中盤盤の次なるを云也。河津云。延長御記曰。系女。調三和者。染巻。供進給。侍臣。盛。中。盤。二。下。下。

【増】真云。懸盤とは異也。大盤に對して。小なるを中はんと云也
ひさげなりたるらう。臂折處也。鹿のなれまがりゆく也

【増】源臣は折臂翁なるべしとの説あれど。取らず
ちくわうみかきたる。竹驚雷也。桐火桶などに竹に驚なごまにかきしん

【増】此の竹驚の説は其非也。万歳云。ちくわうみ或本に竹玉繪とあり。作り繪と有しをかきひがめたるにやとあり
眞云。万の説よろし。是に従ふべし

物へいく道に
【増】こは別段也。是より以下次々も皆別段に
て例の筆すまび也

けいし。前にも出たり草付のはき物也。後
世の足駄の類也

つみたる物

【訂】活本には。おほきにつみたる物とあり

るのかざりな風流にせしん
くよくしたるるおおくろ。からかさ。かき板。たなづし。ひさ
け。てうし。中のはん。わらうだ。ひちをりたるらう。ちくわ
うあかきたる火をけ

物へいく道に。きよけなるをこの。たて文のはそやかな
るもちて。いそぎゆくこそいづちならんとおほゆれ。又き

よけなるわらはべなどの。あこめいとあきやかにはあら
ずなへはみたる。けいしのつやゝかなるが。かばはつちか

ほくついたるをばきて。まるきかみにつみたる物。もし

いはこのふたに草紙などもなどいれてもてゆくこそ。いみ

しうよびよせて見まはしけれ。門ちかなる所をわたるを

よびいるゝに。あいぎやうなくいらへもせでいくものは。
つかふらん人こそおしはからるれ」
行幸はめでたき物。上達部君だち車などのなきぞすこし
さうとくしき」

よるづの事よりも。わびしけなる車にさうぞくわろくて
物見る人いともどかし。説經などはいとよし。つみうしな
ふかたの事なれば。それだに猶あながちなるさまにて見
ゆるしかるべきを。まして祭などは見でありぬべし。下す
だれもなくしてしろきひとへうちたれなごしてあめりか
し。たゞ其日のれうにとて車も下すだれもしたて。いと
くちをしうはあらじと出たるだに。まよる車など見つけ
てば。何しになど覺る物をましていかばかりなる心ちに

てさて見るらんおりのほりありく君だちの車のおしわけ
てちかうたつ時などこそ心ときめきはすれ。よき所にた

つかふらん人こそ
其従者のすげなきをつかふ主人もさぞなど
おもはるゝと
上達部君だちなどの
行幸には公卿以下歩行にて供奉なればこ
よるづの事よりも
是より行幸に上達部の車のなきがさうく
しきさいひしに付て。車の見ぐるしげなる
がわろき事どもをいふこ
説經などはいとよし
説經圖の車などは舞うしなふ後世のため
なれば。さまで風流に花籠ならでもよしと
見でありぬべし
て文字にこりてよむ也。祭見る車見ぐるし
くは見すしてあれかしと
たゞ其日のれうにとて
祭見ためにきてと。是より祭の物見車
は花やかに有たき心をいふと
したて
【訂】原本したてしとあり。今活本古本により
て改めつ
何しになど。かく人におさるさまにては何
しに物見にたたるぞと覺ると
よき所にたてんさいそがせば
物見のたよりによき所か。人よりまきにこ
おもひて車ないそがせ置したる心と

させて下り

みかさ山やまのはあけしあしたより。

とかいせ給へり。なほはかなき事にてもめでたくのみお

ほえさせ給ふに。はづかしく心づきなき事はいかで御ら

んせられじとおもふに。さるそらごとなどの出くるこそ

くるしけれ。とをかしうて。こと紙に雨をいみしうふらせ

て。しもに

雨ならぬ名のふりにけるかな

さてやぬれぬに侍らんとけいしたれば。右近内侍な

どにかたらせ給ひて。わらはせたまひけり

三條の宮におはします比。五日のさうぶのこしなどもち

てまあり。くす玉まらせなど。わかき人々みくしけどの

なごくす玉して。姫みやわか宮つけさせ奉り。いとをかし

き薬玉はかよりもまらせたるに。あざさしといふもの

みかさ山 后宮の御遊哥なるべし。彼笠を
いせて出たる朝より。さましく人のいふ事
あるを仰せらるゝなるべし

はづかしく心づきなき
万事めでたき后宮に心付なきふるまひは見
え申すとのみ遠慮しつるに。かゝるうは
さ出来て。しられまわらせし苦しさをこ

雨ならぬ名の 清少の付句。心はか
うき名の世にふりて。后宮にまでしられま
わらせしはづかしさをこの心なるべし

右近内侍 前註す
三條の宮に 勅物云。長保元年八月九日自
職御曹司二移三御生昌三條宮

さうぶのこし
萬葉集。祭中へ奉るか。后宮へもまらせし
なるべし。公事根源端午の所に云。六府あ
やめのこしを南殿の階の東西に立。又時の
花を折そへて同くおく。四日は朝餉の庭に
これを立云々。雪園抄に開あり

みくしけどの
薬玉は糸所より奉れど。姫宮などには女中
何も手づからしてまらせらるゝなるべ
し。拾芥云。御極御殿在。真履殿甲。以上藤
女房二別當云々

ませこしに
〔註〕紙註には。ませこしといふに同下。ま
りこし物なれば。ませこしは其非なり。

〔註〕紙註には。ませこしといふに同下。ま
りこし物なれば。ませこしは其非なり。

〔註〕紙註には。ませこしといふに同下。ま
りこし物なれば。ませこしは其非なり。

〔註〕紙註には。ませこしといふに同下。ま
りこし物なれば。ませこしは其非なり。

〔註〕紙註には。ませこしといふに同下。ま
りこし物なれば。ませこしは其非なり。

〔註〕紙註には。ませこしといふに同下。ま
りこし物なれば。ませこしは其非なり。

〔註〕紙註には。ませこしといふに同下。ま
りこし物なれば。ませこしは其非なり。

〔註〕紙註には。ませこしといふに同下。ま
りこし物なれば。ませこしは其非なり。

〔註〕紙註には。ませこしといふに同下。ま
りこし物なれば。ませこしは其非なり。

〔註〕紙註には。ませこしといふに同下。ま
りこし物なれば。ませこしは其非なり。

〔註〕紙註には。ませこしといふに同下。ま
りこし物なれば。ませこしは其非なり。

〔註〕紙註には。ませこしといふに同下。ま
りこし物なれば。ませこしは其非なり。

〔註〕紙註には。ませこしといふに同下。ま
りこし物なれば。ませこしは其非なり。

〔註〕紙註には。ませこしといふに同下。ま
りこし物なれば。ませこしは其非なり。

〔註〕紙註には。ませこしといふに同下。ま
りこし物なれば。ませこしは其非なり。

〔註〕紙註には。ませこしといふに同下。ま
りこし物なれば。ませこしは其非なり。

〔註〕紙註には。ませこしといふに同下。ま
りこし物なれば。ませこしは其非なり。

〔註〕紙註には。ませこしといふに同下。ま
りこし物なれば。ませこしは其非なり。

〔註〕紙註には。ませこしといふに同下。ま
りこし物なれば。ませこしは其非なり。

〔註〕紙註には。ませこしといふに同下。ま
りこし物なれば。ませこしは其非なり。

〔註〕紙註には。ませこしといふに同下。ま
りこし物なれば。ませこしは其非なり。

〔註〕紙註には。ませこしといふに同下。ま
りこし物なれば。ませこしは其非なり。

〔註〕紙註には。ませこしといふに同下。ま
りこし物なれば。ませこしは其非なり。

〔註〕紙註には。ませこしといふに同下。ま
りこし物なれば。ませこしは其非なり。

〔註〕紙註には。ませこしといふに同下。ま
りこし物なれば。ませこしは其非なり。

○増訂枕草紙春曙抄卷之九

を人のもてきたるを。青きうすやうを艶なるすゞりのふ

たにしきて。これをませこしにさふらへはとてまらせた

れは

皆人は花やてふやといそふ日もわがこゝろをは君ぞし

りける

と紙のはしを引やりてかゝせ給へるもいとめでたし

十月十餘日の月いとあかきに。ありきて物見んとて。女房

十五六人はかり皆こきしぬをうへにきて。引かくしつゝ

有し中に。中納言の君の紅の張たるをきて。くびより髪を

かいこし給へりしかば。あたらしきぞとてよくもにたま

ひし哉。ゆけひのすけとぞわかき人々はつけたりし。しり

にたちてわらふもしらずかし

成信の中將こそ人の聲はいみしうよう聞き給ひしか。

おなじ所の人の聲などは。常にきかぬ人は更にえき

かきし

かきし

かきし

かきし

かきし

かきし

かきし

かきし

光のこそ。小世繼廿九段にも見えたり
大藏卿 勳物云。正光。長保二年職八頭左
中將。四年十月大藏卿。愚案。正光。白
無道公六男。母左馬頭有年女。
見わけ聞分の物を

「指」万歳抄云面を見わけ聲を聞きわねこそ
蚊のまつげのまつるほど
もろこしに殿師といふ物也耳聞二聞下
蟻動二謂之半聞と聚求にあり。列子湯問
篇に。魚鱗といふ虫。群飛て。集於蚊
を。世にめよくみ。さき人も其形を見
聞かぬを只黄帝と容成子と神を以見れば
山の阿のこそく。氣を以さけば雷の聲の
こそしと云々

其人だにえきいつけで
彼そばにある人の扇の事いひし事
塵ほみ 塵のたまれる也。源氏物語巻にだ
いばんなごたへはちりばみてさあり
かさいしなご云々

「訂」原本を上に付て成たるか。さいしと
よみて。註に或説に塵指といふ物云云と
あるは非
傍註。たる(句)かさいしなご云々。筆の
ささごあり
遺按。さいしは。今いふ塵指にはさみてつ
かふをいふ

女はかみみ鏡こそ心のほど見ゆる 鏡は女
のかたち作る物也。はおろそかなるは不暗
なる心と見え。よきは心にくするべし。鏡
は手かく人よくたしなむべければ。おろそ
かなれば手をすかぬ心見ゆべしと
おきくち

かず。ことに男は人のこゑをも手をも見わけ聞分ぬ物を。
成信はひそかにいふ事をもき、知給ひしと云
いみしうみそかなるもかしこうき、わき給ひしこそ」
大藏卿はかりみ、とき人なし。誠に蚊の塵のおつるほど
も聞付給ひつべくこそ有しか。職の御さうしの西おもて
に住し比。大殿の四位少將と物いふに。そばにある人。此少
將に扇のゑの事いへとさよめけは。今彼君たち給ひなん
此正光のみいささいいかりて
にをど。みそかにいひいるよを。其人だにえきいつけで。
何とかくとみよをかたぶくるに。手をうちて。にくしと
てのちいはんごの給ふに、くきほごにさなはふれ
の給はゞけふばたよじとの給ふこそ。いかで聞給ひつら
んどあさましかりしか」

硯きたなげに塵ほみ。墨のかたつかたにしどけなくすり
ひらめかし。らうおほきに成たるかさよしなごしたるこ
そ心もとなしと覺れ。萬のやうどはさる物にて。女は鏡硯
こそ心のほど見ゆるなめれ。おきくちのはさめに塵ほな

ど打捨たる様こよなしかし。男はましてふづくろきよけ
におしのでひて。重ねならずはふたつかけこの硯のいと
つきのよきと
つぎくしう。まきゑのさまも態ならねどをかしうて。墨
筆のさまなども人のめとむはかりしたてたるこそをかし

けれ。とあれどか、れどおなじ事とて。くろはこのふたも
かたしおちたる硯。わづかにすみのゑたる。ちりの此世に
ははらひがたけなるに。水うちながして。あまじのかめの
口おちて。くびのかざりあなのほど見えて人わろきなど
ひと目わろき心
も。つれなく人の前にさし出かし。人の硯を引よせて手習
ひをも文をもかくに。其筆なつかひ給ひそ。といはれたら
んこそいとわびしかるべけれ。うちおかんも人わろし。猶
つかふもあやにく也。さ覺る事もしりたれば。人のするも
いはで見るに。手などよくもあらぬ人の。さすがに物かよ
まほしうするが。いとよくつかひかためたる筆を。あやし

「指」遺按。おきくちは。今いふまつげにて。
硯のつぎの上の方はさきに塵のあるな
いふ
弘云。原註に。筆をかく所のあはひをいふ
と。さあるは非也。今削り去りつ
こよなし 無越こゆる事もなく鹿相に給
置たるさまと

とあれどか、れど
よくもてなしても。あしくても。物かけは
おなト事とての心也。是より物にかまはに
硯のさまをいふ
くろはこのふたもつたしおち
荷給せぬ黒染の硯の蓋のふちのかたく
かけたるなり
あまじのかめ 青磁也。焼物の水入の
の形なると

「指」遺按。おきくちは。今いふまつげにて。
硯のつぎの上の方はさきに塵のあるな
いふ
弘云。原註に。筆をかく所のあはひをいふ
と。さあるは非也。今削り去りつ
こよなし 無越こゆる事もなく鹿相に給
置たるさまと

とあれどか、れど
よくもてなしても。あしくても。物かけは
おなト事とての心也。是より物にかまはに
硯のさまをいふ
くろはこのふたもつたしおち
荷給せぬ黒染の硯の蓋のふちのかたく
かけたるなり
あまじのかめ 青磁也。焼物の水入の
の形なると

「指」遺按。おきくちは。今いふまつげにて。
硯のつぎの上の方はさきに塵のあるな
いふ
弘云。原註に。筆をかく所のあはひをいふ
と。さあるは非也。今削り去りつ
こよなし 無越こゆる事もなく鹿相に給
置たるさまと

とあれどか、れど
よくもてなしても。あしくても。物かけは
おなト事とての心也。是より物にかまはに
硯のさまをいふ
くろはこのふたもつたしおち
荷給せぬ黒染の硯の蓋のふちのかたく
かけたるなり
あまじのかめ 青磁也。焼物の水入の
の形なると

とあれどか、れど
よくもてなしても。あしくても。物かけは
おなト事とての心也。是より物にかまはに
硯のさまをいふ
くろはこのふたもつたしおち
荷給せぬ黒染の硯の蓋のふちのかたく
かけたるなり
あまじのかめ 青磁也。焼物の水入の
の形なると

水がらに
[増] 濁液。墨汁を多くふくませたるをいふか
こはものややりと

あさなし事なめたさ待たるさまにや
[訂] こはいさか解しかたし。今万葉抄の既
によれば

こは(句)ものや(句)やりさか(句)な(句)に(句)
ほそびつふた云々。さいふこにてりこ
れは物や遺戸か何やはそびつなごいろく
の物をいふことあり

ほうびつふた
ぬり桶の前二註

されざさいはんやは
さやうに悪くつひひなすきて。其筆なつ
ひ給ひそさもいふべき事ならればせんかた
なしと

さしのぞきたるを見つけ
我のぞくを人見付て驚てさめらるるも他
しさとふくめたる詞。いはれたるもさ句
を切べし

ふもふ人の事
是はよのつねの人のさめたるが他しきを
いふ。思ふ人のぞきさめられし事に
はあらずと

あしこまでもゆきつがさるらめど
あしこ
はしこ。其文いまだ彼項まで行付ま
けれど。我心はまつおちつく心

さまに
のやうに水がらにさしぬらして。こはものややりと。かな
にほうびつふたなどにかきちらして。よこさまになけ
おきたれば。水にかしらはさしいれてふせるもにくき事
ぞかし。されざさいはんやは。人のまへにゐたるに。あな
くらあふよりたまへといひたるこそ又わびしけれ。さし
のぞきたるを見付ては。おどろきいはれたるも。おもふ人
の事にはあらずかし」
今さらにいふべきならぬと
遺所の朋友親類などにて
消息と
めづらしといふべき事にはあらねど。文こそ猶めでたき
物なれ。はるかなるせかいにある人の。いみしくおほつか
なくいかならんとおもふに。文をみれば只今さしむかひ
たるやうにおほゆる。いみじき事なりかし。我思ふ事を書
やりつれば。あしこまでも行つかざらめど。こゝろゆく心
ちこそすれ。文といふ事なからましかは。いかにいふせく
口くれ胸ふたがる心
ふもふ人の事
あしこまでもゆきつがさるらめど
あしこ
はしこ。其文いまだ彼項まで行付ま
けれど。我心はまつおちつく心

げにこまわりによ
文をめでたき物といふは。まことこまわ
りならずやと。イ本此次に。川はあすか
川ふちせさだめなくなどあり。前に出たれ
ば其本を用す

もどへとてこまわるとかきつれば。おほつかなき
をなぐさむこちするに。まして返事見つれば。命さの
ふべかめる。げにこまわりや」
いまだ其文やられども先心
おほつかなき

百十四段

うまや 今の馬つぎ宿々也。和名云馬々
ヤ。唐令云每三十里一驛。若地勢險阻及
無二水神一處則置驛之。延喜式凡諸國驛路
邊植三葉樹。今在來人得休息
もち月のうまや

なしはら 梨原。和名云近江栗本郡梨原
のぐちの 野口。和名云丹波船井郡。又周
防玖珂郡

ふなをか 山城紫野邊驛所也。古は清淨の
地也。三代實錄云。軍師舒奈法。蝦夷賊。害五
穀之時。於害食之州。島内。清淨處。解之。置
之。故命。陰陽寮。於二城。北船岡。修。此。祭。蓋
標。清淨之處

さもをかばさの 和名山城乙訓郡。新開。
梁塵秘抄。神樂探物野。このさ。は。い。づ。の
さいぞ。されり。ら。が。し。に。さ。が。れる。さ。も。か。の。征。
かたらひのを。

増。瀧。接。万。歳。に。さ。夜。ふ。けて。か。たら。ひ。の。岡。の。郭。公。ひ。さ。り。ね。さ。め。の。床。に。き。く。な。さ。あ。る。は。何。に。出。た。る。に。か。お。ほ。つ。か。な。し。も。し。は。か。たら。ひ。は。か。た
こ。ひ。の。詠。や。六。帖。を。か。み。ち。の。く。に。あ。り。さ。い。ふ。な。る。か。た。こ。ひ。の。を。か。我。身。に。そ。ふ。る。こ。ろ。か。な。と。見。え。たり
人見のを。 住吉物語に。嵯峨野へ子日に出て「手もふれでけふはよそにて歸なん人見の岡の松のつらさよ」

ふるのやしろ 延喜式。大和國山邊郡石上
坐布留御魂神社。日本紀神代卷。そそののをの
み。こ。八。岐。の。大。蛇。を。さ。り。給。へ。る。銀。を。蛇。の
龍。正。と。名。づく。是。今。石。上。に。い。ま。す。由。見。ゆ。
神皇正統記。神武天皇。豐布津。さ。い。ふ。銀。を。宇

○増訂枕草紙春曙抄卷之十

うまやは

なしはら。ひくれのうまや。もち月のうまや。のぐちのう
まや。山のうまや。哀なる事を聞置たりしに。又哀なる事
の有しかば。猶どりあつめてあはれ也

をかば

ふなをか。かたをか。どもをかばさののおひたるがをかし
き也。かたらひのをか。人見のをか

やしろは

ふるのやしろ。いくたの社。たつたのやしろ。はなふちの

百十五段

百十六段

時の人をおぼす成けり 帝の御心にも。此
中將を當時の賢真とおぼまし。老父の後
見ありし故なるべし

いさほしくて 此國邊きに似て意味あり。
帝がおろかにおぼして老人を捨給ふ故天
下の人うさみまわらせて。此國のうさ
ふ難をもすくはんさおもふ人なれど。中
將はさすかにいさほしく思ひまぬらすご
之

さきにして行かたにしろしをつけて
老父のなしへしごとく木のさきにしてな
るいかな末さしるしてなり

して。時の人におぼす成けり。もろこしの帝この國のみか
是も此帝お
るかにて老人を捨給ふ心ある故に他國よりうさみなるべし
ごをいかにばかりて。此國うちとらんとして。常に心見あ
イ心見をなし
らがひ事をしておくり給ひけるに。つやくとまろにう
つくしけにけづりたる木の二尺ばかりあるを。これがも
此國人いづれも若くて分別なかりし故
と末いづかたぞととひ奉るに。すべてしるべきやうな
ければ。帝おほしめしわづらひたるに。いとほしくて。おや
中將の心
のもとにゆきて。かうくの事なんあるといへば。只はや
からん川にたちながらよこさまになけ入見んに。かへり
てながれむかたをすゑと志してつかはせとをしふ。ま
中將參内して
ありて我しりがほにして。心見侍らんとて。人々らしてな
けいれたるに。さきにして行かたにまろしをつけてつか
はしたれば。まことにさなりけり。又二尺ばかりなるくち
二正
なほのおなじやうなるを。是はいづれか男女とて奉れり。
又さらに人えしらず。れいの中將ゆきてとへば。二つをな

七わたに 七曲

いみしからん物の上手ふようならん
至たる物の上手も此玉には緒をえまほさ
さ。ふようは不用

又それに今すこしふさきをつけて 蟻の腰
にはほそきをつけて。又玉か貫くべき緒に
今少ふさきなせんさて。申しつささいふ物
にせし
みつをぬりて
蜜の香につきて蟻のよくゆくべきがためな
るべし。イみちさありおな事。源氏鈴虫
にみちをかくしほろけてさあり。是も蜜

らべて尾のかたにはそぎすばえをさしよせん。をばた
木のえた
らかさんをもとしれといひければ。やがてそれを内裏
女さ知れ
のうちにてさしければ。まことに一つはうごかさず。一つ
さやうにする
はうごかしけるに。又まろしつけてつかはしけり。程久し
雌雄をしろしたる
うて。七わたにわだかまりたる玉の中どほりて。左右に口
穴のまがりまほりし
あきたるがちひさきを奉りて。これにをどほしてたまは
彼國俗此玉に緒か貫
らん。此國にみなし侍る事なりとて奉りたるに。いみしか
そこばく
らん物の上手ふようならん。そこらの上達部よりはじめ
中將老父に問
て。ありとある人しらすといふに。又いきてかくなんとい
老父の詞
へば。おほきなるありを二つとらへて。こまにはそき糸を
つけ。又それに今すこしふさきをつけて。あなたに口にみ
中將其由を帝へ申
つをぬりて見よといひければ。さ申て。ありをいれたりけ
るにみつのかをかぎて。まことにいとどうあなのあなた
のくちに出にけり。さて其糸のつらぬかれたるをつかは

日本 ひのもさよむべし。又日本紀をや
まさふみやまよばやまさよむべきにや

只老たる父母の
是中將我父母の事をいふにあらす。すべて
世人の父母をゆるされん事をいへるなるべ
し。其中に我父母の事はこもれば。目連尊
者我母の地獄にあるをすくはんとするに。
あまれく一切の衆生の盂蘭盆をおこなはし
めて。其母をもうかましめ給へり。佛の
方便とおなすべし

ないわなに 七曲之。哥の心明之。袋双紙
にも此哥通明神の御哥とあるして。是昔
彼社の邊に旅客の宿れるに。夢に示し給ふ
哥云々。これも枕取紙に付ていへるにや

百十七段

したりける後になん。猶日本はかしこかりけり。のち
せのこ ばさる事もせざりけり。此中將をいみしき人におほ
しめして。何事をし。いかなるくらゐをか給はるべきとお
ほせられければ。中將詞之。さらけつかさ位をも給はらじ。只老たる
父母のかくれうせて侍るをたづねて。都にすまする事を
ゆるさせ給へと申ければ。いみしうやすき事とてゆるさ
れにければ。よろづの人のおや是をきよてよろこぶ事い
みしかりけり。中將は大臣までになさせ給ひてなんあり
ける。さて其人の神になりたるにやあらん。此明神のもど
へまうでたりける人に。よるあらばれてのたまひける
な。わだにまがれる玉のをいぬきてありとほしともし
らずやあるらん
この給ひけると人のかたりし
ふるものは

雪あられみぞれはにくけれど
〔訂〕活本には。雪にくれどみぞれのふるに
あられとあり
又次なる雪はの二字。下の結尾にある庭の
一字も活本にはなし
雪はひはたぶき
楡皮ぶきにふりたるがおもしるしと。次
にあられば板屋といふ。同ト

百十八段

入日
〔訂〕此の二字活にはなし
うすきばみ 薄黄之。瀬河百首口なしの色
にたなびく薄雲を雪けの空を離れ見ざらん

百十九段

すばる 昴星。和名六星の火神云々
みやうじやう 明星。和名に阿加保之とよ
めり。神樂哥吉々利々に。あかほしやみや
うじやう云々
夕つゝ 長庚。和名太白星の一名。暮に西
にあらはる。星之
よばひほし 流星。和名天津星にしもか
る名をさへつ。すばはむれし詞之

百二十一段

○増訂枕草紙春曙抄卷之十

雪。あられ。みぞれはにくけれど。雪のましろにてまじり
たるをか。雪はひはたぶきいとめでたし。すこしきえが
たになりたるほど。又いとおほうはふらぬが。かはらのめ
ごとに入て。くろうましろに見えたるいとをか。しづれ。
あらればいたや。霜も板屋。庭

日は

入日。いりばてぬる山ぎばに光りの猶とまりてあかう見ゆ
るに。うすきはみたる雲のたなびきたるいとあはれなり

月は

有明。東の山のばにはそうて出る程哀也

星は

すばる。ひこほし。みやうじやう。夕つゝ。よばひほしをだ
になからましかは。まして

雲は

明はなる、云云
〔訂〕是より結尾のあはれ也に至る六十餘字活本になし

朝に去色 古詩の賦なき、未考
〔増〕又選宋玉賦に朝陽行雲爲行雨などの意にや

霧は
〔訂〕此段原本にはなし。今万歳抄によりて補ひつ

はしり火 おく炭など飛火するをいふにや。むればしり火など番により

〔増〕古今集俳諧歌に。小野小町
「入にあはんつきなき夜は思ひおきてむればしり火にこゝろやけなり」

さきのさばくふ 未勘。但書の前飯を屋根にうちあけしをあらそひくふをいふにや

十八日清水に 世に十八日を観音の日とする事。勝尾寺の観音を。妙観といふ人寶龜十一年七月十八日より。僧俗童など十八人して。千手の像四天皇等廿日に刻み終りて。八月十八日に秘觀せたり。彼十八人も見えすなりし。これより國俗十八日を観音の日とする。元亨尺書

ないがしろなる物
〔訂〕原註に。しどげなきものさいふ義之。源

まろき。むらさき。くろき雲哀也。風吹折のあま雲。明はなる。ほとどのくろき雲のやうくしろうなりゆくもいとをかし。朝にさる色とかや。ふみにもつくりけり。月のいとあかき面に薄き雲いとあはれ也

霧は

川霧

さわがしき物

はしり火。板屋のうへにてからすのときのさばくふ。十八日清水に籠合たる。くらう成てまだ火もともさぬほどに。ほかくより人のきあつまりたる。ましてとほき所人の國などより家のぬしののほりたるいとさわがし。ちかきほどに火出来ぬといふ。されどもえはつかざりける。物見はてゝ車のかへりさわらほど
ないがしろなる物

ないがしろなる物

兵衛連巻にある詞とあるは非之。今附り
あつ。万歳抄に無禮に侮むる心とある
もあらず。ないがしろは無が代ト云フ義
也。俗になき同類などいふ意
かみあげたる 髪を下すしてゆひたるさま

からふのかはのおび 唐繪の草帯にや。凡草帯は忠名にて。其付たる金玉石角にて名をなす物也。或は白玉の。羅文帶。烏帽子。紀伊石帶。出雲石帶。飛騨帶。鳥取帶のたぐひ。原が和名に委あり。松花蔭葉にもあり。唐繪草帯可尋之

〔増〕万歳抄に云。からふなまき帯にしたる
ひつりのふるまひ 遺世の聖の進退は世にへつらふ心なき故にないがしろなるべし

ことばなめけ なめけ無禮
宮のめの 宮の部。巫祝の類也。巫祝は神になれておのづから無禮の詞もするにや。又神にはこりてその祭文もむ。人に無禮の事あるにや

かんりのちん 公事根源云。雷鳴陣とは。昔雷聲三度高く鳴れば。大將以下近衛の次將まで。弓箭を帯して御殿の孫座に候て帝を守護しつりし。將監以下は雷聲をきて雨殿に侍ふ。是を雷鳴陣とは申之。大内の藤芳宮をば雷鳴の聲とも申にや云々。御四宮記に委し。舍人とは將監以下近衛等を云ふ。此時近衛の隨身殿勢によりて雷無禮なる事あるにや

すまひ 七月相撲の節さて禁中にあり。其相撲人をも云ふ。昔勇力の者なれば。我力を頼て人を軽んじ無禮なるにや

女官どものかみあけたるすがた。からゑのかはの帯のうしろ。ひじりのふるまひ
ことばなめけなる物
宮のめのさいもんよむ人。舟こら者ども。かんりのちんの舍人。すまひ

の舍人。すまひ

さかしき物

さかしき物
〔増〕實の字などの意にてかしこきもの、とこ
いさやうのみとせし
むかしは三年に成て足たぬためしもある
に。今やうは賢きなるべし
物のぐこひ出て
被のぐにすべし紙麻などの類を請出るん
おのが口をさへひきゆがめて きれぬ刀に
てりきみてたちさるさま

いさやうのみとせせ。ちこのいのりはらへなどする女ども。物のぐこひ出て。いのりの物どもつくるに。紙あまたおしかさねて。いとにぶきかたなしてきるさま。ひとへだにたつべくも見えぬに。さる物のぐと成にければ。おのが

御めのとに 一宮奉宮などの御乳母なるべし
御前にそひふし
后宮女御などの御前にて見にそひふしむる

さふしきの藏人に
藏人所の雑色也。必藏人になる物なり。宗
松抄云。雑色は本員八人。代々皆轉藏人
云々
みこもたりし
賀茂臨時祭に。所の雑色。或所祭など御
をかく事あり。江次第云。於三竹藝邊發
番曲二所雑色若葉皇御等云々
外よりなりたるなどは
雑色ならで外の人の藏人に成たるこ

かはおび 草帯前註。つたつきたるこは
ひきはこえて
【増】此調上の七巻八巻にもありて。七巻に愛
くいへり。引きふくらしたると
むらさきのさしぬき
うへのきめに指貫は今衣冠といふ装束なる
べし
あこめのくれなぬならずは

たゞの女房にてさふらふ人の。御めのとにたりたる。から
きぬもぎず。もをだに用意なく。はくきぬにて御まへにそ
ひふして。御帳のうちをる所にして女房どもをよびつか
ひ。つほねに物いひやり。文とりつがせなどしてあるさま
よ。いひつくすべくだにあらす。さふしきの藏人に成たる
めでたし。こそこの霜月のりんじの祭にみこもたりし人
ども見えず。君達にづれてありくば。いづくなりし人ぞと
こそおほゆれ。外よりなりたるなどは。おな宅事なれどさ
しもおほえず
是より繁すさび
雪たかう降て今も猶ふるに。五位も四位も。色うるはしう
若やかなるが。うへの衣の色いとぎよらに。かはおび
のかたつきたるを。どのあすがたにひきはこえて。むらさ
きのさしぬきも。雪にはえて。こもささりたるをきて。あこ
めの紅ならずば。おどろくしき山ぶきを出して。からか

九十四段

法師は 臥安直前ニ律師准五位。藤氏要覽
云。律師題云。佛言律師一字名ニ律師
一字若律字也。實録云。其定十法一名ニ
【二下略】

法師は 律師。内供

九十五段

内侍のすけ 内侍につける女官也。藤氏要覽
加云。典侍四人相當從四位。掌侍三侍。唯不
得三奏請宣傳。若無内侍。若得三奏請宣傳一
ないし。掌侍といふなり。藤氏要覽加云。掌
侍相當從五位。掌侍六人正四人權二人權自上古有之。此内以三内侍爲勅當四補日爲三二也。又日圓靈殿時内侍二人直取之。只身其
侍之之授三次將一替二内侍

内侍のすけ。なすし
女は

九十六段

みやづかへ所は 女房のつかへまつるべき
所也
内 禁中
一品の宮 親王は叙品のうち一品二品三品
四品など申之。一位二位は不申之。こも
は内親王の御事なるべし
齋院はつかふかけれど 經傳をもいひて中
子院紙さいへば。選子内親王賀茂の齋院におはせし時「思へどもいむさていはぬ事なればそなたにむきてれたのみぞなく」
春宮の御母女御 或本に此次にくき物はめめをこころはあれなごいふ事あり。然とも前に出たれば今此本にまかせて不用
【訂】活本にも此の次にくきものとありて「めめをこころはあれなごいふ事あり。小一條院を今内親王といふ云々の一段あり。此抄にはこの等上の二の
巻に出たり

みやづかへ所は
内。后宮。其御はらの姫宮。一品の宮。齋院はつみふかけれ
ごをか。ましてこの比はめでたし。春宮の御母女御

百廿七段

身をかへたらん人などは
イ木身をかへて天人などはかうやあらんぞ
見ゆるものはさあり

身をかへたらん人などはかくやあらんぞみゆるの

粕也。靴の下に着し之。紅の粕ならずは山吹色などを出してさ。

ふつぐつ

〔増〕裝束抄云。史記之驪之政公彌州之尋常甚爾深雪時用之。馬道也。縁つきの道也。桐壺の巻にえさらぬめだうの戸をさし、めさあり色々のきぬごものこぼれ出たるを

〔訂〕活本には此の十五字なし

北のちん 拾芥云。朔平門北の障さいふ隠すぐさて

〔訂〕万葉抄。すぐればさあり

えいひきこして

后宮の御方の戸あきたれば見やるまき用意に冠の纒か顔におほひて過る。おもしろき禮義なるべし

〔増〕演按。此の説いかゞ此所はさしぬきなどのほころびしを女房達に見あならんがはづかしさに。願をおほふなるべし

百廿八段

たぐすぎ

〔増〕直に過ぎゆくこと

くふにち 拾芥云。幽會日。正月庚寅。辛卯。甲寅。二月巳卯。乙卯。辛酉。下略。梅月ごに右幽會日は。曆に沙汰しまるすといへど。血忌日天火地火などやうに世人さして忌憚られ。ごに人にしられぬ物といふなるべし

五六月の夕かた云々

〔増〕万葉抄云。こは芝くらべするこなるべし。或云さなへのさま歎

ささしたるに。風のいたく吹てよこさまに雪を吹かくれは。すこしかたふきてあゆみくる。ふかづつ。はうくは。なごのきはま雪のいと白くかよりたるこそをかしけれ

たぐすぎにすぐる物

はあけたる舟。人のよはひ。春夏秋冬

ことの人にしられぬもの

人のめおやのおひたる。くゑにち

五六月の夕かた。あをき草をほそうるはしくりて。あ

かぎぬきたるこ兒のちひこを笠をきて。左右にいとあはくもちて行こそ。すゞろにをかしけれ

賀茂へまうづる道に。女どものあたらしきをしきのやうなる物を笠にきて。いとあはくたてりて。哥をうたひ。あきふすやうに見えて。只何すともなくうしろさまに行は。いかなるにかあらん。をかしと見るほどに。郭公をいとなめ

くうたふ聲ぞ心うき。ほとゝぎすよ。おれよ。かやつよ。おれなきてぞ。われは田にたつ」とうたふに。聞もはてず。いか

なりし人かいたくなきてぞといひけん。なかだかあらは

かひいかでおどす人と

驚に郭公はおとれるといふ人こそいこつらうにくけれ。

驚はよるなかぬいとわろし。すべてよるなく物はめでた

し。ちごどもぞばめでたからぬ

八月つごもりがたに。うづまさにまうづとて見れば。ほに

郭公をいとなめく

郭公といふ里話をなめけにうたふ。なめくとは輕の字無禮などの心なり

ほこいぎすよ。おれよ。かやつよ。おれなき

てぞ。我は田にたつ。是なめくうたふうた

ふ。おれよは日本紀に巳の字をおれよとめ

り。かやつは。源氏玉葛に。すやつばらと

あり。宇治拾遺に。くやつといへるにおな

と。世俗にきやつといふ詞。おれなき

ぞきは。巳鳴て。番の心は郭公に巳過時

不熱さなきてぞ。我らは田に立出て早苗

るさの心。おれよかやつよは只おのれ

いふ事のかされ詞

いかりし人かいたく

是も郭公の事にや。下旬は中高童生。鼻

すぢとほりて高く生付し童を。いかでか

おどす人ぞ。人ささはかやつにうたひ

しと例のふくめ書きたる文跡なるべし

〔訂〕此説いかゞあらんうけがたし。なかつた

わらはおひいかでおどす人」と此詞誤字あ

るべし。いと解し難し

驚に郭公は云々

○増訂枕草紙春曙抄卷之十

「さよふこそ早苗とりしさいつのまにいなば
そよぎて秋風の吹」古今集

ほをうへにてなみなる
稻の穂を上にして待て田夫の直るるを

なめくぢ 節座。和名奈女久知
えせ板敷のはいき さしもなき板敷をはく
帯
殿上のがうし 合子にや引入合子など云云。
五巻

たゝ物もおぼえれば あまりおそろしきゆ
ふなるべし。女の間にておもしろきにや

出たる田に。人おほくてさわら。いねかるなりけり。さな
へどりしか。いつのまにとばまこと。けにさいつごろ賀茂
どもの新しき折敷のやうなる笠をきてさへる所の事
にまうづとて見しが。哀にもなりける哉。是は女もまじ
しゆま
らず。男のかた手にいとあかきいねのもとは青きをかり
もちて。かたなか。何にかあらんもとをさるさまのやすけ
に。めでたき事いいとせまほしく見ゆるや。いかでさすら
らんぞん
ん。ほをうへにてなみなる。いとをかしう見ゆ。いはりのさ
まことなり

いみしくきたなまき物

なめくぢ。えせ板敷の帯。殿上のがうし

せめておそろしき物

よるなる神。ちかきとなりぬす人の入たる。我すむ所に
入たるはたゞ物もおほえねは何ともしらす
たのもしきもの

すほうしたる 俗法。節座などにするこ
思ふ人の心ちあしき比
我夫など煩ひて便なき比。其友などの頼も
しきが。たのもしくいひ慰るる
物おそろしき折の
なまき子ども。女などの心をいふなるべ
し

いさほしとや思ふらん
何せもおもはざるやらんさふくめし詞
ある人のいみしう時に
是より前の詞をうけて世にありし事の物が
たりをいへるにや

「いさほしとや思ふらん」
うらめしき中には。いかで解のため悪き事
もわらひしなごこそ思へなご。ののろひ
しめのごなど。のれたがりていふこ
わうのうへのはかま
殺の表袴
すはうがされ 夏の下襲を蘇芳の下がされ
さ名付。すはうにて黒むほご。これを染む。
染色を聽たる人。錦著之。桃華。蘇菜。にあり
くるはんび 黒牛臂。桃華云。及は生の殺文
三重たすきにて染之。欄結はうす物云。
たいみて付之云々

○増訂枕草紙春曙抄卷之十

こゝちあしき比。僧あまたしてすほうしたる。思ふ人の心
ちあしき比。まことれたのもしき人のいひならさめたの
めたる。物おそろしき親ごものかたばら
いみしうきたてよむことりたるに。いと程なくすまぬむ
この。さるべき所などにてまうとにあひたる。いとほしと
や思ふらん。ある人のいみしう時にあひたる人のむこに
なりて。一月もはかどくまうもこでやみにしかは。すべて
いみしういひごわぎ。めのだなどやうのものは。まがく
しき事ごもいふもあるに。其かへる年の正月に藏人になり
ぬ。あさましうかよるなからひにいかでこそ人は思ひた
めれ。なごいひあつかふは聞らんかし。六月に人の八講ま
玉ひし所に。人々あつまりてきくに。この藏人になれるむ
この。れうのうへの袴すはうがさね。くろはんびなどいみ
しうあざやかにて。わすれにし人の車の。とみのをに。は

世の中に猶いと云々
 「訂」弘云。是より以下次の段うれしき物とある前までの數十行は活本になし。然して活本には左の數句あり
 「人のむすめはいふべきにもあらず。みやつかへをすとも。年わかう世の中いたうくつろぎなれざらんはなを」
 人にくまれん事こそ
 人にくまれん事こそ心うき物にてあるべけれとの心
 されとせんに 然共自然には傍壁にも親類にもよく思はるい。よくも思はれずにくまると物も有と
 よき人の物事は更
 上置はいふに及はず。下種も親類によく思はる。程の人は。他人も目にて見たり。よき人といはる。いさ也いさなく思ふとの心
 論語曰。子曰。孝哉閔子騫。人不問。於其父母昆弟之旨
 大學曰。宜兄宜弟而後可以教人

ん次のをひきかけつはかりにてるたりしを。いかに見る女の心をわしはかり
 ていふ此むこのちかいるを女の何と見るぞと
 らんど車の人々も。まりたるかぎりはいとほしがりしを。
 こと人どもも。つれなくるたりし物哉など後にもいひき。
 他人
 聖の事を評列
 世の中に猶いとほしと人の思はん事はまらぬなめり。「世の中に猶いと心うき物は。人にくまれん事こそあるべけれ。たれてふ物ぐるひか。われ人にさ思はれんと思はん。されどしせん。宮づかへ所にも。親はらからの中にても。思はる。おもはれぬがあるぞいと佳しきや。よき人の御事は更也。けすなどのほども。親などのかなしうする子ば。めだち見たてられて。いたはしうこそおほゆれ。見るかひあるは。ことこり。いか思はざらんとおほゆ。ことなる事なきは。又これをかなしと思ふらんば。親なればぞかしと哀也。おやにも君にも。すべてうちかたらふ人にも。人に思はれんばかりめでたき事はあらじ。男こそ猶いと有

いさよけなる人な
 美人を見捨て悪女をもつ男もあるがあやしきと
 及ぶま下からんきはなだに
 身に相應ぬよき人をも美人と思はんをばしひても思ひかけよと
 人のむすめまだかぬ人
 長恨哥云。楊家有女初長成。養在深閨一人未識
 かつ女のめにもわろし
 彼美人を捨て悪女をもつ男のあやしき事なたちかへりいふ也。決前生後の嗣なるべし返事はさかしらに
 男の返事は賢げにする物からと
 おほやけはらだちて
 外の見きく人までも腹立心。帯木巻にもしはあやなきおほやけはらたしくとあり
 「増」弘云。紫日部。すゑに心やましくおほやけはらさつよからぬ人のいふやうにくいこそ思ひたまへられし。また榮花見はてぬ夢。げにやおほやけはらたれけるなごあり
 本居翁云。おのれあつからぬ人のうへのことを。かたはらより見きいて。はらたれしう思ふと。俗にいふ法界りんきの法界此の大やけにあたり
 露心くるしきを思ひ
 心ぐるしく哀なる事を露も思ひしらぬと

あやしき事あるをいふ
 がたくあやしき心ちしたる物はあれ。いさよけなる人をすてよ。にくけなる人をもたるもあやしかし。おほやけ集にもある詞
 所にいりたちするをどこ家の子などは。あるが中によからんをこそはえりて思ひ給はめ。及ぶまじからんきはをだに。めでたしと思はんを。死ぬるはごん
 し。人のむすめ。まだ見ぬ人などを。よしと大きくこそはいかでもおもふなれ。かつ女のめにもわろしと思ふはせん
 を思ふは。いかなる事にかあらん。かたचितとよく心もをしき人の。手もようかき歌をもあはれによみておこせなごするを。返事はさかしらにうちする物からよりつかず。見捨られし美女のさま
 らうたけに打なきてるたるを見捨ていきなごするは。あさましうおほやけはらだちてけんぞくの心ちも心うく見ゆべけれど。身のうへにては露心くるしきを思ひしらぬよ。萬の事よりも情ある事は。男はさら也。女もこそめて

なげの詞なれどせちに心にふかくいらねど
 さして思ひいたる事ならねども。情しき
 詞を陰ごにもいふべき事との心
 いかに此人に思ひしりけりとも。彼陰ご
 になさけしくいひたる嬉しさを思ひ知たり
 といふほどの心ざしを見せたき思ふご
 必思ふべき人さふべき人は
 前段はいさほしきも哀共さしていふべき人
 ならぬが情しく陰にていひたる也。こゝは
 必思ふべき故も有せふらふべき故もある人
 の事
 さりわかれしもせず
 もさより思ふべき人さふべき故もある人な
 れば。たご思ひ訪へるごも取分て嬉し
 さま思はれずご
 人のうへいふをほらだつひご
 此段は
 坐興には人の噂いふ事もあるを。人の上い
 ふは一向によからぬ事と開腹立人はわりな
 く由なき事をいふ
 いかにあらん。我身を置て人の上をい
 ひたき物はいかでかはあらんご。次の詞を
 いはんごて先いふごばご
 我身をさしおきて
 我身にも悪き事ある物を。それをさしおき
 てさやうに人の上をもさしおきひたき物
 はあらんご。畢竟坐興にていふ物を。一
 向にさし腹立はわりなきごといふご
 されどけしからぬやうにも
 然ども人の噂をいふはけしからぬやうにも
 有ご。此段は坐興ながら人の噂はよる
 しがらぬごの事をたごへりいふご

たくおほゆれ。思ひいたる事ならねども。せちに心にふかくいらね
 ど。いとほしき事をいとほしとも。あはれなるをはけにい
 なくおもひ給ふらんご云々
 かに思ふらんごといひけるを。つたへて聞たるは。さしむ
 かひていふよりうれし。いかで此人に思ひしりけりと
 も見えにしがなご。つねにこそおほゆれ。必思ふべき人と
 ふべき人は。さるべき事なれば。とりわかれしもせず。さ
 さやうにさし思ふべき故もなき人の我にうしろやすさしいらへする
 もあるまじき人のさしいらへをも。心やすくしたるはう
 れしきわざ也。いとやすき事なれば。更にえあらぬ事ぞか
 し。大かた心よき人のまことにかごなからぬは男も女も
 ありがたき事をめり。又さる人もおほかるべし。人のうへ
 いふを腹だつ人こそいとわりなけれ。いかでかはあらん。
 我身をさしおきて。さはかりもごかしくいはまほしき物
 やはある。されどけしからぬやうにもあり。又おのづから
 聞つけてうらみもごする。あひなし。又思ひはなつまじき

又おのづから。又彼噂いはれし人の自然は
 聞付恨る事もあるべければ。坐興にも人の
 噂は無愛事ご
 又思ひはなつまじきあたり
 又たさし思ふまひ有ても。え思ひ捨見
 はなつまじき人の事は。いとほしや。人さ
 してはさやうの事もなごかならん。なご
 了解し思ひさければ。噂にそしりたき事も念
 下らへていはぬ物をさ也。やは助字ご。
 此段は思ふ人の事は陰うはさにもいはず。
 只なる人のうへ噂にはいふ事をいへるご
 さだになくば。さやうにだになくばご。思
 ひはなつまじき故だになき人の上ならば。
 坐興にはいひ出で笑ひもせん物をさご。是
 は赤人のうへいふをほらだつ人のわりなき
 事を立へりいひたる詞ご。こゝもごの詞
 よく心をもめて見るべし

あたりは。いとほしなど思ひとけはねんじていはぬをや。
 さだになくばうちいでわらひもしつべし。人のかほにと
 りわきてよしと見ゆる所は。たびごに見れどもあなを
 かしめづらしごこそ覺ゆれ。なごあまたたび見ればめ
 したるご
 もたゞずかし。ちかうたてる屏風のるなごは。いとめでた
 近くてたびくみる故
 けれども見もやられず。人のかたちはをかしうこそあれ。
 人のかたのたご
 にくけなるでうごの中にも。一つよき所のまもらるよ。
 見にくき物にも一所はよき所ある心
 形の悪き人も又一所は人のこのむ所あらんご云々
 見にくきもごこそはあらめと思ふこそわびしけれ」
 うれしき物
 まだ見ぬ物がたりのおほかる。又一つを見ていみしうゆ
 かしうおほゆるものがたりの。二見つけたる。心おどりす
 一の巻はごはなきも有んご
 るやうもありかし。人のやりすてたる文を見るに。おなじ
 つゞきあまた見つけたる。いかならんと夢を見て。おそろ
 しとむねつふるよに。ことにもあらずあはせなごしたる